

曰此百世之利也乃與星野祐左石井庄兵石井長右齋藤權右鈴木長兵平野伊右齋藤仁右藤本守平平野五右伯部三右河野八左龜田仁兵繩野角兵十三人議興土功大戸見村爲小櫃川上流鑿巖通溝二百廿八間巖質堅牢衆始知其可以成功鈴木勘兵精算數測量原濕經畫工器具狀請墾二原平山以東屬川越藩藩派吏巡視乃興工役是爲天保四年三月廿七日而藩貸金不盈千圓二人傾家貲借金四方藩嘉之命旁近五十二村助役役三萬九千九百四十四丁閱四星霜迄七年七月十日竣功築堰稻崎派小櫃川經藤林利根柳城四町谷向諸村溉原上鑿爲暗竇若干懸爲寬流若干所延長八千六百九十四間於是二原墾爲水田得四十五町五段廿六畝增租額五百圓旁近諸村仿其所爲墾水田三百餘所藩賞二人功賜物優勞今茲丙戌九月余與重城郡長游藏玉鑛泉途過平山祐左孫助左來見田平山學確瘠土其一變爲富庶沃地皆二人之力而今不之表則歲月之久漸歸潭滅請撰一文揭年月俾後佃斯者如其所由今辭不文不得乃記明治十九年十一月

仙臺 岡千仞振衣撰

大清欽差大臣使署隨員來安孫點君異書

田 雲 錦 鐫

龜山松丘地先に於ける溝渠開鑿の起因に就いては既に其の概要を記述せるにより是れより更に郡内溝渠の主なる者に就き其の要を記す

平山用水溝渠

龜山松丘二村に跨る龜山村坂畑字稻ヶ崎に於て小櫃川の上流に堰を設け河水を松丘村平山大原臺

朝立臺に導く其の間山あり谷あり原野あるを以て或は渠を穿ち寛を架し或は巖を截りて横穴を通ず水路の延長四里五十四間其の灌漑水田凡五十餘町天保四年五月廿七日功を興し同七年七月十日竣工す實に當地方溝渠開鑿の嚆矢たり。

大戸臺用水溝渠

龜山村瀧原字十二所に於て長十八間高三尺五寸の堰を設け小櫃川の上流を堰止め河水をば横穴を穿ち或は寛を架し松丘村大戸見字大戸臺に導く水路の延長九千二百九十五間(四里十町五十五間)此の灌漑用水によりて畑原野及荒蕪地を拓きて水田となししもの二十二町三段五畝廿九歩工費一千七百廿一兩を要せりと云ふ而して此の工事に關係せしは柳城利根高水石崎川俣切畑谷迎八郎兵衛七郎兵衛細野網場四町田面片野九兵衛鳥居臺柳瀬稻瀧の舊十八個村にして安政二卯年竣工を告げしと云ふ即ち大原朝立二原の工事を距る。

藏玉用水溝渠

龜山村藏玉地方にあり、嘉永六年の開鑿にして藏玉の朝生惣右衛門朝生仁兵衛釜釜生の手島長治折木澤の鴛田八郎右衛門鴛田彌兵衛坂畑の神作重兵衛等の首唱によりて成る水路の延長壹里三十二町二十四間工費金五百六拾八兩餘を要し得る所の水田拾四町二段七畝歩なり。

笹豊田用水溝渠

龜山村笹豊田にあり、小櫃川の支流に堰を設け横穴三千二百間(一里十七町二十間)を穿ち水路を通じて灌漑に供し畑原野等を開墾して水田二拾餘町歩を得たるものなり是れ笹の人宮野庄左衛

門の首唱により文久三亥年に竣工せしものなり。
黄和田畑用水溝渠

龜山村黄和田畑と藏玉とに跨る溝渠の全長三千八百十八間（一里二十七町三十八間）水源を濁川に取り明治十年十月起工し同十三年四月竣工工費五千圓を要し水田九町餘歩を得たりといふ。
浦田溝渠

久留里町浦田にあり字高淵に於て王守川の上流を堰き止め其の水を南北二路に分ち導きて水田に灌ぐ南路は延長千四百九十三間（二十四町五十三間）にして其の千三十六間は横穴に屬し其の數五個所に及ぶ北路は延長千五百五十間（二十五町五十間）にして其の千六十六間は横穴なり（其個所九）此の地畑多くして田少かりしが明治二年己巳浦田の人松本政右衛門等同志と謀り南路を開き明年關吉又右衛門等同志と謀りて北路を開鑿す之れにより畑を變じて田と爲す三十餘町歩なり
御腹川溝渠

久留里町と小櫃村とに跨る御腹川の上流を堰き止め其の水を水田に導く者二あり一は久留里町大谷宇大上に在り之れを大上堰と稱す、其の水路延長一里二十町之れを上溝水と稱す、創開の年月詳ならず其の初めは吉野宇堰場にありしと云ふ二は小櫃村長谷川字梶山にあり、梶山堰と稱ふ其の水路延長壹里餘之れを下溝水と稱す、寛永九年壬申創開する所なりと云ふ其の灌漑の利を享くる者久留里町大谷吉野小櫃村臺長谷川末吉俵出加惠淵三田西原三本等にして水田二百七十町餘に及ぶ。

里傳に云ふ古昔弘文天皇蒙塵の時此の地に幸し給ひ土人に教へて川水を引き灌漑の用たらしめ原野を開墾せしめ給ふ因て之を遣水と稱す是れ本溝の創始にして大上堰の水上に置く所の水神祠は天皇を祀れる者なりと。

武田堰

馬來田村眞里字武田に在り眞里谷川を堰き止め其の水を分ち南北二水路に依りて馬來田村眞里谷眞里下内橋戸國大稻中川村百目木等の水田凡そ三百町歩の灌漑に供す堰の傍に碑あり其文に曰く

武田堰碑

伊藤貞撰並書

人命之所繫以飲食爲最要而我邦人於食也特以米爲常用故米之豐歉乃繫人之休戚以爲至大矣而其收穫之多寡雖依天候之與耕耘施肥之如何以灌漑之便否爲至大關係也矣然則堰也者灌漑之淵源最可注意也況於給灌漑與飲料水我武田堰乎按武田堰者天正年間武田信重爲眞里谷城主之日開鑿山距築造堤防引諸溪水聚而爲堰人民深以爲德命之以武田今尙所以稱之也次里見氏領此地也定配水之率又以眞里谷村町原西野之地爲修繕于堰之柴塊切場於是之設備完成矣然寛政十二年八月弘化二年八月嘉永四年十月洪水荐臻堤防破壞其被害不少至明治七年六月改良舊工事構木框爲基以板壅水謀其安全矣每作此工事自官給其費以爲常例焉廿八年十月照準成規以眞里戸國下内橋百目木四區及眞里谷區赤坂組織武田堰水利組合者參酌古書採擇舊慣作爲協定書頒一本於各區爲永遠可恪之條件矣二十六年十月爲大洪水堤防復破潰其被害太甚矣復舊工事費人力與錢財不貲於是卅八年六月請諸官以彼町原之一部及西野之地造林拓殖之當是時有日露戰役之事故一以爲該紀念一以爲其所得於工事費之基

本而供一朝有事之資欲使吾人及子孫人命所繫之淵源而不涸渴也嗟乎創業守成俱不可附忽諸者也矣是以概記其來歷建碑以傳後世云爾

明治四十年十一月

關山灌漑用水溝渠

佐貫町にあり水源の鬼泪山倉澤中手澤にあるを懸樋を設け溝渠を通じ之れを導き來り佐貫町の佐貫及び龜田の水田三拾餘町歩に灌ぐ此の水路開鑿工事は龜田の大坪の人金兵衛九兵衛名主善六新宅幸七佐貫の人茂兵衛等の首唱にて文政五年午閏正月四日工事に著手し同年五月廿四日竣工せしものなりと云ふ而して此の工事を起すの初めに當りては異論白出し故障寡からざりしが首唱者及び其の關係里民は耐忍能く事に當り數多の支障を除去し遂に能く其の功を全うし以て澤を後世に垂れたり其の功寔に大なりと謂ふべし首唱者某の筆記に係る關山用水始末と題するものあり左に其の要を摘録し參考に供す。

上 大坪村金兵衛九兵衛名主善六新宅幸七我等五人ニ而水出迄數度内見致留場溝通り此位杯之所分限見斗候得共何分見切不明尤草木夥敷生茂り谷々多く見通し兼何様廿通位と押積乍然人々舊來之念願なれば随分出來可致哉ニ押斗り相願可申候尤此普請取懸り候ハハ中々容易之事ニ者成就難致尤人足出精次第ニ候由申談候處面々其儀兼而承知之事少茂無御心痛御世話破下是迄日夜水引ニ出寄會咄ニ十餘ヶ年來之願望今此時成中略其願書別紙末ニ有之右之願書差出し候處御取揚被下御作事方鈴木四郎左衛門様御見分都合二度御座候段々見立道法間敷打候處八丁有之候

關山入口ニ而川水々用水溝通り迄貳丈六尺掛樋貳拾四間場所貳個所見立其砌御代官印東傳左衛門様御手代衆御見分も御座候得共是ハよしあし普請之談シ無之候鈴木四郎左衛門様人足村役人等廿人程打連被申候者此普請随分出來可申兼而關山繪圖面相認メ所持被成人足積立千四百人其外留場江山神兩社祭板材木者諸人用相掛申候兼而百姓中承知之事可有之旨被尋候其儀承知致候趣答申此普請随分手輕ニ成就致我等存寄一ツニ而出來可致共亦出來爲致間敷共方寸ニ有之杯何歎いやみケ間敷被申聞候

中 此上四郎左衛門様存生之内者願出申間敷且此願書上有之内ニ中村者不承知之趣申參候此譯ハ村内ハ男不入殊ニ入用等茂相掛候由左候而者難澁人多有之内々取沙汰彼是邪魔入旁殊に關山水ハ往昔申觸レ山神惜之水故中々揚り不申候杯とあざけり笑此水揚り候程之事ならば昔々才智之人有て今迄捨置可申哉夫になんぞ當時之人何之智有て仕損シ入用多分かかり其時難澁致候を早々斷すへき由相聞候村方名主仁兵衛殿江申談候事承及候其後四郎左衛門様病死被致候故亦々願書差上候中略干時文政五年閏正月四日普請取掛り御作事方原田熊治郎様山田八兵衛様日々御出役夫々人足三拾人餘町地大坪百姓中村是ハ原出作之人計り出申候尤其節人足者老人子供婦人一切出不申候早朝入相頃迄未寒強候得共出精致し貳人前之働ニ御座候人足帳面別ニ細敷有之先大圖見斗草木を悉ク伐尤篠部竹多し荒之見渡出來夫々佐貫町重右衛門水盛始日々差圖通人足ニ爲堀土砂山切崩普請故手輕ニはかめ行申候谷々堀埋山之鼻切落日々崩人足一入出精致候最早八分通り溝形を出來候節中村人足五六人參り候乍然手持不沙汰に取かゝり候事も不

相成居候所江名主仁兵衛殿被參彼是被致候間此人之前氣之毒ニ存今更差加へ候も残念ながら其儘差加へ申候無程二月三日留塲迄出來十右衛門留之棟梁致彌二月下旬留出來上り是は樋之儀竹筒五六本繼に致し三流ニ渡し水掛候處夥敷揚り大勢大悅致候乍然溝通りハ形斗之ゐら出來故水多揚候は悉崩日ニ四五個所も崩是ニは誠ニ因り入候且又人々欲出ヶ程之大水を竹筒位に而者殘念何分掛樋ニ致し候ハハ心之儘に揚るべきに最早此上入用何程掛り候共厭ひ不申候是非箱樋ニ致貫度打寄どりハハニ談候間然者船大工岩瀬村庄次郎方へ懸合ニ可遣大坪村半左衛門と申談兼而仕様申含取斗即時ニ誂可申様承知致させ午五月廿二日遣候所右之次第掛合直段仕様間數貳拾貳間明後廿四日未明ニ出來無相違對談即時ニ取極致則約束之通廿四日早朝人足參拾人遣持運ヒ候處幸今日天しや日之事揚初メ致度と大工貳人町十右衛門指物屋安左衛門右四人入相前に愈々出來揚水乗せ見度由ニ而然者乗せ可申とこふばい早之樋矢を成く様夥敷大勢悅事無限是ハ日夜共大水揚六月十六日迄揚候所田渡末々迄行届皆々安心致候中此水夥敷揚り候事他領通行之人々是を見扱々浦山敷水かなと諸人目を驚し申候何様は御大名様之御領分故斯ハ出來すへき中ハハ百姓自力ニ不及事坏諺にはへりけ利。

湖 沼

概 説

本郡内には湖沼と稱する者なしたゞ自然に成れる池と灌漑に供する爲め開鑿せし溜池とあり之れを單に池と稱へ或は「セキ」言と稱ふ左に其の主なる者を掲ぐ

福野池

久留里町怒田の東方字福野にあり其の地四周山嶽を以て圍繞せられ水面凡二千百坪深さ五尋に達し水色宛も瑠璃の如く山水の景色絶佳なり、而して鯉、鮒、鱮、龜、蟹等多く棲息せるにより其の勝を探ぐる者一竿を携ふる常に往來絶えずと云ふ里人は此の池を以て大福山藏王權現(市原郡白鳥村石塚にあり)の神手洗なりと傳ふ。

大 池

清川村笹子椿の間字池谷にあり縦三百間横七十間面積一萬八千六十坪笹子椿及び中川村大鳥居の水田凡二十五町歩の灌漑に供す鮒鱮及び蓮藕を産す。

中尾池

清川村中尾の東北方字大池にあり縦二百間横九十間面積一萬五千八百七坪あり中尾菅生の水田に灌ぐ池中鮒鱮を産す。

大堰池

清川村祇園永井作の間字追越にあり縦百九十四間横百二十間面積二萬三千二百八十坪祇園永井作の水田五十餘町歩の灌漑に供す鮒鱮を産す。

上 池

根形村下新田飯富の間にあり縦五百間横五十間面積二萬千八百五十坪水田凡二百二十三町歩の灌漑用水に供せらる其の水流れて浮戸川となり小櫃川に注ぐ。

壘 池

清川村長須賀の南方字堰の上にある、面積二千二百九十五坪水田凡八十町歩の灌漑に供す池中に小島あり、辨財天を祀る池太た廣からずと雖も水の涌出すること多く一旦之れを用ひ盡すとも忽ちにして舊に復するが故に能く廣き耕地を潤すと云ふ里傳に治承中源頼朝本州を過ぐるの日此の池の傍に壘を敷き晝餐を喫す由つて此の名あり時に頼朝葭を箸とし誤つて唇を傷く怒つて箸を池中に投じ且つ曰ふ汝の屬の此の池中に生ずるを禁すと故に今に至りても池中に葭を生せずといふ。

鶴島池

飯野村下飯野の西北方字鶴島にあり、里人は概ね「サアスガのセキ」と云ふ縦百五十間横百三十間面積一萬六千四百十坪堤塘を築きて水を三區に別つ堤上には松樹を植う水田凡二十八町歩。

瀑布

田代瀧

龜山村四方木字女瀧にあり、小櫃川の上流全川此に至りて奔下し瀑布となる巨巖ありて之れを左右に分つ左を雄瀧と呼び右を雌瀧と稱す、高さ各四十尺瀧さ雄瀧は十二尺雌瀧は六尺相並んで斷崖より落つ窈々たる音響雷の如く飛沫雲を起す、眞に壯觀なり里人云ふ一雨あれば忽ちにして水勢數倍し奔流石を轉す故に瀑布の下に常に木材を筏に造り雨を待ちて之れを流すと。

澤尻瀧

久留里町怒田の西端字澤尻にあり、大日池附近より發する諸水集り合し此に至りて懸崖より奔下す高さ五丈瀧さ一丈源泉滾々として盡きず盛夏三伏の候と雖も水量減することなく其の飛下奔騰の狀頗る壯觀なり下流王守川に入る。

花輪瀧

三島村怒田澤の北方字花輪にあり、字宮の下より來る溪流此に至りて飛下すること六十尺其の瀧さ九尺に及ぶ其狀壯觀に其境幽邃なり下流は小絲川に注ぐ。

天神堀瀑

秋元村鹿野山の南方字天神堀にあり、溪水集り來り此に至りて飛瀑となる高三十八尺瀧さ四尺一名白瀧と稱す、鹿野山宿を距る十數町深谷の間にあるを以て久しく世に知られざりしが近時漸く節を曳き其壯觀を賞する者多きに至る。

急駟瀧

一に喜與志の瀧に作る關村の御代原關豐岡村の豐岡の界にあり、關の字堰の谷より發する溪流此處に至り懸崖を轉下し間堀川天神山の上流となる高さ七十尺瀧さ九尺直下は深淵をなし奇觀なり。

宮内瀧

環村宇藤原の東方東宕澤にあり、高八十尺瀧さ二十尺瀑布は三層となりて奔下す、其の兩岸は斷崖壁立し絶えて日光を見ず水聲急雨の如く飛沫四散して雲霧と爲る故に炎暑三伏の候能く萬斛の涼味を味ひ得るなり。

白絲瀧

駒山村志駒の東方深山の間にあり、幽谷より出づる溪水集りて地藏川と爲り此處に至りて斷崖より直下すること二十四尺濶さ三十尺に及び其の狀宛も白絲を懸けたるが如し蓋し此の名ある所以ならん瀑布は壯大ならずと雖も其の境の幽邃なると其の景致の奇絶なるを以て稱せらる。不動瀧

天神山村梨澤の東南方深谷の中にあり、溪水の直下すること二十尺幅十二尺なる一條の瀑布を爲す瀑布の上數町の處に流水の作用にて瀾底を穿ち井泉の如く水を湛ふる者七個あり、其狀竈に似たり之れを七竈と名づく其の左右は斷崖にして崖上には老樹蒼鬱として晝猶ほ暗く四邊寂寞すゞろに神をして寒からしむ里民此の地を雨降神と稱し靈地となし旱天には雨を祈る。

森 林

概 説

木郡の地は山嶽丘陵に富み到る處に蒼々たる森林を見るべしと雖も其の多くは個人の所有に歸し樹齡長からざるを伐採せると地積概して廣濶ならざるとにより林相の雄大なる者を望むこと稀なり、然れども官有及び共有林には往々觀るべきものなきにあらず左の其の著しき者を掲ぐ。

奥山官林

龜山村笹の南方に在りて香木原を圍む東は草河原南方は安房との國界の連山に接し西は奥畑山林に連る大約東西五十町南北三十町面積千二百町松杉樅梅等の樹數概數百七十餘萬本と云ふ山勢險阻に

して北部には雜樹鬱茂し南部には松杉等の巨木鬱々蒼々たり往時は猪鹿多く棲息せしが近時漸く其數を減じ形影すら見ること稀なりと云ふ地質の廣濶なる樹數の豊富なる實に南總第一の巨林たり。

奥畑山林

三島村豊英旅名宿原正木奥米大岩辻森二入怒田澤秋元村西日笠の地に跨る東は奥山官林に連り南方は安房郡に界し西は環村高宕山に接し其面積大約三百十町餘山勢險しくして多く北方に傾斜し山の中腹以上には松樅等に富み其れより以下には雜樹雜草の鬱々として繁茂するを見る此の山林は往時は官有なりしが四隣の住民は古昔より此の山林の利に頼りて生活せる緣故を有するにより明治八年官に請うて其の共有と爲すを得たり林相の大なる南總中の巨擘なり。

原 野

概 説

本郡の地たる山勝ちにして平地乏しきが如くなれども河川の流域と沿海の地に於て可なりに廣き平野を見るべし而して是れ等の地は悉く開墾せられ良田遠く相連る唯だ丘阜に臺地に山麓に雜木灌木生ひ茂り里人の野或は原と稱し叢野の狀をなせるものありしが維新後多くは樹栽をなし森林となれり然れども今尙ほ舊稱を存す。

須田原

久留里町向郷の西方にありて松丘村の山瀧野に連る東北に愛宕山を仰ぎ南には大坂の淺間山を望む地勢概ね平坦にして面積大約九十五町に達す往時は雜草生ひ茂れる曠野なりしが維新後里民官に請

うて松樹を植栽し今は漸く森林の狀を呈するに至れり傳へ云ふ戰國時代里見氏の老臣須田將監此地に住す故に此名ありと。

戸崎野

小櫃村戸崎の西南方にありて龍神山(一名戸崎山)の東北麓に當り大約南北二十五町東西十二町面積三百五十町あり往時は草茅獨り繁茂し里人の秣刈場として利用するに過ぎざりしが明治十七年伏見宮家其百五十町歩に松樹を植栽せられしより里民も亦之れに倣ひ官に請ひて樹栽を爲ししにより現時は蒼々たる樹林を見るに至れり。

法木野

小絲村法木の東方にありて、龍神山の西北麓に當る北は長石西南は絲川大井戸の地に連り東は小櫃村戸崎に接す面積大約百六十五町地勢西方に傾斜す往時は里民の草刈場として用ひしのみなりしが明治十七年伏見宮家戸崎野と共に樹栽せられしより里民亦之れに法り殖林に努めしかば曠野より化して森林の狀をなすに至れり。

明谷原

富岡村下郡の西南方にあり、鎌足村矢那久留里町間の里道其中間を貫く地勢概して平坦にして面積大約四十五町歩あり往時は葎雜草獨り其繁茂を恣にせしが今は多く樹林となれり。

宿野(一に四空野に作る)

馬來田村眞里谷の東北隅にあり、東は市原郡戸田村栢橋に接す面積大約八十五町餘地勢概ね平坦に

して草茅繁茂し唯里民の秣刈場たるに過ぎざりしが明治十七年藤澤周司(新瀉縣七族)等の樹栽を圖りてより漸く樹林の狀をなすに至れり。

萩原

平岡村上泉下泉の東北方にありて北の方は市原郡姊崎町の天羽田に接す面積三十餘町歩地勢平坦にして草茅生ひ茂り里民の秣刈場なりしが維新後里民官に請ひて之れを墾せり。

鎌倉街道原

長浦村藏波の東方にあり、地勢概ね平坦面積大約百二十町歩雜草離々たる中處々に涌泉を見る傳へ云ふ鎌倉時代現今の海濱の道路通せず此の處鎌倉街道に當れり因りて此の名を存すと今尙ほ當時の徑路あり其の遺蹟歴々觀るべし。

臺木野

鎌足村矢那の東南隅にあり、南方は小絲村大谷中村大鷲大井等に接す面積大約百六十町歩陵あり谷あり地勢高低多し往時は唯茫茫たる草野にして里民の草刈場たるに過ぎざりしが明治十四年兵庫縣人本間弘造等の名義にて官に請ひ櫻井勉之れが開墾樹栽に努めしにより現時は蒼々たる森林をなす

上野

秋元村東猪原の東南方にありて東粟倉に連る面積大約九十五町歩地勢松丘村大坂の淺間山の脈に連るを以て陵谷相交り平夷ならず往時は雜草の唯繁茂せる曠野なりしが維新後里民官に請うて樹栽をなせり。

秋元村市宿の西南方にありて市場に連る面積大約四十町西方に鹿野山を控へ地平かならず中央より東に亘りて地勢略々平坦なり往時は雜草生ひ茂り狐兔の來往するに過ぎざりしが維新後里民官に請ひて之れを開拓し樹林の間に桑園を見るに至れり。

大野臺野

小絲村大野臺の東方にあり、北は糸川に連り南は秋元村東猪原及び松丘村山瀧野に接す面積大約百町地勢西北に傾斜し勾配急なり往時は萩薄の草野なりしが維新後官に請ひて樹栽をなししにより今は森林となれり。

鬼泪野

小絲村萩作の南方鹿野山の北麓に當る鬼泪山と草野相接するを以て鬼泪野と稱すれども固より鬼泪山の部にはあらず、面積大約百六十町地勢平夷なるあり傾斜あり丘阜ありて一樣ならず野を貫きて鹿野山に登る道路あり曾て草茅茂生せる曠野なりしが近年里民官に請ひて樹種を栽植し漸く林相を呈せんとしつゝあり。

大鷲野

中村の大鷲及び大鷲新田のある所にして東方は鎌足村矢那に接す面積大約七十町地勢凹凸陵あり谷あり田圃林藪と相錯雜す故に雜草萩茅のみ生せしが維新後兵庫縣八本間弘造等の官に請ひて之れが開拓に努めしより或は圃となり或は樹林となり幾多の變遷を経て今は森林をなすに至れり。海洋並びに海岸線

概 説

本郡の地は西及び西北の二面海に面す北方市原郡界より南方安房郡に接する明金岬に至る海岸は總べて東京灣浚波を以て洗はる此の間曲汀碧灣沙洲岬角相交り海岸線は延長十六里餘に及ぶ左に此等の海岸線と水域との形勢を説く。

長浦海岸

市原郡界長浦村久保田より同村今井に至る、海濱は丘陵近く海に迫り所々に斷崖絶壁あり其の麓には狭き沙濱を刺し絶壁に沿ひて木更津線走る海岸線には屈曲なく海深著しく淺く退潮の時には里餘の外に出でて螺蛤の類を拾ふを得べし此の海中淡水を湧出する所あり、里人之れを奇とし靈泉として尊崇し框を設けて井となし神手洗井と稱す。

今井より小櫃川の河口に至る海濱は丘陵の迫れるを見ず海岸線には屈曲なく沿岸概ね平坦にして耕地漁村沙濱相連る。

小櫃川の河口

小櫃川の河口は金田村と巖根村との間にあり、其の流出せる泥沙は堆積して河口を埋め三角洲を造り渚遠く海中に斗出せり之れを畔洲といふ尙ほ其の搬出せられし土砂は風濤のため或は流され或は吹き寄せられ次第に遠近の海灣を埋めて洲渚を造る木更津港の如きは浚深に努むと雖も忽ちにして其の深さを減じ大船を泊するに至らざるは蓋し之れが爲めならんか。

畔 洲

畔洲は又伴洲とも盤洲とも書けり、小櫃川の海に入る所にあたる三角洲にして今畔戸に屬す海中に斗出ること凡そ二十六町許地勢低平にして砂原をなし西方に延びて海中に入り暗洲なること一里餘風浪に従ひて變動常無し船舶往々之れに觸れ害を蒙ることあり、明治十一年海軍省水路局にて目標を設けしが幾何ならずして風浪の爲めに奪はれ其の痕跡を留めずなりぬ水路志には盤洲鼻は羽根田鼻の南東九海里其の地甚だ低し其の濱より約一海里半の間は泥堆淺灘ありて此の鼻を擁す盤津鼻より富津崎まで約十二海里間もまた淺灘伸延す而して此の間灣形をなすとあり。

木更津灣

畔洲より西南周西村妙見鼻に至る間海水深く陸地に入り海岸線は彎曲をなし其の狀外耳に似たり之を木更津灣と稱す。

アイヌ語耳をキサラと云ふキサラツの稱は蓋しアイヌ語にて此の灣形を稱せるより起れるにはあらざるなきか。

灣の廣袤大約東西二十八町南北二里十八町其の深さ満潮の時一尋干潮には沙を露し海底には岩石なく泥沙のみにて平滑なり木更津港は其の北部にあり、海淺ければ汽船は陸を距る一里餘の處に投錨す海中更に濤と種する水路を設け舩舟によりて陸上との連絡をとる然れども干潮の時には舩舟と雖も阜頭に著するを得ざりしにより其の乗客の如きは或は徒歩し或は腕車に依れり暮春の交風暖に氣朗かなる日海草浮動し小魚波間に躍れる海中を輕波を擧げて車行するは眞に天下の奇觀なりき佐野常民一詩を賦して曰く「長灣成弓形海波與地平汽船膠不進腕車載客行」と然るに近時築港の議起り

明治四十年四月港灣浚渫に著手し投費七萬八千餘圓大正元年竣功し舊時の面目を改め干満に係らず阜頭より直ちに舩舟に乗するを得るに至れり。

木更津港の南に櫻井阜頭あり濤によりて舩舟を通じ乗客貨物を取扱ふ。

畔洲より櫻井に至る海岸は丘陵遠く距たり一帶に低平なる沖積地にして耕地或は市街をなす櫻井より妙見鼻に至る間は海に迫れる丘陵の崩壞して山骨を現はし絶壁をなせる所あり或は其の麓に狹小なる耕地と沙濱とを殘せるあり或は漁戸或は小肆店の點々縣道に沿へるを見る總べて木更津灣は遠淺にして干潮の時には遠く一面の平沙と化す多く種々の貝類を生じ且つ近時筭をたて海苔の養殖盛んに行はれ海産の利頗る大なり。

畔洲より妙見鼻に至る海濱を木更津と種し又黒戸の浦とも唱ふる者あれば黒戸の浦は即ち木更津灣なるが如し（黒戸の浦の黒戸を畔戸に作り浦を濱とも云ふ）然れども又青堀村の海濱までをも黒戸の浦なりと唱ふる者ありて現に芭蕉翁のほとぎす啼くや黒戸の濱底といへる俳句を彫りし碑の青木の海岸に建てるを見れば或は畔戸の濱といへるは畔洲より以南布引の浦（布引の浦は富津町の内西川新井富津の海濱をいへるが如し）までを稱せしにあらざるなきか。

小糸川の河口

小糸川の河口は妙見鼻の南にあり、此の川の泥沙を流出すること小櫃川の如く大ならざるにより未だ畔洲の如き三角洲を作るに至らざるも亦絶えず河口に洲渚を作り海面を埋む此の河口より富津鼻に至る、間には海岸線に多少の屈曲あれども海深深からざれば港灣をなすに至らず海面は一體に遠

淺にして干潮の時は平沙遠く露る此の海濱には筵を建て海苔の養殖盛んに行はる。

布引浦 西川の海濱より富津鼻に至る間を布引浦と稱す傳へ云ふ橋比賣命の海に入らんとし給へる時波上に敷き給ひし絶疊の漂著せし所なるにより其の名ありと岩坂日記曰く絶疊の漂ふ所故に名ありと。

富津鼻 富津町の西方にあり、沙洲海中に斗出すること三十町許其の餘沙海に入りて暗洲と爲る其の徑東部の最も廣き所に於て十餘町其の形狀鋭三所形を爲して正西を指し西南相模の觀音崎と相對し其の間相距ること三里許海峽を爲す洲上概ね平坦にして松樹密生し地は細沙なれども缺損せず洲背に到りては草木を生じ風潮に隨つて其の形狀及び方向を變ず。

富津暗洲

富津の暗洲は富津鼻の餘沙の海に入りたるもの扁平にして長く尖りたる沙洲西に延びて海中に斗出して斷續すること一里二十町許横徑三町乃至五町なり、風濤に隨ひ動搖起伏す故に之れを生き洲と稱す船舶之れに觸るれば渦卷かれて没す之れを分ちて「トビス」「ゴミヤ」「大ツカ」「眼ノツカ」「大ミツカ」「トミツカ」「黒ツカ」「大ロク」と呼び總稱して水隠洲といふ退潮甚しき時は歩いて「大ミツカ」に到るを得れば其の深さ推して知るべし富津第一海堡は其の暗洲の首に第三海堡は其の尾端に置かる。

南總郡郷考には富津暗洲を「女セ」「一ノセ」「丸コス」「大ツカ」「トビス」「ワキス」「小ミツカ」「大ミ

ツカ」とせり。

富津海峽

富津海峽は富津暗洲と相模三浦郡觀音崎との間を稱す、幅約二里航路一條は稍々深しと雖も其の他は淺くして潮流極めて急なり。

富津鼻を廻りて浦賀水道の岸に出れば波浪荒く海岸の白砂は急坡をなし塵埃を留めず浪白く地清らかに而して干潮の時と雖も海沙を露すこと數十間に過ぎずこれより大貫町小久保磯根崎に至る間を下津と稱す海岸は低平にして彎曲をなす。

磯根崎

大貫町小久保の西南方にあり、丘陵海中に突出すること大約五町其の高さ三百尺許岬角をなす之れを磯根崎或は磯根山と稱す、西の方海を隔て、相模の觀音崎と對す第三紀岩露出し波浪岬脚を洗ふ其の音響風雨の兆ある時は著しく遠方に聞ゆ故に數里の遠きに在る者も磯根鳴れり雨なりといひて天候を卜す岬上老松亭立し風光頗る佳なり。

磯根崎より南方は後に概ね丘陵を負ひ斷崖壁立し岩礁散亂し白浪之れに激するあり、或は狭き沙濱の長く連るあり海岸線は灣形をなし其の深く灣入せる所を天神山港となす。

天神山港

湊町と天神山村との沿海大約十五町灣形をなす深き干潮にて七尋滿潮の時は二尋を加ふ海底巖石を以て成れりと雖も暗礁無し灣西北に面し風濤を遮ざる岬角島嶼無きにより大船巨舶を泊すべからず

唯だ天神山川（一名湊川）港の南部に注ぎ川口廣さ約八十間消さ二尋餘水底沙礫にして岩石無ければ船を泊すべし之れを湊と稱し小船常に輻輳す。

天神山港より南は第三紀の凝灰岩層露出し或は削るが如き峭壁屹立し或は峨々たる岩礁波間に伏す風光眞に賞すべし海岸線は半月形の曲線を描き金谷港に至りて凹形に變ず。

金谷港

明鐘崎其の南端に斗出し北陸に一小灣をなすもの之れを金谷港となす、大約東西七町南北六町深さ干潮の時十尋滿潮にて三尋を増す海底巖を以て成り暗礁無し西風の時は灣の方向西に面するにより風濤を受くと雖も其の他に於ては良好なる碇泊所たり灣を繞りて金谷村あり附近より金谷石と稱する建築石材を出し又魚具の利多きにより輕軻小舟の出入多し。

明金岬

金谷村の西南上總と安房との國境にありて鋸山の山脊延びて絶壁をなし海中に盡くるものなり、其の側面には第三紀の凝灰質の砂岩角礫岩等露出し峭壁をなし其の下には怪巖奇石白浪に隠見し海中に斗出すること約五町横徑四十間許西方を指せり、岬の地勢分れて石理上總に屬する者は北に安房に屬する者は南に走る一葦水を隔て、相模の三浦半島に相對し岬上眺望絶佳なり。

第六章 地 質

本郡の地質を説かんには先づ帝國の地體より關東地方及房總半島に及ぼし終に本郡それに至らざれば其要を得かたかるべし故に此序次により左に其の概要を述べんとす。

大日本群島は亞細亞大陸の沿岸に於て東北より西南に走れる一新山脈の一部にして凹面は大陸に向ひ凸面は太平洋に臨める彎曲せる三個の弓形即ち千島列島本州列島琉球列島より形成せらる而して臺灣は別に一弧をなせり。

本州列島は三彎中の最大なるものにして更に二個の隆起帶より成れり其の北北東樺太島より本州島の中部に達するを北彎といひ其の南西の方より其の中部に至るを南彎といふ此の南北二彎に接する所に現出せる高峻の隆起を富士帶とす南の方マリアナ群島より起り火山群島豆南諸島を經本州島を横斷して北の方日本海に達せり此の富士帶より以北を北日本と稱し以南の地を南日本と稱す、千島彎は北東の方カムチャツカ半島の南端より來りて千島帶に於て北彎に合し琉球彎は南西の方澎湖群島より起り九州島に來り南彎に連る而して臺灣島はフィリッピン群島に連接する隆起帶に屬す。

地質構造より觀るときは本州列島は其の太平洋に面する一帯の地は整然たる水成岩より成り最古より最新に至るまでの地層秩序正しく發育す之を其の外帶又は表面と稱すべく其の日本海に對する地方は地層の排列不規則にして新舊錯綜して現はれ火山多く噴出巖に富めり此の一帯の地域を内帶又裏面と爲すべし而して此の内帶及び外帶の分界に當りて裂罅線あり之を中帶と稱す火山の多くは此の線に沿

ふて迸出せるが如し。
關東地方は北日本に屬し北彎山系一名樺太山系の西南端を占め其の外帶と中帶とに屬する地層より成れり。

北彎南彎の二大山系の連接せる對曲の東北翼の一部を構成する山塊を關東山塊と稱す、此の山塊は一個の獨立せる地域にして西南は富士火山系及金峯山三國山等の花崗岩塊に限界せられ東北は第三紀及び第四紀より成る關東平野に接す此の山塊の南には三浦半島と海を隔てて房總半島とあり。

新生代の初期に於ては北日本の大部分は蒼波の下に没せられ關東山塊の如きは漂茫たる洪濤の中に島嶼の形狀をなすに過ぎざりしか當時盛んに活動せる火山の噴出物は漸く海底に沈積し其の物質は次第に加はる横壓力の作用によりて隆起し新に陸地を構成し後幾多の變動を重ね局部の陥没隆起等交々起り房總半島銚子半島の如き先づ形成せられ漸く進んで關東平野其他は構成せられしなり。

關東地方の地體を構成する岩層中最古のものは始原大統の晶質剝岩系にして之に次て古生大統の秩父系下部(御荷鉍系)秩父系上中部及び小佛系ありて之を貫くは蛇紋岩橄欖岩班礫岩輝岩玢岩等の噴出岩を以てす其の次に位するものは中生大統にして此の統にありては侏羅系白堊系のもののみ發育し三疊系は全く之を缺けり。

中生大統に次くべき新生大統に於て第三系之最舊時代に屬する始新統はただ小笠原島に於て發見するのみ其の中新統は武州五日市の盆地秩父盆地上野中小阪下野鹽原等に於て發見するを得べし。
中新統を被覆する最新統は關東平野の第四系古層の下部に多く發し又房總半島三浦半島等の丘陵を構

成するもの多く之に屬す。

第三紀層成生後沈積物等によりて構成せられしを第四紀層と稱す、關東平野房總半島の西北部常陸の南部等は之より成る此の第四系に新古の別あり、一を第四紀古層一を第四紀新層と稱す關東平野の高臺の地を成せるものは前者に屬し其の卑低なる地を構成するものは後者に屬す。

房總半島は新生代の第三紀に其の一部を構成せられ其の大半は第四紀に於て構成せられたるものなりヒマラヤ山にては海拔一万三千尺乃至一万六七千尺の上に於て第三紀後半の海成層の沈澱せるを見アルプス及びピレニース山にては海拔一万尺の高所に第三紀前期の海成層ありといふ。然れば第三紀層の成りし時には其の地の海底なりしことは疑ふべからず、而して房總半島に於ける丘陵の巔に於ても亦第三紀の海成層を見ることを得べし因りて以て其の蒼波の下にありしものなることを知るに足る。

房總半島の南部の丘陵を構成する岩層は第三紀の最新統に屬し安房郡の殆ど全部夷隅郡の大半君津市原長生郡の東南部山武郡の一部とまた銚子半島の一部とは此の系統より成る。

第四紀古層に屬する地域は上總國に於ては君津市原長生山武郡の西北部の丘陵臺地下總國に於ては利根川以南の地にして東は銚子半島の臺地より起り西は利根川に沿ひ香取郡を経て内海に接する千葉郡に至る丘陵原野なり。

第四紀新層に屬する沖積地に河成と海成と河成海成混合との別あり、其の河成沖積地に屬するものは安房郡の加茂川君津郡の小糸川小櫃川市原郡の養老川長生郡の一の宮川及び利根川江戸川の流域これ

なり。

其の海成に屬するものは安房郡の海岸下總及び上總の兩國に連る九十九里海濱の地なり。
海成と河成との相混交して成れる沖積地は安房郡の加茂川君津郡の小糸川及び小櫃川市原郡の養老川
長生郡の一の宮川の河口なりとす。

本郡は房總半島の一部にして其の地體を構成せる岩層は新生大統の第三系の最新統と第四系の洪積統
と沖積統とに屬せり。

第三系の最新統によりて構成せられし地域は房總國界山脈及び郡界山脈三石山脈鹿野山脈の東南部に
して試に竹岡村の海岸の最西南端より久留里町の大谷川谷小市部の境に一線を描けば其の東南は鹿野
山と湊町との一部を除けば悉く此系統の岩層に屬すべし但し此の線より西北にも佐貫大貫秋元小糸鎌
足小櫃久留里馬來田等の丘陵の一部には此の系統より成れるものあり以上の外此の線より西北部の山
脈丘陵は殆ど第四系の洪積統即ち古層に屬す、第四系の沖積統即ち第四紀の新層地は沿河沿海の卑低
の地にして概ね耕地に屬す小櫃村山本以北の小櫃川の流域小糸村大井戸以北の小糸川の流域及び矢那
川の流域は河成沖積地飯野村及富津青堀大貫等の沿海岸の地は河成海成混合沖積地にして俱に此の系
統の地層なり。

本郡の地體は殆ど凡て水成岩によりて構成せられしものなれども稀には火成岩の露出せるものなきに
あらず秋元村平田三島村東日笠の小糸川沿岸の地に於ては稀に蛇紋岩の存するを見る。

第三紀の火山より噴出せる灰砂岩塊等の海底に沈積して遂に岩石に凝結せしものを凝灰質岩といふ其

の物質の差異及び石理の模様等により凝灰岩砂質凝灰角礫岩等の別あり本郡よりは此の種の岩石を出
す少からず。

鋸山脈に屬する金谷竹ヶ岡等よりは輕岩質の凝灰角礫石を出し金谷石と稱し建築石材として京濱地方
に多く使用せらる又秋元環三島豊岡等の數村に跨る高宕山中よりは凝灰角礫石を出す其の凝力及び雪
霜に耐ること金谷石により強く其の質佳なれとも海陸とも運搬の便を得れば多くは其の附近に於て
のみ用ひられ郡外に輸出せらるること少し。

本郡よりは化石を出す所少からず波岡村畑澤清川村永井作よりは腹足類葉鰓類等の化石を出し秋元村
平田の高宕澤の地にては砂岩の間より棘皮類(海膽)等の化石を出す鋸山附近の凝灰角礫岩中よりは鯨
齒の化石を出たし鹿野山麓の砂岩中よりは里人の稱して天狗の爪となすもの即ち鱗の齒の化石を發掘
すること屢々あり又金谷村には第三紀の珊瑚礁の露出せるあり。

關村關湊町湊大貫町岩瀬秋元村植畑よりはエレハスマデクスと稱する象の齒の化石を清川村中尾松
丘村大戸見よりは其の齒及び象牙の化石を出せりさて此の象をエレハスマデクスと稱するは印度の
ナマデクス河の附近より其の化石を出せしにより斯く命名せるなりといふ而して此の象の化石は印
度、印度支那及び南清等に於て發見せらるるといへは之と全く同種なるもの本郡より出づるを見れ
ば其の生存せし當時即ち洪積紀に於ては南彎山系即ち支那山系の隆起帯は海上に露出して亞細亞大陸
と連り本郡の地も亦印度及び南清地方と陸上相通するを得て此の種の動物の彼此の間を往來徘徊せし
ものなることを推知するに足る。

本郡内には介殼化石及び貝層の露出せるものを見ること頗る多し其の最も著しきものを擧ぐれば關村關の貝殼坂の如き坂路の中腹は一帶に介殼の層をなせり八重原村法木作道祖神社の背後の丘陵は其の半腹以下に貝層の重疊露出せるを見る富岡村瀧の口落身臺の如きは中腹幅三十尺許は一帶に貝層にして雨降れば貝殼流れて宛も雪の如し中川村の中川橋の附近大鳥居の丘陵には貝層露出し路上より之を見るを得べし其の他郡内到處崩壊せる丘阜及び懸崖等の岩石の間には介殼の含まるるを見るべく而して其の介殼は現代生存せるものと概ね其の種類を同ふし甚しく異りたるものは稀なり。

第七章 氣象

寒暖、陰晴、雨雪、風向等の天氣に關する諸現象は其の原因甚だ錯綜せるものなり而して其の原因の主要なるものは、緯度、及び土地の高低、土壤の性質、土地の状態、海陸の關係、海流、及び氣流の方向等なるべければ本郡に於ける此等の原因となるべきものの如何を知るを得ば之が氣象に如何なる影響を及ぼすべきかを推知するを得ん然れども此等に關しては未だ精査を缺き其の詳説を述ふるを得ず今茲には僅に本郡氣象の概要を記述するに止む。

本郡の地は房總半島の西南部に在りて北緯三十五度八分四十三秒より同卅五度廿七分十秒の間に其の位置を占め温帶の中央部に位するを以て單に緯度の關係より觀るも既に最良の氣候帶に屬するを知る而して高嶺と稱せらるるものも海拔千二百尺を超ゆるものなく極めて卑低の地と雖も海水の浸入を被る事なく地質は丘陵及び高臺の地は第三紀層及び第四紀古層にして卑低の地は第四紀新層に屬し河流は河床低くして排水極めて良く瀦水の停滯するなく乾濕其の宜しき得東北及び南方は山岳丘阜を以て自然の障壁をなし西方一帶は東京灣に瀕し其の海波は絶えず沿岸を洗ふにより能く氣候を調和して風雨寒暖宜しきを得所謂海洋的氣候を呈す但し強て其の缺點を言はんか空氣稍濕潤に過ぐ然れども氣候要素の總てを綜合すれば之に優るの地は極めて少かるべく眞に絶好の樂園なりと謂ふを得べきなり。

氣温 氣温は一年の中また一日の中に於ても各一回の高低をなすものにして一年の中にありては低緯度の地方は二月最も低く七月最高に達するも高緯度の地は一月最低に達し八月最高となる一日の中に

於ては季節及び緯度の高低により多少の差ありと雖も概ね日出前最低に達し午後二時前後最高となる本郡は中緯度に位するにより一月最も低く二月之に次ぎ四月より著るしく上昇し七月より八月に至りて最高に達す郡内に於ける一月中の平均温度は沿海地方の湊町は攝氏五、五度華氏四一、九度木更津町は攝氏五、一度華氏四一、二度山間地方の三島村は攝氏四、三度華氏三九、七度久留里町は攝氏三、一度華氏三七、六度にして其の平均温度攝氏四、五度華氏四〇、一度なり、八月中の平均温度は湊町攝氏二五、六度華氏七八、一度木更津町は攝氏二六、三度華氏七九、三度三島村は攝氏二四、六度華氏七六、三度久留里町は攝氏二四、九度華氏七六、八度にして其の平均温度は攝氏二五、四度華氏七七、七度なり、全年の平均温度は湊町攝氏一五、四度華氏五九、七度木更津町攝氏一五、一度華氏五九、二度三島村攝氏一四、〇度華氏五七、二度久留里町攝氏一四、二度華氏五七、六度なり然れば郡内に於ける温度の配布は沿海地方に高く山間地方に低きが如し而して明治三十三年より全四十四年に至る十二年間の絶対最高温度は明治四十四年八月十二日木更津町に於ける攝氏三七、五度華氏九九、五度にして絶対最低温度は明治三十七年一月二十七日久留里町に於ける攝氏零下一〇、〇度華氏一四、〇度なり。

最高氣温

月名	地名	年												平均		
		三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四			
一月	湊															
	木更津															
	三島															
二月	湊															
	木更津															
	三島															
三月	湊															
	木更津															
	三島															
四月	湊															
	木更津															
	三島															
五月	湊															
	木更津															
	三島															
六月	湊															
	木更津															
	三島															
七月	湊															
	木更津															
	三島															
八月	湊															
	木更津															
	三島															
平均	湊															
	木更津															
	三島															

月名	地名	年												平均		
		三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四			
二月	湊	九〇	九八	九七	一〇〇	九三	九六	八四	八八	一一四	一〇二	九二	一一三	一一〇	一一〇	一〇〇
	木更津															
	三島															
三月	湊	一一一	一一八	一四六	一三八	一四〇	一一七	一一三	一一五	一一四	一一五	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一
	木更津															
	三島															
四月	湊	一七三	一九〇	一九〇	一七八	一八五	一六九	二〇一	一八五	一八二	一八二	一七二	一八二	一八二	一八二	一八二
	木更津															
	三島															
五月	湊	二四〇	二二四	二三五	二〇〇	二〇七	二二五	二二九	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五
	木更津															
	三島															
六月	湊	二五八	二五八	二五五	二五九	二六九	二五八	二四〇	二四三	二四三	二四三	二四三	二四三	二四三	二四三	二四三
	木更津															
	三島															
七月	湊	二九六	二七〇	二七〇	二七四	二七四	二八六	二八五	二八八	二八五	二八五	二八五	二八五	二八五	二八五	二八五
	木更津															
	三島															
八月	湊	三〇五	二七三	三二八	三〇五	二七三	二七三	二九五	二八八	二八二	二八二	二八二	二八二	二八二	二八二	二八二
	木更津															
	三島															
平均	湊															
	木更津															
	三島															

地名	平均氣溫 (午前十時)												
	全年	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月
久留里	一四、二	一〇、八	一〇、七	一〇、七	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九
三島	一四、一	一〇、七	一〇、七	一〇、七	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九
木更津	一四、一	一〇、七	一〇、七	一〇、七	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九
湊	一四、一	一〇、七	一〇、七	一〇、七	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九
平均	一四、一	一〇、七	一〇、七	一〇、七	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九	一〇、九

最高温度の極度及其日

地名	最高温度の極度及其日												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
久留里	一三、五	一五、四	一八、四	一六、六	二〇、一	二二、二	二五、九	二七、八	二九、二	二九、二	二七、七	二五、七	二七、三
三島	一三、五	一五、四	一八、四	一六、六	二〇、一	二二、二	二五、九	二七、八	二九、二	二九、二	二七、七	二五、七	二七、三
木更津	一三、五	一五、四	一八、四	一六、六	二〇、一	二二、二	二五、九	二七、八	二九、二	二九、二	二七、七	二五、七	二七、三
湊	一三、五	一五、四	一八、四	一六、六	二〇、一	二二、二	二五、九	二七、八	二九、二	二九、二	二七、七	二五、七	二七、三
平均	一三、五	一五、四	一八、四	一六、六	二〇、一	二二、二	二五、九	二七、八	二九、二	二九、二	二七、七	二五、七	二七、三

月		九		十		十一		十二	
久留里	三島	久留里	三島	久留里	三島	久留里	三島	久留里	三島
60,2	51,0	58,2	58,2	59,3	50,2	47,7	40,2	34,7	47,7
70,2	73,2	67,1	67,1	68,2	59,3	52,3	45,3	38,3	52,3
69,3	71,2	68,8	68,8	67,2	58,3	51,3	44,3	37,3	51,3
66,2	69,3	65,2	65,2	64,3	55,3	48,3	41,3	34,3	48,3
63,2	66,2	62,2	62,2	61,3	52,3	45,3	38,3	31,3	45,3
62,2	65,2	61,2	61,2	60,3	51,3	44,3	37,3	30,3	44,3
61,2	64,2	60,2	60,2	59,3	50,3	43,3	36,3	29,3	43,3
60,2	63,2	59,2	59,2	58,3	49,3	42,3	35,3	28,3	42,3
59,2	62,2	58,2	58,2	57,3	48,3	41,3	34,3	27,3	41,3
58,2	61,2	57,2	57,2	56,3	47,3	40,3	33,3	26,3	40,3
57,2	60,2	56,2	56,2	55,3	46,3	39,3	32,3	25,3	39,3
56,2	59,2	55,2	55,2	54,3	45,3	38,3	31,3	24,3	38,3
55,2	58,2	54,2	54,2	53,3	44,3	37,3	30,3	23,3	37,3
54,2	57,2	53,2	53,2	52,3	43,3	36,3	29,3	22,3	36,3
53,2	56,2	52,2	52,2	51,3	42,3	35,3	28,3	21,3	35,3
52,2	55,2	51,2	51,2	50,3	41,3	34,3	27,3	20,3	34,3
51,2	54,2	50,2	50,2	49,3	40,3	33,3	26,3	19,3	33,3
50,2	53,2	49,2	49,2	48,3	39,3	32,3	25,3	18,3	32,3
49,2	52,2	48,2	48,2	47,3	38,3	31,3	24,3	17,3	31,3
48,2	51,2	47,2	47,2	46,3	37,3	30,3	23,3	16,3	30,3
47,2	50,2	46,2	46,2	45,3	36,3	29,3	22,3	15,3	29,3
46,2	49,2	45,2	45,2	44,3	35,3	28,3	21,3	14,3	28,3
45,2	48,2	44,2	44,2	43,3	34,3	27,3	20,3	13,3	27,3
44,2	47,2	43,2	43,2	42,3	33,3	26,3	19,3	12,3	26,3
43,2	46,2	42,2	42,2	41,3	32,3	25,3	18,3	11,3	25,3
42,2	45,2	41,2	41,2	40,3	31,3	24,3	17,3	10,3	24,3
41,2	44,2	40,2	40,2	39,3	30,3	23,3	16,3	9,3	23,3
40,2	43,2	39,2	39,2	38,3	29,3	22,3	15,3	8,3	22,3
39,2	42,2	38,2	38,2	37,3	28,3	21,3	14,3	7,3	21,3
38,2	41,2	37,2	37,2	36,3	27,3	20,3	13,3	6,3	20,3
37,2	40,2	36,2	36,2	35,3	26,3	19,3	12,3	5,3	19,3
36,2	39,2	35,2	35,2	34,3	25,3	18,3	11,3	4,3	18,3
35,2	38,2	34,2	34,2	33,3	24,3	17,3	10,3	3,3	17,3
34,2	37,2	33,2	33,2	32,3	23,3	16,3	9,3	2,3	16,3
33,2	36,2	32,2	32,2	31,3	22,3	15,3	8,3	1,3	15,3
32,2	35,2	31,2	31,2	30,3	21,3	14,3	7,3	0,3	14,3
31,2	34,2	30,2	30,2	29,3	20,3	13,3	6,3	0,3	13,3
30,2	33,2	29,2	29,2	28,3	19,3	12,3	5,3	0,3	12,3
29,2	32,2	28,2	28,2	27,3	18,3	11,3	4,3	0,3	11,3
28,2	31,2	27,2	27,2	26,3	17,3	10,3	3,3	0,3	10,3
27,2	30,2	26,2	26,2	25,3	16,3	9,3	2,3	0,3	9,3
26,2	29,2	25,2	25,2	24,3	15,3	8,3	1,3	0,3	8,3
25,2	28,2	24,2	24,2	23,3	14,3	7,3	0,3	0,3	7,3
24,2	27,2	23,2	23,2	22,3	13,3	6,3	0,3	0,3	6,3
23,2	26,2	22,2	22,2	21,3	12,3	5,3	0,3	0,3	5,3
22,2	25,2	21,2	21,2	20,3	11,3	4,3	0,3	0,3	4,3
21,2	24,2	20,2	20,2	19,3	10,3	3,3	0,3	0,3	3,3
20,2	23,2	19,2	19,2	18,3	9,3	2,3	0,3	0,3	2,3
19,2	22,2	18,2	18,2	17,3	8,3	1,3	0,3	0,3	1,3
18,2	21,2	17,2	17,2	16,3	7,3	0,3	0,3	0,3	0,3
17,2	20,2	16,2	16,2	15,3	6,3	0,3	0,3	0,3	0,3
16,2	19,2	15,2	15,2	14,3	5,3	0,3	0,3	0,3	0,3
15,2	18,2	14,2	14,2	13,3	4,3	0,3	0,3	0,3	0,3
14,2	17,2	13,2	13,2	12,3	3,3	0,3	0,3	0,3	0,3
13,2	16,2	12,2	12,2	11,3	2,3	0,3	0,3	0,3	0,3
12,2	15,2	11,2	11,2	10,3	1,3	0,3	0,3	0,3	0,3
11,2	14,2	10,2	10,2	9,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
10,2	13,2	9,2	9,2	8,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
9,2	12,2	8,2	8,2	7,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
8,2	11,2	7,2	7,2	6,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
7,2	10,2	6,2	6,2	5,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
6,2	9,2	5,2	5,2	4,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
5,2	8,2	4,2	4,2	3,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
4,2	7,2	3,2	3,2	2,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
3,2	6,2	2,2	2,2	1,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
2,2	5,2	1,2	1,2	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
1,2	4,2	0,2	0,2	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
0,2	3,2	0,2	0,2	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
0,2	2,2	0,2	0,2	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
0,2	1,2	0,2	0,2	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3
0,2	0,2	0,2	0,2	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3	0,3

月		全	
久留里	三島	久留里	三島
39,2	30,2	39,2	30,2
40,2	31,2	40,2	31,2
41,2	32,2	41,2	32,2
42,2	33,2	42,2	33,2
43,2	34,2	43,2	34,2
44,2	35,2	44,2	35,2
45,2	36,2	45,2	36,2
46,2	37,2	46,2	37,2
47,2	38,2	47,2	38,2
48,2	39,2	48,2	39,2
49,2	40,2	49,2	40,2
50,2	41,2	50,2	41,2
51,2	42,2	51,2	42,2
52,2	43,2	52,2	43,2
53,2	44,2	53,2	44,2
54,2	45,2	54,2	45,2
55,2	46,2	55,2	46,2
56,2	47,2	56,2	47,2
57,2	48,2	57,2	48,2
58,2	49,2	58,2	49,2
59,2	50,2	59,2	50,2
60,2	51,2	60,2	51,2
61,2	52,2	61,2	52,2
62,2	53,2	62,2	53,2
63,2	54,2	63,2	54,2
64,2	55,2	64,2	55,2
65,2	56,2	65,2	56,2
66,2	57,2	66,2	57,2
67,2	58,2	67,2	58,2
68,2	59,2	68,2	59,2
69,2	60,2	69,2	60,2
70,2	61,2	70,2	61,2
71,2	62,2	71,2	62,2
72,2	63,2	72,2	63,2
73,2	64,2	73,2	64,2
74,2	65,2	74,2	65,2
75,2	66,2	75,2	66,2
76,2	67,2	76,2	67,2
77,2	68,2	77,2	68,2
78,2	69,2	78,2	69,2
79,2	70,2	79,2	70,2
80,2	71,2	80,2	71,2
81,2	72,2	81,2	72,2
82,2	73,2	82,2	73,2
83,2	74,2	83,2	74,2
84,2	75,2	84,2	75,2
85,2	76,2	85,2	76,2
86,2	77,2	86,2	77,2
87,2	78,2	87,2	78,2
88,2	79,2	88,2	79,2
89,2	80,2	89,2	80,2
90,2	81,2	90,2	81,2
91,2	82,2	91,2	82,2
92,2	83,2	92,2	83,2
93,2	84,2	93,2	84,2
94,2	85,2	94,2	85,2
95,2	86,2	95,2	86,2
96,2	87,2	96,2	87,2
97,2	88,2	97,2	88,2
98,2	89,2	98,2	89,2
99,2	90,2	99,2	90,2
100,2	91,2	100,2	91,2

雨雪 本郡は南方と東北方とは直ちに海に接せされども海洋を隔つること遠からずしてまた其の方面に當れる山岳は雨雪を遮るほど高からず、而して其の他の方面は海に臨み四周殆ど海洋を繞らすが如くなれば濕氣を含める季候風若くは貿易風の影響は障礙を蒙らずして之を受くべく随つて降雨の量多く山谷の間よりは源泉滾々として流れて盡くることなく、また到る處に清水湧出し以て飲料に供するを得べく以て灌漑の利便を享くるを得べく寔に天幸の地と謂ふべきなり。

降水量は地方と季節とによりて之を異にせり、其の量は關東地方にありては沿海地方に多くして内陸に入るに随つて少く本縣に於ても亦其の配布は安房の外海沿岸に多くして北總の内海地方に少し蓋し本縣の雨量は南部及び東部より北西部に至るに隨ひ減少す、即ち外房地方は二千耗内外なるに銚子は千六百耗となり内地に入るや千三百耗に減じ内海沿岸の津田沼以北浦安地方は千耗内外を示す、本郡も亦南部及東部に雨量多く北西部に至るに隨ひ漸く少し即ち湊町は一八一七耗なるに木更津町は一六

四耗となり三島村は二〇五五・四耗なるに久留里町は一八二〇・三耗を示す、然れども内海の沿海地方と山間地方とを比するに湊町は一八一七耗なるに三島村は二〇五五・四耗木更津町は一三六四耗なるに久留里町は一八二〇・三耗なれば沿海地方よりも山間地方を多しとなす。

期節によりて雨量の多少を比較すれば春期(三、四、五の三ヶ月)に於て郡内平均(湊、木更津、三島、久留里の平均数以下皆同じ)百五十一耗夏期(六、七、八の三ヶ月)百九十九耗秋期(九、十、十一の三ヶ月)は百六十五耗冬期(十二、一、二の三ヶ月)には七十八耗を示せり、然れば其の最多なるは夏期にして秋期之に次ぎ冬期を最少とす而してまた之を十二ヶ月に分ちて比較し多きより順次に「多きより」其數を示せば八月二百五十四耗、九月二百十九耗、十月百九十三耗、六月八十六耗、三月百五十七耗、六月百十六耗、七月百五十五耗、八月百四十耗、一月九十二耗、十一月八十三耗、二月八十二耗、十二月五十九耗なれば最も多量なるは八月にして九月之に次ぎ十二月を最少とす。

降雪は頗る稀れにして其の期節は十二月より翌年四月に至り其の多き年にては五六回を出づることなく而して積雪の深さも四五寸を過ぐるることなし。

雨雪日數は一年間大凡百三十日乃至百六十日なり(湊、木更津、三島、久留里、平均百四十六日なり)然れば一年の五分の二以上は多少の降雪あるものと見るを得べし。

霜は沿海地方に少く山間地方に多し其の期節は概ね十一月初旬に初霜を見三月下旬乃至四月中旬に終霜となる、然れども稀には十月下旬に初霜を五月初旬に終霜を見ることがあり、而して其の日數は沿海地方に於て五日乃至三十日山間地方に於て四十日乃至六十日なり。

風向 風向は期節によりて甚しき差異あり、概ね十月より三月に至る間は北又は北西の風吹き四月は北東北西或は南或は北の風にして風位定まらず五月より八月に至る間は南風多く九月は北風若しくは北東の風多きを觀る里俗ニツバケツツは風定まらずといふ此は陽曆の概ね四月と九月とに當るべく此の二ヶ月の風向の不定なるを古より言ひ繼きたるものなり。

全年の風向は北の風位最も多く暴風日數は二十日内外なり。

寒暖二候の交替する時期に烈風の起ることあり特に二百十日二百二十日陰曆八月一日(八朔)は「カザツボ」と稱へ暴風の起ることあるものとし農家の厄日と稱し古來恐るる所なり。

降水量

月名	地名				平均
	湊	三島	木更津	久留里	
一月	八九九	七七一	五六〇	一五二	九二〇
二月	五〇七	三九四	二八七	一六六	七〇七
三月	一三七	一〇九〇	九四三	一五五	一七〇
四月	七四九	七七七	六八二	六五二	二〇二
五月	九一四	八〇八	九二七	五五七	四〇六
六月	四〇六	六四一	九五一	三三〇	一五八
七月	七〇三	三二五	三三〇	二五〇	一七八
八月	四三二	二八九〇	八一	四〇六	一四四
九月	四三三	三三三	九七	三三〇	七〇七
十月	四三三	三三三	九七	三三〇	七〇七
十一月	四三三	三三三	九七	三三〇	七〇七
十二月	四三三	三三三	九七	三三〇	七〇七
平均	四三三	三三三	九七	三三〇	七〇七

六月	五月	四月	三月	二月
湊 木更津 三島	湊 木更津 三島 久留里	湊 木更津 三島 久留里	湊 木更津 三島 久留里	湊 木更津 三島 久留里
北			北	北
南	南 西		北	北
南	南	北	北	北
南	×	東	北	北
南 西	南 南 西	北 北 北 東	北 北	×
北 南 西 東	南 南 南 南	北 南 × 北 東	北 北 × 北 東	北 北 × 北 東
北 東 北 東	南 北 北 南 東	南 南 北 × 南 西	北 北 北 西	北 北 北 北 東
北 東 南 東	南 東 北 南	西 北 北 南	西 南 北 北 西	北 北 北 北
南 南 西 東	南 南 北 南 東 西	× 北 東 × 東	北 北 北 北 西	北 北 北 北 西
北 北 南 東	南 南 南 南	南 南 南 北 西	北 西 北 北	北 西 北 西
南 南 東 西	南 東 北 北	南 西 北 北 西	北 北 北 北	西 北 北 北
南 南 東	東 北 北 西	南 南 北 西	西 北 北 北	北 西 北 北
南 南 西	南 南 南 南 北	南 南 北 北 北 西 東	北 北 北 北	北 北 北 北

一月	月名	全年	十二月	十一月	十月	九月
湊 木更津 三島 久留里	地名	湊 木更津 三島 久留里	湊 木更津 三島 久留里	湊 木更津 三島 久留里	湊 木更津 三島 久留里	湊 木更津 三島 久留里
北 西	三三年	×	×	五、九	五、九	×
北	三四年	五、一	二、九	四、六	六、四	六、一
北	三五年	五、九	五、二	五、八	六、五	七、六
北	三六年	五、八	×	五、三	六、二	六、八
北 北	三七年	六、二 五、七	四、三 四、一	三、八 二、三	八、二 七、二	六、九 六、五
北 北 北 東	三八年	六、七 六、三 六、三 六、七	六、二 六、三 六、五 六、〇	五、七 五、三 五、二 五、七	六、九 六、五 六、一 七、四	五、七 五、六 六、一 六、三
北 北 北 北 東	三九年	六、四 五、八 五、五 五、九	四、二 三、五 三、四 四、六	六、〇 五、四 五、四 三、二	六、三 六、一 六、三 六、一	八、七 七、六 × 八、〇
北 北 北 北	四〇年	六、一 五、九 四、五 六、〇	三、五 三、六 二、四 三、九	六、七 七、〇 五、九 七、八	五、八 四、八 四、二 六、二	七、〇 七、五 五、一 七、二
西 北 北 北 西	四一年	六、五 六、一 四、七 六、〇	四、四 四、一 三、三 三、九	三、八 三、三 二、四 三、六	五、六 六、六 五、九 六、四	七、八 六、八 七、〇 七、三
北 北 北 北	四二年	六、〇 五、八 四、九 六、一	二、六 二、二 二、四 二、五	四、四 四、三 三、〇 四、五	六、七 六、五 四、四 七、四	六、七 七、二 五、三 七、五
北 北 北 北	四三年	六、七 六、六 五、三 六、七	五、〇 四、八 四、〇 五、三	四、一 三、六 四、二 三、八	六、九 八、〇 六、一 七、六	八、四 七、八 五、八 八、二
北 西 北 北	四四年	六、二 六、〇 四、八 六、四	四、七 四、八 四、三 五、四	五、一 四、六 三、九 五、六	六、八 六、四 六、八 六、七	六、三 六、四 四、七 六、五
北 北 北 北	平均	六、四 六、一 五、三 六、三	四、二 四、二 三、八 四、四	四、九 四、八 四、五 四、七	六、六 六、四 六、〇 七、〇	七、二 七、〇 六、一 七、二

月名	湊	木更津	三島	久留里	一月	湊	木更津	三島	久留里	二月	湊	木更津	三島	久留里
三三年					三					八				
三四年					九					六				
三五年					五					五				
三六年					九					〇				
三七年					三	七				〇	〇			
三八年					九	〇	八	〇		六	三	七		
三九年					五	六	五	九		三	二	二	二	
四〇年					九	二	三	二		一	四	〇	二	
四一年					三	三	八	五		三	五	八	六	
四二年					二	二	〇	八		六	六	七	八	
四三年					二	七	八	一		八	四	七	七	
四四年					九	七	二	二		三	四	六	六	
平均					二	〇	九	二		一	七	六	八	

降水日數

全年	十二月	十一月
久留里 三島 木更津 湊	久留里 三島 木更津 湊	久留里 三島 木更津
		北
北	北	北
北	北	北
北	×	北
北 北 西	北 北 西	西 北
北 北 北 北 東	北 西 西 西	北 北 北
北 北 北 北 東	西 西 北 北	北 北 北
北 北 北 北	北 北 北 ×	北 北 東
北 北 北 北	北 北 北 北	北 西 北
北 北 北 北	北 西 北 北	南 北 北 西
南 北 北 北	西 北 北 北	北 北 北
北 北 北 北	北 北 北 北	南 西 北 西
北 北 北 北	北 北 北 北	北 北 北

湊	十月	九月	八月	七月	久留里
	久留里 三島 木更津 湊	久留里 三島 木更津 湊	久留里 三島 木更津 湊	久留里 三島 木更津 湊	
	北				
	北	南	南		
	北	南	北	南	
	北	南	南	南	
西	北 北 北 東	北 南 西	南 南 西	南 × 南	南
北 東	北 北 北 東	北 北 北 西 東	北 北 南 西 東	南 北 南 西 東	南
北	北 北 北 東	北 北 × 北 東	南 北 南 北	南 北 南 南 東	西
北 東	北 北 東 北	南 北 東 北 東	南 南 東 南	南 南 北 南 東 東	南
北	北 北 北 北	北 北 北 北 東	南 南 南 北	南 南 南 西	南
北	南 北 北 北 西	南 南 北 南	南 北 北 南 東	南 南 南 西	南
北	東 北 北 北 東	北 南 北 北 東 西 東	南 南 東 北 東	南 南 南 南	南
南	北 北 北 北	南 南 南 南 西 西	南 南 南 南	南 南 南 南 西 西	南
北	北 北 北 北	北 北 北 北 東	南 南 南 南	南 南 南 南	南

地名	晴天日數												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
湊	九·九	九·七	八·四	六·一	七·一	二·二	三·六	三·二	二·四	四·六	一·九	三·九	八三·〇
木更津	一一·五	一四·三	一〇·五	一一·五	八·九	五·〇	三·九	八·四	六·七	八·三	一·二	一五·七	一九二
三島	一〇·五	一四·三	九·一	八·一	八·九	一·四	三·三	四·〇	三·九	七·〇	一·三	一四·六	九八·四
久留里	一〇·二	一一·一	八·一	六·七	六·四	三·一	三·九	三·〇	三·四	六·九	一·四	一四·二	八八·五

快晴日數

地名	快晴日數												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
湊	一四	一四	一七	二一	二二	一〇	一四	一八	一四	一三	一六	一六	一三九
木更津	一四	一七	二一	一九	一五	一四	一五	二二	一四	一八	一八	一七	一八六
三島	一四	一七	二一	一九	一五	一四	一五	二二	一四	一八	一八	一七	一八六
久留里	一四	一七	二一	一九	一五	一四	一五	二二	一四	一八	一八	一七	一八六

地名	晴天日數												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
湊	一五	一五	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六〇
木更津	一五	一五	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六〇
三島	一五	一五	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六〇
久留里	一五	一五	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六〇

地名	湊	木更津	三島	久留里	一月	二月	月名
地名	湊	木更津	三島	久留里	一月	二月	月名
三三年					九		三三年
三四年						八	三四年
三五年							三五年
三六年							三六年
三七年					一六		三七年
三八年					七	四	三八年
三九年					一六	一七	三九年
四〇年					〇九		四〇年
四一年					三二		四一年
四二年					一六	一七	四二年
四三年					八五	三	四三年
四四年					一七	七	四四年
平均					一〇	六	平均

霜日數

地名	湊	木更津	三島	久留里	全年	十二月	十一月	四月
地名	湊	木更津	三島	久留里	全年	十二月	十一月	四月
三三年								
三四年								
三五年								
三六年								
三七年					九	三	三	
三八年					五	六	一	三
三九年					三	三	五	四
四〇年					五	六	四	三
四一年					七	六	三	一
四二年					九	四	五	五
四三年					七	八	六	八
四四年					九	六	二	七
平均					七	〇	五	三

雪日數

地名	湊	木更津	三島	久留里	一月	二月	三月	月名
地名	湊	木更津	三島	久留里	一月	二月	三月	月名
三三年					五			三三年
三四年								三四年
三五年								三五年
三六年								三六年
三七年					三	二		三七年
三八年						五	五	三八年
三九年								三九年
四〇年					二			四〇年
四一年					三			四一年
四二年					三			四二年
四三年					二			四三年
四四年					二			四四年
平均					二			平均

曇天日數

地名	湊	木更津	三島	久留里	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
地名	湊	木更津	三島	久留里	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
三三年	六・三	五・五	四・〇	六・二													
三四年	六・三	五・三	六・六	六・四													
三五年	八・〇	五・二	四・八	六・二													
三六年	八・〇	三・二	七・四	七・〇													
三七年	八・六	六・五	六・二	六・六													
三八年	六・二	七・八	六・二	五・八													
三九年	九・九	八・六	八・六	五・六													
四〇年	一・三	九・二	一・四	一・二													
四一年	一・〇	八・八	八・八	九・八													
四二年	九・七	七・八	八・四	五・六													
四三年	六・四	六・八	五・〇	九・〇													
四四年	六・四	五・一	五・二	五・七													
平均	九・九	八・八	八・〇	八・四													

地名	年	湊	木更津	三島	久留里
三三年	三三年	二月二十日	二月二十日	二月二十日	二月二十日
三四年	三四年	一月九日	一月九日	一月九日	一月九日
三五年	三五年	十一月二十九日	十一月二十九日	十一月二十九日	十一月二十九日
三六年	三六年	十二月二十一日	十二月二十一日	十二月二十一日	十二月二十一日
三七年	三七年	一月三日	一月三日	一月三日	一月三日
三八年	三八年	十一月十八日	十一月十八日	十一月十八日	十一月十八日
三九年	三九年	十一月十二日	十一月十二日	十一月十二日	十一月十二日
四〇年	四〇年	十二月二十二日	十二月二十二日	十二月二十二日	十二月二十二日
四一年	四一年	十二月九日	十二月九日	十二月九日	十二月九日
四二年	四二年	十二月十四日	十二月十四日	十二月十四日	十二月十四日
四三年	四三年	十一月十一日	十一月十一日	十一月十一日	十一月十一日
四四年	四四年	十二月四日	十二月四日	十二月四日	十二月四日
平均	平均	十二月十三日	十二月十三日	十二月十三日	十二月十三日

最低温度零度以下ニ降リシ終日

地名	年	湊	木更津	三島	久留里
三三年	三三年	三月十日	三月十日	三月十日	三月十日
三四年	三四年	三月二十日	三月二十日	三月二十日	三月二十日
三五年	三五年	三月十三日	三月十三日	三月十三日	三月十三日
三六年	三六年	二月二十六日	二月二十六日	二月二十六日	二月二十六日
三七年	三七年	三月十三日	三月十三日	三月十三日	三月十三日
三八年	三八年	三月十日	三月十日	三月十日	三月十日
三九年	三九年	三月十七日	三月十七日	三月十七日	三月十七日
四〇年	四〇年	四月三日	四月三日	四月三日	四月三日
四一年	四一年	三月十三日	三月十三日	三月十三日	三月十三日
四二年	四二年	三月二十八日	三月二十八日	三月二十八日	三月二十八日
四三年	四三年	三月二十五日	三月二十五日	三月二十五日	三月二十五日
四四年	四四年	三月二十一日	三月二十一日	三月二十一日	三月二十一日
平均	平均	三月十四日	三月十四日	三月十四日	三月十四日

最低温度零度以下ニ降リシ初終中間日數

地名	年	湊	木更津	三島	久留里
三三年	三三年	〇	〇	〇	〇
三四年	三四年	〇	〇	〇	〇
三五年	三五年	〇	〇	〇	〇
三六年	三六年	〇	〇	〇	〇
三七年	三七年	〇	〇	〇	〇
三八年	三八年	〇	〇	〇	〇
三九年	三九年	〇	〇	〇	〇
四〇年	四〇年	〇	〇	〇	〇
四一年	四一年	〇	〇	〇	〇
四二年	四二年	〇	〇	〇	〇
四三年	四三年	〇	〇	〇	〇
四四年	四四年	〇	〇	〇	〇
平均	平均	〇	〇	〇	〇

晝夜平均温度零度以下ニ降リシ初日

地名	年	湊	木更津	三島	久留里
三三年	三三年	二月三日	二月三日	二月三日	二月三日
三四年	三四年	二月三日	二月三日	二月三日	二月三日
三五年	三五年	二月三日	二月三日	二月三日	二月三日
三六年	三六年	二月三日	二月三日	二月三日	二月三日
三七年	三七年	二月三日	二月三日	二月三日	二月三日
三八年	三八年	二月十日	二月十日	二月十日	二月十日
三九年	三九年	二月十一日	二月十一日	二月十一日	二月十一日
四〇年	四〇年	二月十一日	二月十一日	二月十一日	二月十一日
四一年	四一年	二月十一日	二月十一日	二月十一日	二月十一日
四二年	四二年	二月七日	二月七日	二月七日	二月七日
四三年	四三年	二月七日	二月七日	二月七日	二月七日
四四年	四四年	二月十五日	二月十五日	二月十五日	二月十五日
平均	平均	二月十一日	二月十一日	二月十一日	二月十一日

晝夜平均温度零度以下ニ降リシ終日

地名	年	湊	木更津	三島	久留里
三三年	三三年	二月二十日	二月二十日	二月二十日	二月二十日
三四年	三四年	二月三日	二月三日	二月三日	二月三日
三五年	三五年	二月三日	二月三日	二月三日	二月三日
三六年	三六年	二月三日	二月三日	二月三日	二月三日
三七年	三七年	二月三日	二月三日	二月三日	二月三日
三八年	三八年	二月八日	二月八日	二月八日	二月八日
三九年	三九年	二月十四日	二月十四日	二月十四日	二月十四日
四〇年	四〇年	二月十日	二月十日	二月十日	二月十日
四一年	四一年	二月十一日	二月十一日	二月十一日	二月十一日
四二年	四二年	二月十一日	二月十一日	二月十一日	二月十一日
四三年	四三年	二月十一日	二月十一日	二月十一日	二月十一日
四四年	四四年	二月十五日	二月十五日	二月十五日	二月十五日
平均	平均	二月十一日	二月十一日	二月十一日	二月十一日

全年平均温度零度以下ノ日數

地名	年	湊	木更津	三島	久留里
三三年	三三年	〇	〇	〇	〇
三四年	三四年	〇	〇	〇	〇
三五年	三五年	〇	〇	〇	〇
三六年	三六年	〇	〇	〇	〇
三七年	三七年	〇	〇	〇	〇
三八年	三八年	〇	〇	〇	〇
三九年	三九年	〇	〇	〇	〇
四〇年	四〇年	〇	〇	〇	〇
四一年	四一年	〇	〇	〇	〇
四二年	四二年	〇	〇	〇	〇
四三年	四三年	〇	〇	〇	〇
四四年	四四年	〇	〇	〇	〇
平均	平均	〇	〇	〇	〇

全年最低温度廿五度以上ノ日數

地名	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊													
木更津													
三島													
久留里													
全年最高温度卅度以上ノ日數	〇	〇	一	二	二	三	二	〇	一	四	六	三	二・七

全年最高温度卅度以上ノ日數

地名	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊													
木更津													
三島													
久留里													
十月最高温度廿五度以上ノ日數	〇	二	一	三	五	三	三	一	五	三	二	三	三・四

十月最高温度廿五度以上ノ日數

地名	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊													
木更津													
三島													
久留里													
全年最高温度卅五度以上ノ日數	〇	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一・〇

全年最高温度卅五度以上ノ日數

地名	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊													
木更津													
三島													
久留里													
全年霰日數	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇・五

全年霰日數

地名	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊													
木更津													
三島													
久留里													
全年電ノ日數	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇・九

全年電ノ日數

地名	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊													
木更津													
三島													
久留里													
全年暴風日數	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇・三

全年暴風日數

地名	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊													
木更津													
三島													
久留里													
全年地震回数	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一・〇

全年地震回数

地名	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊													
木更津													
三島													
久留里													
全年地震回数	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一・〇

全年地震回数

全年雷電日數

地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊														八・五
木更津														二・一
三島														五・三
久留里														七・〇

全年濃霧日數

地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊														三・五
木更津														一・七
三島														三・三
久留里														一・〇

全年一日中ノ降水量卅耗以上ノ日數

地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊														一・五
木更津														七・七
三島														一九九
久留里														二二五

全年降水ノ五日以上連續セシ最多日數

地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	最多
湊														
木更津														
三島														
久留里														

全年降水ノ十日以上降ラザリシ最多日數

地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	最多
湊														
木更津														
三島														
久留里														

全年降水一日五十耗以上ノ日數

地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	最多
湊														
木更津														
三島														
久留里														

全年降水一日百耗以上ノ日數

地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
木更津	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
三島	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
久留里	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
木更津	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
三島	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
久留里	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
木更津	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
三島	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
久留里	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
木更津	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
三島	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
久留里	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
木更津	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
三島	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
久留里	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
木更津	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
三島	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
久留里	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
木更津	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
三島	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
久留里	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
地名	年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	四〇年	四一年	四二年	四三年	四四年	平均
湊	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
木更津	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
三島	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0
久留里	三三年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.0

第八章 天 産

本郡には平沙遠く連る沿海の地あり又山高く谷深き山間部等ありて其の位置地勢及ひ氣候等自然の狀態單純ならざれば随つて動植礦物の分布及ひ種類に於ても亦一様ならず愛禽家の談に雲雀は波濤の音高き富津の洲先と風伯怒號する鬼涙山と地勢なだらかにして山笑ふ久留里野とに棲息せるものは其の鳴聲に各特異の徴ありと曰へり同一の種類に於ても外界の狀態の異なるに因りて其の變化を生ずる斯の如きものあるか如し然れば其の他の生物に於ても其の棲息發育せる土地の異なるに因り多少の差異あるべきは類推するに難からざるべきなり。

一、動物

獸類

獸類中の猿鹿猪狐貉兔等は往時山野の間に多く棲息せしか獵具の銳利捕獲法の巧妙となれるに従ひ漸次其の數を減し猿鹿は殆ど其の影を見るべからず猪は夷隅安房の深山幽谷に去來する便ある地に於て稀に徘徊することありと云ふ狐は山間地よりは海岸に近き林野に於て之を見ることあり貉（貉と狸とは文字、稱呼、共に異なるれども其の實は同一なり）は山間には頗る多く棲息せしにより其の捕獲を業とする者さへありしか濫獲其の度に超え今は其の影を見る極めて稀なり兔は今尚ほ山野に跳梁す川獺の養魚池に害を加えしとのことは之を古老の談話に聽くべきのみ貂は稀に見るべし鼬は十數年以前に

ありては其の數頗る多く家禽の其の害を蒙ること少からざりしが其の毛皮の需用多く價格の貴きにより捕獲するもの多く随つて著しく其の數を減じたれば特に之が保護をなすにあらざれば其の種類の絶滅に至らんも知るべからず、斯くの如く貉貂狐等の比較上人生に益ある野獸の減少するに反して有害なる野鼠鼯鼠等は到る處に繁殖し農作物の其の害を被ふること年を逐ふて甚しからんとす蓋し狐貉鼯等の如き鼠族の撲滅に最も効あるものは漸く捕殺せられ其の種類の絶滅も將に近からんとするか如き状態なれば然らざるも其の繁殖力の速かなるもの、其の外敵なきに至りては其の増殖計るべからず其の害の及ぼす所亦計り知るべからざるなり宜しく今に於て益獸を保護し其の害を未然に防かざるべからず。

今更に本郡に現存せるもの、主なるものを舉ぐれば

- 食 蟲 類
- 鼯鼠 アネツミ
- 鼯鼠 モウラ
- 蝙蝠 類
- 蝙蝠
- 備 蹄 類
- 馬 畜家
- 牛 畜家
- 羊 畜家
- 山羊 畜家
- 豚 畜家
- 肉 食 類
- 猫 畜家
- 狐
- 貉 ムジナ
- 水獺 カハフツ
- 鼬鼠 イタチ
- 黃鼬 テン
- 貓 ネ

鰭 脚 類

海驢 アヒカ

游 水 類

すなめり

齧 齒 類

鼠

鼯鼠 ハツカネツミ

栗鼠 リス

野兔 ノウサギ

家兔 畜家 ウサギ

鳥 類

鳥類中の多くは夏は北方に往き冬は南方温暖の地に來れるにより徳川時代にありては郡内所々に御留場といふを設け狩獵を禁せし故秋冬の頃には雁鴨鶴の類群を成して來り稻穂及び麥の新芽等を啄むにより田圃には鳴子、案山子を設け特に麥圃には篠竹を建て繩を張り廻しなごして其の害を防ぎしが維新後其の禁を解かれ狩獵の自由を得獵銃を負ふ者各地に徘徊し其の發射を恣にせしにより忽ちにして此等の鳥類は其の跡を絶ち今日に於ては其の隻影をも見ること能はざるに至れり沿海地にありても海中へは水禽群を成して來りしにより繩船と稱する獵法ありて綱繩を海面に流して之を捕ふること夥多なりしが維新後獵銃其の他文明の利器は此等の鳥類を驅逐し去るに力ありしが其の數著しく減少し昔日の如くならざりしと云ふ今山野には雉鶴雉梟鳴啄木鳥杜鵑鳩類棲息し卑低地には鶯ごるさぎ秧鷄鴨鶉等を見るべく鳥は到る處に多く鳶は沿海の地に見るべし小鳥類は山間部に於て特に其の多きを知る現に郡内に去來し棲息せる鳥類の主なるものを舉ぐれば

水禽類

鳩ニホ 鴨カモ 雁ガン 鷗カモメ 鳧コガモ 黃脚ヨシガモ うみねこ言方 せぐろかもめ言方 鷗ウ 鷺フシドリ

涉禽類

呼潮チドリ 鶺鴒シギ 鷺サギ 水鴉ゴキサギ 朱鷺トキ 秧雞クヒナ 田雞パン

鳩類

鳩キジバト 斑鳩ジユスカケバト 鴿イヘバト 畜家

鷄類

鷄ヤマドリ 雉キジ 鶉ウツラ 雞ニハトリ 畜家 吐綬雞畜家

攀木類

杜鵑ホトトギス 啄木鳥キツツキ つつごり 方言ほんほんごり

燕雀類

繡眼兒メジロ 鶯ホホジロ 類白ウグヒス 鶯ウグヒス 山雀ヤマガラ 怪鷗ヨタカ 掠鳥ムクドリ 伯勞モズ 鶺鴒セキレイ 義禽ヤマカラ 雲雀ヒヨドリ 燕ツバメ

猛禽類

鷹フクロ 鳶トビ 角鴟ミミゾク 五十雀シジフカラ のじこ 知更鳥コマドリ 唐鴉カラヒバ 小雀コガラ 日雀ヒガラ 白鷓鴣シジフカラ 義禽ヤマカラ 鶺鴒セキレイ 雲雀ヒヨドリ 燕ツバメ

爬蟲類

爬蟲類の主なるもの

蜥蜴類

守宮ヤモリ 石龍子トカゲ

蛇類

赤練蛇ヤマカガシ 黃領蛇アラダイシヤウ 蝮マムシ しまへび言方 ぢもぐり言方

龜鼈類

水龜イシガメ

兩棲類

兩棲類には有尾類の蟾蜍は少なくして無尾類蛙の類は多し其の主なるものを擧ぐれば

有尾類

蟾蜍オモリ

無尾類

金線蛙トノサマカヘル 山蛤アカガヘル 雨蛤アマガヘル 土蛤ツチガヘル 方言 河鹿カシカ 蟾蜍ヒキカヘル

魚類

本郡の沿岸線は十七里以上に互れるにより海面また廣く而して富津の洲以南は外洋的なれば水産分布上の區分としての内海と外洋との二方面に屬するにより隨つて魚族の種類に富み其の産亦少からず然

れども之を往時に比すれば其の種類産額頗る減少せりと云ふ宜しく數罟濫獲を禁じ之が保護養殖に力を致すべきなり。

淡水魚族は小櫃小糸湊其の他の河川及び池沼溝水田等に産す然れども唯り漁獲法のみ進歩して保護養殖之に伴はされは種類産額共に漸く減少せんとす特に香魚に至りては水力電氣及び水車等の利用の爲め河川を横斷て其の水を堰くにより上流に溯る能はず爲め著しく其の數を減せりと云ふ。今魚族の主なるものを左に擧ぐ

圓口類

八ツ目鰻

板鰓類

鮫類 赤鰓

がんぎ鰓 一名かすべえひ 方言ざんぎ

硬骨類

鯛類 黑鯛

鰯類 鰯

鱈類 鱈

鮭類 鮭

鯉類 鯉

鰱類 鰱

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鮭類 鮭

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

鱒類 鱒

鰻類 鰻

甲殻類には蟹蝦等ありて其の種類甚だ多し其の主なるものを擧ぐれば

鰓脚類

微塵子

蔓脚類

石叻 藤壺

端脚類

水蟲 一名ツチバツタ

等脚類

海蛆 鼠婦 一名オメムシ 又セキダムシ

口脚類

蝦蛄

切脚類

蟹

十脚類

斑節蝦 龍蝦 草蝦 青蝦

磯蟹

もくすがに

しみづかに

方

昆蟲類

やごかり 一名カウナ 俗にオバケ

蝸牛

しほまねき

紅蟹 一名朝日蟹 又辨慶蟹

蟻類アリ害 赤條蜂アカスジバチ益 鼈甲蜂ベッコウバチ益 細腰蜂コシホッパチ益 胡蜂キバチ類 大胡蜂スズメバチ一名やまばち 又くまばち あしながばち
 蜜蜂ミツバチ 蜘蛛類

蜘蛛類

真正蜘蛛類

地蜘蛛チグモ一名アナグモ 蠅捕蜘蛛ハイトリグモ 袋蜘蛛フクログモ 棚蜘蛛タナグモ 絡新婦デヨラウグモ 塵芥蜘蛛ゴミグモ
 壁蝨タビ類 疥癬蟲 毛囊蟲 多足類

蜈蚣類

蜈蚣ムカデ げじげじ

馬陸類

海膽類

海膽類

人手類

海盤車類

海膽類

海膽類

人手類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海盤車類

海百合類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

沙巽類

軟體類

牡蠣カキ 淡菜イカヒ 玉珎タヒラキ 烏貝カラスガヒ 魁蛤アマガヒ 蜆シジミ 蛤ハマゲリ 蜆アサリ 蛭マテ 馬鹿貝バカガヒ 汐吹貝シホフキガヒ 西施シムカ
 舌ヒ 蚌サルホホ一名ツメ 蛭キリガヒ
 腹足類 蝸牛カタツムリ 蛞蝓ナメクジ 榮螺サザエ 石決明アハビ 田螺タニシ 子安貝コヤスカヒ 常節トコブシ
 頭脚類 烏賊類 章魚類

植物は分布上暖帯林と温帯林との接合界に當り海に近き西部の地は暖帯に東北部の山地と臺地とは温帯に屬し西方一帶海に臨み北東南の三面は丘陵を以て圍繞せらるゝにより濕潤其の宜しきを得而も土壤概ね膏腴なれば植物の發育盛にして其の種類も亦極めて多く山野には松杉檜櫟樺檜等あり又竹類にも乏しからず海藻には荒布・和布・羊栖菜・鹿角菜・頭髮菜・海苔等あり穀菜果樹類の成熟亦佳にして要するに有用なる植物に富めり而して雜草類に至りても亦其の生育盛にして其の種類も極めて多

し此等の植物を擧ぐるが如きは及ふべからざることなれば茲には僅に其の主なるもののみを示す。

食用植物

根を食すべき類

甘藷

午莠

薯蕷

佛堂藷

萊蕪蕪菁

葛

莖を食すべき類

馬鈴薯

九面芋

蒟蒻

筍

慈姑

蓮

土當歸

蕨

葉を食すべき類

こまつな

水菜

甘藍

白菜

菠薐

萵苣

欸冬

鶏兒腸

艾

葱

花を食すべき類

韭

卷丹

山丹

はすいも

紫蘇

水芹

鴨兒芹

秦椒

茶

菘

果實を食すべき類

茄

蕃椒

胡瓜

越瓜

甜瓜

西瓜

冬瓜

瓠瓜

絲瓜

菜豆

豆

刀豆

裙帶豆

鵲豆

林檎

梨

枇杷

桃

梅

杏

和蘭苳

葡萄

野葡萄

柿

蜜柑

香橙

柚

金橘

回青橙

棗

木天蓼

木半夏

秋菜莢

無花果

楊梅

楊梅

楊梅

楊梅

楊梅

楊梅

種子

種子

種子

種子

種子

種子

種子

種子

種子

種子

粳米

糯米

大麥

小麥

粟

稷

稗

蜀黍

玉蜀黍

蕎麥

豆

豇豆

菜豆

蠶豆

落花生

芥菜

胡麻

柯

栗

公孫樹

樹

安石榴

菱

裙帶菜

黑菜

羊栖菜

頭髮菜

松茸

香蕈

青頭菌

通長體を食すべき類

青海苔

紫海苔

裙帶菜

黑菜

羊栖菜

頭髮菜

松茸

香蕈

青頭菌

木耳

麥藁

麥藁

麥藁

麥藁

麥藁

麥藁

麥藁

麥藁

麥藁

麥藁

纖維料類

草綿

大麻

苧麻

苧麻

苧麻

苧麻

苧麻

苧麻

苧麻

製紙料類

楮

黃瑞香

黃瑞香

黃瑞香

黃瑞香

黃瑞香

黃瑞香

黃瑞香

黃瑞香

染色料類

藍

紅花

梔子

梔子

梔子

梔子

梔子

梔子

梔子

油、蠟、漆、樹脂料類

漆樹

赤松

黑松

罌子桐

罌子桐

罌子桐

罌子桐

罌子桐

罌子桐

建築器具及薪炭料類

扁柏

杉

松

樅

白桐

榲

浮爛羅勒

樟

黃楊

第一編 第八章 天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

二〇九

二〇九

二〇九

二〇九

二〇九

二〇九

二〇九

二〇九

二〇九

二〇九

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

麵楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

血楮

第一編 第八章 天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

天 産

椎シロ 櫟クヌギ 檜ナラ 苦竹マダケ 淡竹ハゲケ

桑クハ 桑葉植物 苜蓿ウマコヤシ 胡枝子ハハギ

つめくさ 藥用植物 山扁豆カハラケツクイ

馬蔘イヌタデ 虎杖イヌトリ 草合歡クサネム

木トコ 麥門冬ヤブラン 葦ニラ 芍藥シヤクヤク

膽ドク 鞆草クワボクサ 薄荷ハクカ 水仙スイセン

花ラン 牻牛兒苗ケンノシヨウコ 白屈菜クサノワウ

子サウ かつしや 芸 香 へんろーだ

檜モカワ 葎草ドクダミ 荳草イヌタデ 黃蜀葵ヘンチク

荆芥クイカイ 決明子エヒスゲサ 青木アラキ

牀シヤウ 白及シゲイ 施花ヒルガホ

木本黄精葉鈎吻トリカブト 烏頭ドクセリ

蒜ユシヤゲ 馬醉木アゼミ 虎掌ウラシマサウ

波那蔓ハナヅル 大蓼センニンソウ 女青ヘクソカタラ

鐵色箭ヒヨトリシヤウ 蜀羊泉タケニクサ

紫菀シラネ 檜シキミ 毛茛キンホーケ

白屈菜クサノワウ 天門冬テンモンドウ

懸鈎子キイナゴ 玉簪花ギバウシ

鼠尾草ミソハギ 益母草ヤクモサウ

貫衆ヤククサ 益母草ヤクモサウ

地續隨子ホルト 續隨子ホルト

番紅花サフ 龍骨ニハ

接骨ニハ 龍骨ニハ

石 曼陀羅華マンダラグ

石 象頭花ムササビ

石 半夏ハシダ

石 天南星ナンシヨウ

石 藜蘆シコロサウ

石 醉魚草フヂウツギ

石 毛茛キンホーケ

石 白屈菜クサノワウ

石 回々蒜キツネノボタン

石 石籠花タケラヒ

石 象頭花ムササビ

石 半夏ハシダ

石 天南星ナンシヨウ

石 藜蘆シコロサウ

石 醉魚草フヂウツギ

石 毛茛キンホーケ

石 白屈菜クサノワウ

石 回々蒜キツネノボタン

雜類

繖形科

チトメグサ センキユウ ヤブジフミ ノチドメ セントウサウ ヤブニンジン カ

五加科

ノユサウ ミシマサイゴ ホタルサウ ヤマゼリ ヤマニンジン

蟻塔科

ウド キツタ

芫科

タチモ フサモ

柳葉菜科

アカバナ タニタデ マツヨヒグサ

千屈菜科

千屈菜科

ミソハギ ヒメミソハギ ミヅスギナ
莖々菜科 スミレ ニホヒスミレ

葡萄科

エビツル ツタ ヤマブタウ ヤブカラシ

鳳仙花科

ツリフネサウ ホウセンクワ

酢漿草科

カタバミ

荳科

マキエハギ タヌキマメ クサネム クズ マメツブウマコヤシ ミヤコグサ カス
マグサ コマツナギ ヤブマメ カラスノエンドウ ミソナホシ(藥)

薔薇科

フユイチゴ シジミバナ キヨウカノコ カハラサイコ シモツケサウ ヘビイチゴ
ヤブカラシ ヲヘヒイチゴ ダイコンサウ ミツバツチグリ キンミツヒキ クサイチ
ゴ

虎耳草科

クサアヂサキ ウメバチサウ ヤグルマサウ

景天科

キリンサウ サハシラン ベンケイサウ

柔膏菜科

マウセンゴケ ムジナモ

十字花科

ナツナ イヌガラシ タネツケバナ イヌナヅナ ハタザヲ マガリバナ ミヅタカ
ラシ アブラナ カラシナ クジラグサ スカシタゴバウ ハボタン アラセイトウ

罌粟科

アザミゲシ エンゴサク キケマン ケシケマンサウ ハナビシサウ ムラサキケマン
ヤマブキサウ

小蘗科

イカリサウ

毛茛科

カラマツサウ アキカラマツ チドリサウ オトコゼリ カサグルマ オキナグサ
クサボタン テツセン ヤマシヤクヤク ヤマヲダマキ

金魚藻科

キンギヨモ

睡蓮科

カハホネ ジュンサイ

石竹科

カハラナデシコ ツルハコベ

ノウ スキセンノウ

馬齒莧科

スベリヒユ マツバボタン

紫茉莉科

オシロイバナ

商陸科

ヤマゴバウ

苧科

イヌビユ ノゲイトウ ヒユ キノコヅチ

蓼科

イヌタデ サデクサ ダイワウ ツルドクダミ ママコノシリヌグヒ ミゾソバ ミヅヒキグサ

藜科

アカザ ハウキギ アリタサウ マアカザ

蕁麻科

アカソ イラクサ ウハバミサウ

蘭科

石解^{セキコク} ネヂバナ フウラン サハラン

鬼督郵^{クマガイサウ}

建蘭^{スルガラン}

鳶尾科

アヤメ カキツバタ タウシヤウブ ニハゼキシヤウ ハナシヤウブ ヒアフギ

薯蕷科

オニドコロ ヤマノイモ

百合科

シホデ ヤマユリ ヤマラツキヤウ ヤブラン ノビル ツクバネサウ ミヅキバウ

シ ホトトギス チゴユリ

燈心草科

タウシンサウ イトキ ハナビセキシヤウ カガモウ スズメノヒエ ヌカボシサウ

莎草科

莞^{フトキ} サンカクキ ハタガヤ イトレンツキ ウマスゲ オニスゲ アヲスゲ アゼスゲ

禾本科
 マスクサ カヤツリグサ ウキヤガラ
 看麥娘 スズメノアツボウ 狗尾草 エノコログサ 結縷草 シバ
 ベイ カモシグサ 鷺觀草 カモシグサ タハラムギ ジユズダマ 川穀 コブナグサ 蓋草 ニハホコリ 畫眉草 ニハホコリ
 チカヤ ススキ 芒 ススキ 蘆 ヨシ マコモ クマササ 箬 クマササ 苦竹 マダケ メダケ
 天南星科
 白薑 シヤウフ 石菖蒲 セキシヨウ
 浮萍科
 ウキクサ アヲウキグサ
 穀精草
 ホシクサ イヌノヒゲ
 鴨跖草科
 ツユクサ イボクサ
 水鼈科
 水鼈 トチカガミ ヤナギスブタ クロモ セキシヤウモ スブタ ミヅオホバコ
 澤瀉科
 オモダカ クワキ アギナシ ウリカハ

茨藻科
 イバラモ トリゲモ ホツスモ
 眼子菜科
 眼子菜 ヒルムシロ 方言 ヒルモ エビモ イトモ ミヅヒキモ ササバモ ヤナギモ
 香蒲科
 ガマ コガマ ヒメガマ
 卷柏科
 卷柏 イハヒバ カタヒバ クラマゴケ
 松葉蘭科
 松葉蘭 マツバラン
 石松科
 石松 ヒカゲノカツラ スギカツラ タウゲシバ
 木賊科
 木賊 トクサ 門荆 スギナ
 蘋科
 蘋 フシジサウ
 槐葉蘋科
 槐葉蘋科

槐葉蘋 サシセウモ アカウキクサ

瓶爾小草科

瓶爾小草 ハナワラビ ハナワラビ

裏白科

裏白 ウラシロ コシダ

水龍骨科

瓦葺 ノキシノブ ビラウドシダ クリハラシ

ツデウラボシ 井口邊草 ヒトツバ

シダ キノモトサウ タマシダ ヒメウラジロ ミゾシダ

イヌワラビ キノモトサウ メシダ ワラビ イヌシダ

ヒメワラビ キノモトサウ ホシダ クマワラビ イタチシダ

苔葱類

コケシノブ カウヤコケシノブ ウチハゴケ

蘚類

土馬騮 スキコケ ハミズゴケ クサゴケ

菌類

堆草 シヒダケ ハツタケ テングタケ

キツネノエカキフデ

スツボンタケ

サルノコシカケ

石耳 イハクダケ ショウウロ ツチガサ

藻類

レイシ イハクダケ キクラゲ

ハバノリ ワカメ シヤチクモ 裙帶菜

ヨシモク カヂメ ウミトラノヲ イシゲ 搗布

水松 アラメ アサクサノリ 紫菜

黒菜 アラメ ジヨロモク アカモク

ヒジキ アラメ アヲサ ホンダワラ

アヲサ アラメ アヲサ

第二編 沿革

第一章 先史時代

第一節 概説

佛國コンバレルの洞壁には原人の彫みてマンモス象の形像あり同フランドニームの洞穴には馴鹿の壁畫を存し同ドルトニーユの水河の沈澱中よりはマンモスの牙にマンモスの像を彫刻せしものを發見せり是等に因りて人類が洪積世に於て既に棲息したるの事證は明確となれるか如しこの他西歐及北部亞米利加印度北米南米等にも洪積世の人類の遺蹟の發見せらるるものあれば人類は既に洪積世に於て殆ど全世界に蔓延せしものと推想せらる而して洪積世の前即ち第三紀に人類存在の證として原人の使用せる石器に類せる石片原始石を以て其遺物なりと主張する學者ありと雖も疑雲低迷して明かならず然りと雖も洪積世の人類は既に其智力に依りて獵具武器を製し狩獵を業として生活し猛獸と角闘して或は之を屠り或は之を駕御し又繪畫彫刻等の技能を有するを觀れば其進化發達には悠遠なる歲月を経ざるべからず然れば未だ微證の世に現れざるも其出現は洪積世前即ち第三紀にありしならんと想像するも誤りなかるべきなり。

山は翠綠滴るが如く水は清冽にして掬すべく砂白く海清らかに地肥え氣和らき宇内の樂園を以て稱せ

らるべき房總半島も新生代の初期に在りては洪蕩たる蒼波の下に在りしものならん其後隆起陥没堆積等の作用に因り地體は漸次に構成せられ波上に其形體を表はすに至りて後も桑滄の變絶ゆるなく或は孤島となり或は大陸に接続して半島となりまた離れて島嶼となれる等幾多の變遷を重ねしならん近時我郡内清川村中尾松丘村大戸見秋元村植畑大貫町岩瀬關村關及夷隅郡老川村等よりエレクスナマデクスの化石を發見せられたるか此舊象の化石は印度・印度支那、南清等に於ても發見せらるるといへば其生存時代には其長鼻を提げ巨足を運び彼此の間を往來徜徉したりしものなるべければ我房總半島は亞細亞大陸に接続し陸上相通するを得たりしものたりしを推想せらる。

また房總半島の北境即ち利根川流域と其西境江戸川流域には夥多の貝塚星羅棋布し東京灣頭より紆曲して銚子附近に達し而して其包含する貝類は鹹水産に屬するを以てすれば北總の手賀沼印旛沼長沼等は常陸の霞ヶ浦與田浦浪速浦北浦等と相聯り森漫たる内灣及海峽等を形造り東は北太平洋の鹿島灘に合し西は東京灣に連り北太平洋と東京灣とは水脈相通し波濤相應し房總半島は一大島嶼たりし時代もありしならん。

斯の如き幾多の變遷を経て房總半島は第三紀及第四紀に於て構成せられたる如し然れば人類初生の頃には既に其地體の一部は成りたる者なれば歐洲に於て原人が洞穴に壁畫を試み或は象牙板にマンモスの形を彫刻し或は湖上に住家を架せし時代に此地に於ても或は猛獸と角闘し或は樹下に石器を磨き或は洞窟に彫刻をなせるか如き原人の既に棲息したりし者なるか將た其初めて此土に棲息せしは其れよりは遙に多くの年所を経たる後なりしか又其初めて棲息せしは如何なる民種に屬し如何なる生活状態にありしか等の問題に至りては原人の遺骨は勿論歐洲に於ける如き其棲息せし洞穴等の發見せらるる者もなく其遺跡遺物の如も多からざれば其解答を得んことは極めて難し唯た僅に現存せる貝塚包含層散布地等の遺跡石器土器骨製器具製品等に依りて之か推測をなすに止まるのみ是故に本誌にははしめに房總半島の遺跡遺物の概要を述べて輪廓となしつぎに本郡内の遺跡遺物に關し視聽に及びし事を採録し貧弱なる内面に盡き聊か後の研鑽に資せんとす。

第二節 遺跡

一、貝塚

貝塚また介墟は當時の住民が山野に鳥獸を獵り河海に魚介を漁り其肉を食ひ骨角貝殻其他器具等の廢物を遺棄せし所なれば概して塵捨場と解釋せらる然れどもまた往々人骨の發掘せらるるものあり是等に於ては屍體の遺棄場とも或は埋葬せし墳墓なりとも推考せらる然れば介墟は其時代に於ける住民の器具意匠技術風俗及民族等の如何を推考するを得べき資料を藏せる寶庫なりと謂ふべきなり而してまた其所在地は漁獲に便なる河海に臨み概して高からず低からざる丘陵等に存せしものなりしも歲月を経るに従ひ堆積作用等に因り海底は漸く變じて陸地となれるを以て海岸よりは漸く遠く離るるに至りしならん是故に北歐には今の海岸を距ること十數里の地に屬するものありといふ然れば介墟はまた地形の變動を知り年代の新古をも證するを得べき貴重なる資料たるなり。

房總半島の貝塚は東方太平洋沿岸地方にはいまだ發見せられしもの少く利根川流域江戸川流域西方東

京灣沿海地方等に多く發見せらる而して南方に至るに隨ひ漸く其數を減するか如し今其所在及發見の遺物を表に依りて示さん。

太平洋沿岸地方

匝瑳郡匝瑳村大浦貝塚

土器石器

同 郡豐榮村貝塚貝塚

土器土偶石器

香取郡豐和村飯塚貝塚

石鏃、石匙、打石斧、摩石

同 郡飯高村飯高貝塚

土器、石器

山武郡福岡村上谷貝塚

土器

同 郡增穂村上貝塚貝塚

土器、打石斧、石匙、石皿、凹石、石棒、獸骨角

長生郡五郷村石神貝塚

土器、石斧、凹石、砥石

同 郡一宮町貝殼塚貝塚

土器

利根川流域

海上郡海上村余山貝塚

土器、土偶、動物土偶、磨石斧、打石斧、石劍、砥石、石棒、貝輪、骨銚、人骨等

同 郡船木村船木臺貝塚

土偶、土版、石鏃、石匙、打石、斧磨、石斧、獸骨

香取郡府馬村長岡貝塚

石鏃、打石斧、磨石斧、凹石、圓石、獸骨

同 郡神代村小貝野貝塚

磨石斧、凹石、獸骨

同 郡良文村阿玉臺先堂貝塚

土器、石鏃、打石斧、磨石斧、石鑿、砥石、緒締形石、凹石、石錘

同 村貝塚貝塚

土器、土偶、磨石斧、柴唇貝輪

同 郡神里村白井貝塚

土器、石器

同 郡香取町香取^{香取神宮内}貝塚

土器、動物形土偶

同 郡米澤村植房貝塚

磨石斧、土器

印旛郡久住村荒海貝塚

砥石

同 郡中郷村野毛平貝塚

砥石

同 村新妻貝塚

砥石

同 郡遠山村駒井野貝塚

砥石

同 郡豐住村興津貝塚

砥石

同 村北羽鳥貝塚

砥石

同 郡八生村寶田貝塚

打石斧、石錘

同 村上福田貝塚

石鏃、石、楢圓石

同 郡安食町麻生貝塚

砥石

同 町酒直貝塚

砥石

同 郡佐倉町大蛇貝塚

砥石

同 郡内郷村岩名石井貝塚

砥石

同 郡根郷村六崎貝塚

土器

同 村寺崎貝塚

土器

同 郡白井町江原新田貝塚

土器、土偶、石器、石劍

同 郡志津村村境貝塚

同 郡宗像村岩戸貝塚

土器

同 村戸塚貝塚

打石斧、磨石斧、石棒

東葛飾郡湖北村新木貝塚

同 村古戸貝塚

石刀

同 郡我孫町アビコ我孫子宿大光寺内貝塚

土器、打石斧、磨石斧

同 町柴崎貝塚

磨石斧

同 郡手賀村手賀貝塚

土器、甕髮土偶

同 村片山貝塚

土器、磨石斧、石棒

同 村柳戸貝塚

土器、打石斧、磨石斧、石棒

同 郡風早村大井舟渡貝塚

土器、土偶、打石斧、磨石斧、石棒骨錐、貝輪

同 郡千代田村柏上ネゴ貝塚

土器、土偶、打石斧、磨石斧

同 村同大字下ネゴ貝塚

土器、石鏃、石器

同 郡富勢村布施、古谷坪貝塚

土器、石鏃、石器

同 郡田中村花野井貝塚

打石斧、磨石斧、錘石、石棒

同 郡二川村古布内貝殼山貝塚

江戸川流域

東葛郡關宿町元町貝塚

同 郡二川村西高野貝塚

石鏃、打石斧、磨石斧

同 郡木間ヶ瀬村飯塚貝塚

土偶、石鏃、打石斧、磨石斧、凹石、磨製楕圓石、銛

同 村岡田貝塚

石鏃、磨石斧

同 郡川間村東金野井貝塚

土器、磨石斧、錘石、圓石

同 郡七福村岩名貝塚

同 郡野田町清水貝塚

土器、石鏃、石棒

同 町野田貝塚

石棒

同 町上花輪江戸尻貝塚

同 郡梅郷村山崎貝塚

同 郡新川村上新宿向宿貝塚

同 郡上貝塚貝塚

土器

同 郡八木村野々下貝塚

土器、打石斧、磨石斧、石棒

同 郡流山町三輪野山貝塚

- 同 町鱈ヶ崎貝塚
- 同 郡小金町東平賀貝塚
- 同 町幸田(コウヂ)野地貝塚
- 同 町幸田、花輪貝塚
- 同 町幸田寺野臺貝塚
- 同 郡馬橋村馬橋貝塚
- 同 郡高木村八ヶ崎貝塚
- 同 郡國分村國分寺貝塚
- 同 村同大字堀ノ内貝塚
- 同 村會谷貝塚
- 同 村同大字イゴ塚貝塚
- 同 村大麓天貝塚、姥山貝塚
- 東京灣沿海地方
- 東 葛郡鎌ヶ谷村中澤貝塚
- 同 郡大柏村柏井貝塚
- 同 村奉免貝塚
- 同 郡中山村中山貝塚

打石斧、磨石斧、石棒
 土器、土偶、石鏃、打石斧、磨石斧、敲石錘石、石皿、凹石、槌石、骨銛
 貝輪、人骨
 土器、土偶、打石斧、磨石斧、石錐、凹石、圓石、貝一
 土器
 土器、土偶
 土器、土偶、打石斧、磨石斧、獸骨、角器

- 同 郡塚田村前貝塚貝塚
- 同 村後貝塚貝塚
- 同 郡葛飾村古作貝塚
- 千葉郡二宮村瀧臺貝塚
- 同 郡犢橋村犢橋貝塚畑貝塚
- 同 郡都賀村宮野木城山貝塚
- 同 村小中臺鳥喰貝塚
- 同 村同大字東臺貝塚
- 同 村園生長者山貝塚
- 同 村西寺山二十四里貝塚
- 同 村東寺山上貝塚
- 同 郡都村貝塚貝殻ベタ
草刈場貝塚
- 同 村加曾利屋敷貝塚
- 同 村邊田貝塚
- 同 村矢作貝塚
- 同 郡千葉町千葉寺高德寺
ノ東方貝塚
- 同 郡千城村仁戸名ヘタノ
臺貝塚

土器、石斧、砥石、石棒、石劍、凹石、獸骨角、人骨
 土器、磨石斧、石棒、貝輪、角器
 土器、打石斧、磨石斧
 土器、土偶、骨器、貝器、磨石斧、打石斧、砥石、有窩石、獸骨
 石 斧
 土器、石斧、石棒、圓石、人骨
 土器、獸骨
 人 骨

- 同 村同大字ツキヌキ臺貝塚 人 骨
- 同 村上坂尾新田山貝塚 土偶、石斧、石棒、敲石、凹石、石臼、石杵
- 同 郡譽田村平山築地臺貝塚 打石斧、磨石斧、凹石、石棒、土器、土偶
- 同 郡椎名村小金澤貝塚 土器、土偶、打石斧、磨石斧、凹石、石棒、貝器
- 同 村大金澤六通貝塚 土器、石鏃、磨石斧
- 市原郡菊間村菊間徳永貝塚 石鏃、打石斧、磨石斧、獸角
- 同 郡濕津村久々津貝塚 土器、磨石斧、石皿、齒玉、石棒、釣針、貝輪
- 同 郡市原村門前寺山貝塚 石 鏃
- 同 村能滿貝塚 土 偶
- 同 郡市西村山倉貝塚 土器、石器、魚、骨
- 同 郡姉崎町姉崎臺貝塚 磨石斧
- 君津郡清川村永井作貝塚 土器、打石斧、磨石斧、石鏃、敲石
- 同 村祇園貝塚 土器、石棒、石皿、敲石、貝輪、骨器
- 同 郡波岡村大久保葭ヶ作貝塚 石鏃、凹石、石皿
- 同 郡飯野村上飯野鹿島貝塚 土 器
- 同 村下飯野山王貝塚 土 器
- 極南安房地方

安房郡神戶村^{大神宮}貝塚
同 郡健田村^{大塚}瀨戸^{ゴナイ}貝塚

土器、石斧、角骨

二、遺物包含層及遺物散布地

遺物包含層は其性質大約貝塚と等しく廢物を遺棄したる所にして唯貝殻を存せざるを異なりとなすのみ而して包含せる物に土器の殘片多きか故に又土器塚と稱する所あり包含の層は貝塚の如く厚きものなく其所在地は海岸を距る遠き臺地に存するを多しとす蓋し貝塚の存せざるは或は海濱に遠くして貝類を食するの便を得ざりしたためならんか或は當時の住民は山野に豊富なる禽獸を獵し悠々生を樂しむしも人口漸く増加し濫獲自ら其勢を長し食物次第に缺乏を告ぐここに於て食を逐ふて居を轉じ海濱に魚介を食するに至りしならん然れば先住地に在りては未だ魚介に指を染めざりしなれば其塵捨場には素より貝殻を見ざりしなるべし。

遺物散布地とは遺物の地表に露出し或は土壤に消して發掘せらるる所を云ふ蓋し遺物包含層の墾開耕鋤或は自然力等に因りて攪亂せられ散布するに至りしか又は器物の或事情に因り遺棄せられしもの殘存せし所なるか。

房總半島には遺物包含層遺物散布地なりと稱すと雖も疑はしきものなきにあらず其實遺跡にあらざるも遺物の自然力及人力等に依り或地に移動せられしを稱せしもあらん然ればここには表に依りて遺跡と稱するものの所在と遺物發見地の所在及其遺物とを示し暫く疑を存し後の研究に資せんとす。

遺物包含層

太平洋沿岸地方

海上郡飯岡町下永井

利根川流域

香取郡東條村小南

同 郡大戸村玉造

印旛郡公津村八代

東葛飾郡湖北村中里

同 郡我孫子町都部

同 郡富勢村宿蓮寺

同 村久寺家

東京灣沿岸地方

千葉郡椎名村大金澤

第三節 遺物

一、石器

金屬器の製造を知らざる時代は石を以て總べての武器及日用の器具等を造りしなれば其石器には大小形式種々様々の種類ありて其用途にも自ら差別多し其製造方に打製と磨製との區別あり打製とは打缺きて造りしもの磨製とは磨り琢きて造りしものなり房總半島より發見せらるる其主要なるものを擧ぐれば石鏃石槍石劔石斧石棒石庖丁石錐石匙石臼石皿石環砥石等なり。

石鏃 石鏃は打製を普通とし磨製は稀なり石質は何れも堅硬なるが地方に因りて其質に差違ありまた形式に於ても地方によりて異同あるが如し例せば北海道には黒曜石奥羽地方には燧石近畿以西には安山岩のもの多きが如くまた半蛋白石、水晶瑪瑙讃岐石等にて製せしもあり要するに地方特有の石を以て製せしか其地方の岩石と關係あるが如し石鏃は戰鬪の武器としてまた狩獵の用具として最も必要なるものなれば隨つて其製造量も多かりしが如く各地方に於て多く發見せらる而して北總の如き岩石を見ざる地方にありては其材料は他より仰きしなるべく由來房總半島には黒曜石を産せざるに本郡内に其石鏃及材料を見る蓋しこれもまた他より輸入せしものなるべし。

石槍 石槍は黒曜石或は燧石の類を以て製造したるものにて打製を普通とす、其形狀は石鏃中の一種に類似す其猛獸を殺獲し強敵と鬪争するに必要にして缺くべからざる武器たる固より言を待たざるなり。

石斧 石斧は古くは雷斧と稱せりこれに打製と磨製と半磨製とあり半磨製とは大體は打製にして刃の部分のみ琢磨せるをいふ形狀は打製石斧は斧形、撥形、分銅形、短冊等あり磨製石斧は幅が一方は狭く一方は廣く其廣き方に刃あり刃は兩刃なるか稀に片刃なるもあり其刃先きに鋭きものと鈍きものとあり其使用法は木の柄を藤蔓等にて固着せしめ種々の物を切り碎くに用ゐらるるか如し。

石棒 石棒は舊くは雷槌雷砧霹靂礎等と稱せり長くして圓みある磨製石器にして形体に大小あり大なるは三四尺以上小なるは一尺内外なり石質に堅硬、粗鬆の別あり形狀に種々あり兩頭のもの一頭のもの無頭のものごあり之に彫刻を施せるとしからざるごあり横斷面に圓形楕圓形或は扁圓形のものあり其大さと形狀に種々あれば隨つて其用法に於ても一定せざるが如しメキシコにては穀物を潰す

に麵棒の如く横にして用ひ臺灣にては麥を舂くに杵として用ひし例あれば物を潰し或は舂くに用ひしならんとの説ありまた其製作精巧美麗なるものは會長等の威嚴を示し兼ねて護身用の武器として携帯せしならんとの考説あり其極めて大なるものに至りては武器として實用に適せず麵棒或は玩具として用ふべからざれば宗教上の用に供せられしか或は威勢を誇示する裝飾と爲せしか將た武功の表徴凱旋の記念等に用ひられしか今之を明に知ること能はずただ推想に止まるのみ。

石劔 石劔は長くして圓き棒の一端へ刃を付けたるものにて石棒に類似するにより舊くは石棒雷の撥雷砧等と稱し之を石棒の部へ加へしと雖も其石質は堅硬緻密にして刃を有し武器として使用するに適するものなれば石棒の宗教上に或は麵棒等に用ふるものとは自ら區別あるを知るべきなり。

石庖丁 石庖丁は偏平なる石の一方に刃を附けたるものにて両面に刃と身との分界を表はす段のあるものと無きものとあり其の無きものには脊に近き邊に孔有り蓋し孔あるものは狭み木或は柄を附けたるものならん石質は火山岩或は石版岩等の類なり、石或は木或は肉等を切るに用ひられしものと思像せらる。

石錐 石の錐にて打製なり石質は燧石或は半蛋白石等にて製せらる先端尖りて細く形状は概ね類似す上端に鈕ツボのあるとなきとあり其無きものは柄を付けて用ひたるならんこれは孔を穿つために用ひられしものなるべし。

石匙 石匙は俗に天狗の飯匙と云ふ石質は燧石或は半蛋白石等に造られ一端は石を割りしのみにて一端は凸面にて石鏃或は石槍の如く縁邊の細かに缺き取られ一方よりのみ刃を附けられたるものなり

これは鳥獸の皮を剝くに用ひられしものならんと想像せらる。

石皿 石皿は皿に類し白は白に似るよりして稱へしものなり石皿は多く自然石を利用し造りたるものにて形状は楕圓形或は卵形若くは長方形等にて中央は凹みて一方に口を開かれ箕の如きものもあり或は底部に足の附きしもありこれは果實其他の物を潰すために用ひられしものなりと推せらる石臼の用途は亦石皿と同じかるべし。

石環 扁平なる石の中央に孔を穿ち其周邊を缺きて刃となし或は磨きて刃を附したるものを石環といふまた扁平ならずして殆ど球状をなしたるもあり蓋し中央の孔へ棍棒を通して武器となしたるものならんと推せらるまた直徑僅に二寸許孔も随つて小なるものあり之等は紡錘車等に用ひしか將た棒に嵌めて回轉を助け發火器の一として使用せしならんとの説あり。

凹石 凹石は俗に蜂巢石或は雨垂石といひ扁平なる小なる石には一二大なる石には多く雨滴によりて生じたる如き凹みある者をいふグリーンランドの土人の間に行はるゝ發火法に木盤上に木の棒に紐をからみたるを立て其上に木或は石を當て一人之を兩手にて堅く抑へ他の一人は棒にからみて紐の兩端を兩手に持ち交互に引き棒を回轉せしむるときは木盤と棒との摩擦によりて發火すと云ふ而して其棒の上端を支へる石は凹石と同種なりといへるにより實驗せしに果して能く發火せしといふ以てこの種の石器の用途は略は推定せらる。

石槌 石槌は石の前後左右或は表裏に凹き磨滅したる痕跡あるものにてこれは物を敲きて碎き或は押して潰したるによりて生じたるものなり。

砥石 砥石は砥き石にて磨製石器を造るにあたり擦り磨くに用ひたるものなり、質は概ね粗鬆にして今の荒砥に類せりこれに二種あり大なるは下に置きて使用せしもの小なるは手に握つて使用せしものなりこれは雷斧砥とも石斧砥とも稱せらるると雖も石斧を造るのみには限らざりしならん蓋しこの石の發見の場所にては當時盛んに石器の製造せられしものと考へらる。

二、土器

先史時代の土器は所謂素焼にして色は褐色に稍赤みを帯びたるものまた黒みを帯びたるもの詳しく言へば灰褐色、褐色、赤褐色、暗褐色、黝黒色、等あるべく質粗鬆なるあり堅緻なるあり厚きあり薄きあり紋様に繩目紋あり繩席紋あり爪形紋あり渦卷紋あり浮模様あり沈模様あり形状粗大にして古拙なるあり精巧幽雅愛すべきあり形状紋様種々様々にして頗る變化に富むこれ等の土器を稱して繩紋土器またアイヌ土器或は貝塚土器といひ之を厚手式繩紋土器薄手式繩紋土器の二に區別す然れども尙ほこの外に種別あるべしと説ける者ありまた更にこの土器を厚手渦紋土器薄手渦紋土器乾漆型土器に區別する學者もありて類別稱呼區々にして一定せざるが如し。

厚手式繩紋土器は厚くして其質稍粗なれども概ね硬く中に雲母を混ぜるものあり把手は複雑にして卷上繩結形の如き種々の特色あるものなり紋様は雄大にして精巧なる浮紋沈紋等を有し口縁部は波狀曲線をなせるものと水平をなせるものとあり要するに製作者固有の技能を發揮し形状奇古意匠の變化極りなく韻致を帯び愛すべきもの多し薄手式繩紋土器は其名の如く薄くして其質は堅緻なり厚手式の如く雲母を混するは稀なり紋様は優美なる曲線紋幾何學的紋等にして口縁部は水平をなすもの多く形状

紋様種々様々にして古雅掬すべきもの多しまた乾漆型土器と稱するは緻密なる粘土を極めて能く捏ね外面には油等を塗り造りたる上磨きを掛けたる如きものにて其製作華奢なれども其質堅緻にして雅致あるものなり。

三、土偶、土版

土偶は人の像を作りしものにて或は遮光器を掛けたる或は入黒をなしたる或は結髪或は服装等状態を示すものなれば之に依りて當時の人民の風俗を観察するを得べき貴重なる資料なり。

土版は長方形或は橢圓形の扁平なるものにて両面に模様彫刻ありまた中には耳目鼻口等を附けたるもありて扁平なる土偶と稱するも可なるものあり、蓋し宗教的意味に於て土偶は偶象として土版は護身符等に用ひられしものと考へらる。

四、骨器角器及貝器

骨器には銚として用ひられたる骨銚あり石鏃の如く使用せし骨鏃あり角器には角鉤あり貝器に貝輪ありこれは腕輪として用ひられたるならん但し其甚しく大なるかまた小なるものは或は他の身邊の裝飾或は貝貨即ち貨幣として用ひられたるものならん。

五、玉類

玉類には美しき自然石及青石等にて作りし曲玉白玉等ありまた野猪の牙に孔を穿ちて製したる曲玉あり蓋し曲玉の原形ならん其他齒骨等の曲りたるに孔を穿ち勾玉の如くなしたるあり何れも裝飾として用ひられしならん。

先史時代の遺物はこの外にも尙ほ多かるべしと雖も餘はこゝに之を省き以上に擧げし如き遺物の房總半島より發見されしものは遺物と其發見地名とを表によりて示し其主要なるものに就き聊か説明を試むべし。

第四節 遺物發見地及其遺物

貝塚の部に擧げし遺物はこゝに省けり

- 太平洋沿岸地方
- 海上郡豊岡村八木 石鏃、磨石斧
- 同 村塙 打石斧、磨石斧、凹石、石皿
- 匝瑳郡匝瑳村中臺 石鏃
- 同 郡豊榮村飯倉 石鏃、打石斧、磨石斧
- 同 村久方 石鏃、磨石斧、凹石
- 同 郡南條村小川臺 石鏃
- 香取郡山倉村新里 磨石斧
- 同 郡栗源村岩部 獨鑽石
- 同 郡飯高村金原三社大神内 磨石斧
- 同 郡多古町染井 土器、石鏃、打石斧、磨石斧

- 山武郡二川村小池大塚臺 土器、磨石斧、敲石
- 同 郡源村下布田 土器、石器
- 同 郡増穂村南飯塚 石鏃、打石斧、磨石斧、圓石
- 長生郡長柄村上野 打石斧、磨石斧
- 同 村中ノ臺 磨石斧、石棒
- 同 郡五郷村綱島 土器、磨石斧
- 同 郡鶴枝村立木 石鏃
- 同 郡土睦村寺崎 石鏃
- 夷隅郡勝浦町海濱 釣針
- 利根川流域
- 香取郡八都村神生 土器
- 同 郡津宮村 土器
- 同 郡米澤村古原 石劍
- 同 郡滑河町栗山 磨石斧、石剃刀
- 同 郡小御門村小御門社附近 土器、石器
- 印旛郡久住村磯部 磨石斧、打石斧、凹石
- 同 郡八生村寶田 打石斧、石錐

- 同 村上福出 石鏃、錘石、橢圓石
- 同 郡公津村臺方 磨石斧、橢圓石
- 同 郡酒々井町八木野
八木野向 土器、石鏃、石斧
- 同 郡和田村八木 石斧
- 同 郡千代田村生谷三里塚
松山 土器、石鏃屑
- 同 郡白井村白井 土器、磨石斧
- 同 郡六合村吉高 打石斧、磨石斧、石棒、橢圓石
- 同 郡本埜村荒野 打石斧
- 同 郡船穗村船尾 打石斧
- 同 村泉新田 打石斧、磨石斧、紡錘車
- 同 郡木下町別所石神 石鏃、打石斧、磨石斧、石棒
- 同 町郷ノ神 磨石斧
- 同 郡大森村大森天神臺 土器、石鏃、打石斧、磨石斧、石棒、石槌
- 東葛飾郡我孫子町停車場 土器、土版、打石斧、磨石斧
- 同 町下ヶ戸 打石斧、磨石斧
- 同 町高野山 土器、磨石斧
- 同 郡手賀村布瀬 磨石斧、石棒

- 同 村泉 土器、磨石斧、石鏃
- 同 村若白毛 磨石斧、石鏃
- 同 村鷺ノ谷 磨石斧
- 同 郡風早村箕輪道堀 打石斧、磨石斧
- 同 郡千代田村戸張 磨石斧
- 同 郡豊四季村豊四季 土器、打石斧、磨石斧
- 同 郡福田村三ッ堀 磨石斧、凹石
- 同 村木野崎 土器、石鏃、打石斧、磨石斧、錘石
- 同 郡川間村船形 打石斧、磨石斧
- 同 村中里天王原 磨石斧
- 江戸川流域
- 東葛飾郡關宿町西裏 石鏃、打石斧、石鏝、敲石
- 同 町臺町實相寺裏 土器
- 同 郡野田町中野臺 石棒
- 同 郡八木村市野谷 磨石斧
- 同 郡小金町二ッ木 磨石斧
- 同 郡高木村栗ヶ澤 石棒

同 郡松戸町

錘石

同 郡市川町 國府臺附近
駒形社脇

石棒

同 郡八幡町宮久保

磨石斧

東京灣沿岸地方

東葛飾郡中山村北方

石斧

千葉郡千葉 猪鼻臺下市
場不動堂

砥石

同 郡譽田村高田

土器

市原郡濕津村神崎

土器、磨石斧

同 郡戸田村 栢橋ヨリ眞里
谷ニ至ル途上

打石斧

同 村寺谷

石棒

君津郡

清川村祇園

土器、打石斧、磨石斧、石鏃、敲石

同 村同大字鶴卷

石皿

檜葉村坂戸市場

磨石斧、土器

根形村飯富山野

土器、磨石斧

馬來田村茅野七塚

石棒

小櫃村俵田白山神社内

石棒

小櫃村戸崎富崎神社

石棒

同 村同大字磯部澤

石劔

同 村同大字城山

土器、土偶、石鏃、石錐、石匙、打石斧

同 村同大字峯

磨石斧、石鎗、凹石、石皿、石棒、齒玉、石槌、石ノ發火器、石製ノ魚

同 村同大字塚ノ腰

土器、石鏃、磨石斧、打石斧

同 村同大字梶開

土器、石鏃、打石斧

同 村三田と山本の境の山中

石棒

久留里町浦田、部田

石棒

同 町 久留里より大
谷に至る里道

石棒

同 村川谷熊野神社内

石棒

同 町市場鶴の臺白山社内

石棒

同 町吉野塚場神社内

石棒

松丘村平山宇坪 熊野神
社内

石棒

同 村高水大鳥神社内

石棒

同 村 戸穴熊野神社内

石棒

同 村加名盛八坂神社内

石棒

同 村大坂刈込臺 藏王神社跡 石棒
 龜山村草原八幡神社内 石棒
 同 村黄和田畑春日神社内 石棒
 富岡村田川神明社内 石棒
 同 村下郡市場臺 石棒
 同 村同大字石塚稻荷 石棒
 同 村根岸 磨石斧
 同 村阿部 石鏃
 鎌足村矢那 遠山金藏 氏稻荷社内 石棒
 同 村同大字 石井福藏氏 稻荷社内 石棒
 同 村同大字 細野益三氏 稻荷社内 石棒
 同 村同大字 佐久間長五郎氏 稻荷社内 石棒
 同 村同大字 平野福藏氏宅地内 石棒
 波岡村大久保鳥羽臺 石棒
 同 村小濱 石冠、打石斧
 八重原村杵師石神社内 石棒
 同 村三直八雲神社内 石棒

同 村同大字境 磨石斧
 中村練木 磨石斧
 同 村中島武勇小川氏宅地 磨石斧
 同 村同大字 圓石
 同 村大井天照大神社内 石棒
 同 村泉荷鞍 磨石斧
 小糸村根本南畑 江尻氏 稻荷 磨石斧
 同 村同大字齋藤氏稻荷 石劍
 同 村同大字高山圓明院内 石棒
 同 村同大字下根本峰畑 土器、石鏃、磨石斧、打石斧、石棒、黑曜石片
 同 村系川金岡 緒形善次郎氏 稻荷社 石棒
 同 村同大字金岡 緒志表藏氏 稻荷 磨石斧、石劍
 同 村同大字澤卷權現社 石棒
 同 村同大字 北川峯吉氏 稻荷 砥石
 同 村同大字大藏臺 石棒
 秋元村市宿 石棒
 田 村植畑權現社 石棒

- 同 村同大字志保澤氏宅地 石棒
- 三島村宿原三島神社内 石棒石皿
- 同 村正木古屋敷 土器、石棒
- 同 村ニタ入ニタ入神社 石棒
- 周南村六手鹿島臺 鹿島神社内 石鏃、石棒、磨石斧
- 貞元村貞元 磨石斧
- 同 村中富石神社 石棒
- 同 村上湯江三舟臺 土器、石鏃、磨石斧
- 同 村郡家跡 石環
- 飯野村本郷三舟遠山氏稻荷社 石棒
- 同 村下飯野飯野小學校内 土器、石鏃
- 佐貫町八幡八幡神社内 石棒
- 湊町木村 磨石斧
- 同 町湊八坂神社内 石棒
- 同 町同大字犬吹臺 磨石斧
- 同 町岩坂イネ 磨石斧
- 同 町同大字野中氏庭前の畑 磨石斧

- 同 町櫻井山神社内 石棒
- 同 町更和 磨石斧
- 環村六野大日堂傍 石棒
- 同 村田原山脇熊野神社内 石棒
- 天神山村横山橋神社内 石棒
- 竹岡村竹岡十宮藥王寺境内 石棒、石劍
- 極南安房地方
- 安房郡平群村吉澤 石棒
- 同 郡館野村國分茅野 土器
- 同 村山本石井 土器、石斧
- 同 村腰越狐塚附近 土器
- 同 村稻西作稻村城址ノ東麓 土器
- 同 郡長尾村瀧口神社附近 石棒
- 同 郡磯町千倉 磨石斧
- 同 郡健田村瀬戸薬師前 土器
- 同 郡豊田村加茂熊野神社 石棒
- 同 村杵見神梅莫越山神社 石斧

同 郡主基村成川

石棒

第五節 遺跡遺物の概要

房總半島に於ける遺跡遺物は嚮に掲げて諸表に示せし如く頗る多ければ更に踏査探求し既に發見せしものと共に研究する所あらば史實を闡明する鮮きにあらざるべしと雖も時と力の足らざると淺學非才事に任へざるとにより之を如何とも爲す能はざるは頗る遺憾とする所なり今ここには遺跡遺物に關して見聞のままを斷片的に記述し僅に參考の料にのみ供へんとす。

房總半島に於ける著名の貝塚は利根川流域に余山、阿玉臺、手賀、岩井、大井等あり江戸川流域に堀の内、曾谷等あり、東京灣沿岸に古作、加曾利、六通、門前等ありこれ等につき其概要を述ぶべし。

余山貝塚は海上郡海上村余山に在りて人骨を出すこと十數個其他土器石器骨器器具等の遺物の發見頗る多く就中人類學雜誌第二十七卷第六號、第七號、第二十八卷第五號の口繪に示されし珍奇なる土偶及土器を出しましたことより出し貝輪は高橋健自氏の考古學第三十七圖に載せらる此貝塚は常陸の福田椎塚と共に著名にしてまた同時代のものならんとの説あり。

高島多米治氏は霞ヶ浦方面の石器時代遺跡の時代を三期に分ち第一期の貝塚は貝層の厚さ五六寸乃至四五尺にして之に含まるる土器は數破片を認むるのみにして其破片にも感すべきものなし第二期は多少精巧なる土器を出すも概して粗雑にして大なり而して雄大なる把手を有するは其特徴にして其形狀及意匠にも雅致ある者多し此貝塚に屬する遺跡は阿玉臺、寺内外浦、貝塚等なり

第三期に屬する貝塚は福田余山椎塚吹上等なり而して第一期のものは其分布常陸の各地方水戸方面大串の貝塚等より松島まで分布す云々と説かれたり。

此説に従へば余山は福田椎塚吹上と共に第三期に屬するものなり然れば福田等につき聊か説明を試むべし。

福田は常陸稻敷郡大須賀村の大字にして貝塚は神明前、藥師堂、久保臺、大畑にありて外に、寺山に遺物包含層あり此等の貝塚よりは夥しき遺物を出せるが中にも大野延太郎氏著先史考古圖譜第四版の一の土偶第九版の一及七の土瓶第十版の三及四の壺、第十八版の三の石劔第十九版の三の石槌、第二十二版の二の土器の底部以上は人類學教室所藏に載する所の遺物は此貝塚より發見せられしなり而して貝層中の貝は蛤、サルボウ、塩吹貝、沖蜆、赤螺等多しといふ。

椎塚貝塚は同郡高田村椎塚中の峰にあり此貝塚よりは鯛の顛頂骨に刺されし儘の骨銛大野氏著先史考古圖譜第八版の八骨製曲玉同十八緒締玉第十版の七の皿第十六版の一、二、四、五、七の角、牙、骨器第十九版十二の紡錘車等其他多くの遺物を出せり。

吹上貝塚は同郡江戸崎町吹上にあり此貝塚よりは人骨を出せるがこれに因りて食 風習の行はれしことは推定せらるべきなり。

余山貝塚が福田、椎塚吹上等の貝塚と同期代のものにして其遺物に於ても殆ど同型のものなりとせば其民族に於ても亦同一なりしならんか而して余山はアイヌ種族の遺跡なりとして知らるるものなるが近時この貝塚より廣頭の人骨を發見されしといふ蓋しアイヌ種族は長頭骨にして廣頭骨にあら

ざればここに如何なる關係あるか研究すべき問題なり。

阿玉臺貝塚は香取郡良文村阿玉臺先堂にあり、高島氏は此貝塚を第二期に屬するものとせり而てこころり出づる土器によりて阿玉臺式の名あり東葛飾郡姥山貝塚より出づる土器は阿玉臺式なりと江見水蔭氏はいへりといふこの貝塚の近傍に貝塚の貝塚ありまた著はる。

手賀貝塚は東葛飾郡手賀村にあり、廂髮土偶を出せしにより特に著はる、この手賀村にはこの外に片山柳戸岩井の貝塚ありて何れも土器石器を出せるが特に岩井よりは自然石に青色を帯びたる美しくき曲玉大野氏先史考古圖譜第八版七、土偶、骨錐、貝輪等の珍しきものを出せり。

大井貝塚は同郡風早村大井舟渡にありこの貝塚よりは土製の丸玉先史考古圖譜第八版の十一、土偶石器土器を出せり。

堀之内貝塚は同郡國分村にあり此貝塚よりは人骨及骨銛、貝輪、石器、土器を出しまた人類學會々員等屢々發掘を試み著名なりこの國分村及其近傍には國分寺貝塚曾谷貝塚イゴ塚貝塚大麓天貝塚姥山貝塚等ありて多く遺物を出せしが帝都に近きが爲め或は學者或は好事家或は所謂貝塚荒しのため發掘せられ今は始と全滅の有様なりといふ。

古作貝塚は同郡葛飾村古作にあり人骨及土器石器獸骨角等の遺物を出せり。

加曾利貝塚は千葉郡都村加曾利字屋敷にあり其面積容積の廣大なる稀有の大貝塚にして本邦第一と稱せらる貝層の厚さは普通七、八尺より一丈二、三尺に及び面積大約八丁平方なりといふ此地袖ヶ浦の渚を距ること凡一里半、浦抜約三十米突の臺地にして東方は急斜面をなし溪流を隔てて遙に

丘陵を望み景致頗る佳なり此貝塚よりは磨製石斧、打製石斧、砥石、有窩石、貝環、貝鉋刀、骨器獸骨、木炭、土器、貝類には蛤、マテガヒ、ニナ、サルボウ、サ、エ、キシヤゴ、牡蠣、ツメタガヒ、イセシロガヒ、サ、メガヒ、蜆等を出せり而して土器は土鍋壺等の類多く何れも厚手式にして土質稍堅緻に意匠は概して粗大なれども把手の部分には多少の技巧を凝されたるあり、而して把手は皆外部に附着し二個のもの三個のものあり土器の何れにも黒雲母を含み中に朱塗の土器即ち丹彩を施したるもの二三發見されたりまた土鍋の底部に歴然と炭灰の痕跡を認めらるるもの少なからざりといふ。

都貝塚矢作貝塚はともに都村に在りて加曾利貝塚に近し加曾利よりは厚手土器を出すに都及矢作には薄手土器を包含す蓋し部族の相違と時代關係等より其差別を生せしならんといふまた矢作と仁戸名と上坂尾の貝塚よりは人骨を出せり。

六通貝塚は同郡椎名村大金澤にありこの貝塚より發見されし土偶二は高橋健自氏考古學二十八及二十九圖に載せらる其他土器石器貝器等を出せり。

門前貝塚は市原郡市原村郡本門前寺山にあり低地に接する高臺の地にして舊稱を古甲といひ古へ寺院のありし所なりといふ貝層の厚さ一丈以上貝殻は比較的小にして土壤を交ふること少けれども遺物之しく稀に厚手繩紋土器の層中に介在するを見るここより出しものに磨製石斧、貝輪鹿角製鈎針曲玉砥石、利用せしと思はるる石棒の斷片等あり。

遺物包含層として太平洋沿岸地方に下永井利根川流域に小南、王造、八代、中里、都部、宿蓮寺、久寺家、

東京灣沿岸地方に大金澤等は其名ありしと雖も墾開耕鋤等により攪亂せられ出土の遺物 携へ去られ概ね蹤跡を矢ひ今何物が其地より發見されしかを尋ねんとするも其詮なきが如し。遺物散布地及遺物發見地は半島を通じて百四十九個所に貝塚の百十六個所と遺物包含層の九個所とを合するときには二百七十四個所に上るべく其數寡きにあらざるなり。遺物中石器を發見せし地は石鏃四十一個所石棒八十二個所磨製石斧九十四個所打製石斧五十一個所凹石十八個所等にして地方により其分布を異にす即ち利根川流域は多く石斧を出し我君津郡には石棒の發見最も多きが如し茲に表に依りて遺跡遺物の分布を示すべし。

先史時代遺跡及遺物發見地表 其一

地域	貝	塚	遺物包含層	遺物散布地	摘要
太平洋沿岸地		八		一九	
利根川流域地		四二		三四	
江戸川流域地		二七		九	
東京灣沿岸地		三二		六	
極南安房地方		二		一	
君津郡		五		七〇	
計		一六	九	一四九	

先史時代遺物發見地表 其二

地域	石鏃	石槍	石棒	石劍	磨石	打石	石斧	石匙	石皿	凹石	砥石	石錘	石楯	圓石	石錐	敲石	石槌	計
太平洋沿岸	一〇	一	二	一	一三	七	一	二	四	三	一	一	一	一	一	一	一	四五
利根川流域	二二	一	一〇	三	三八	二五	一	一	五	三	三	四	一	一	二	一	一	一〇
江戸川流域	六	一	七	一	一一	七	一	一	三	三	一	三	一	一	一	一	一	四三
東京灣沿岸	三	一	八	一	九	六	一	一	四	三	一	一	一	一	一	一	一	四〇
極南安房	一〇	一	四	一	一	一	二	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一〇八
君津郡	一〇	一	五	四	二二	六	一	一	五	二	一	一	一	一	一	一	一	一〇八
計	四一	二	八二	七	九四	五一	八	四	九	一八	八	七	五	五	四	五	三	三五三

此表に示せる遺物發見地の外に太平洋沿岸地方に獨鈷石、利根川流域、石鑿、緒縮形石、石刀、紡錘車、石剃刀、東京灣沿岸地方に有窩石、曲玉、石臼、石杵、君津郡に發火器石、石製魚、石冠石環曲玉を出せし地各一個所ありたり。

先史時代遺物發見地表 其三

地域	土器	土偶	動物土偶	土版	人骨	獸骨	貝輪	貝器	骨鈎	骨錐	骨器	釣針	角器	角	裝具	計
太平洋沿岸	七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	一	一三
利根川流域	二八	七	二	二	一	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	四九
江戸川流域	八	三	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一六

東京灣沿岸	一四	五	一	四	六	二	二	二	二	一	二	一	三	一	一	一	三	七
極南安房	六	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
君津郡	一二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	七五	一七	二	二	六	一	二	八	二	三	一	二	三	五	一	一	一	一四

右の表に示すが如く遺物中石鏃を出せし地は四十一個所にして利根川流域最も多く君津郡之に次ぐ而して其材料は主に黒曜石燧石等なり蓋し黒曜石は房總半島には絶へて産せずして其原産地は信州和田峠諏訪湖畔伊豆半島の南角等なるに石鏃と共に其材料たる塊片をも發見することあれば先住民は或は此等黒曜石原産地方より移轉せしか或は此等の地方と交通往來し通商貿易を試みしものなるかは之によりて推測せらるべきなり。

石棒を發見せし地八十二個所にして其中五十 個所 石棒の数は六十三基 は我君津郡に屬せり比較上多きを占むと謂ふべし其石質は概ね大なるは花崗石小なるは秩父青石なり而して此等の材料たる石は固より石無し國の稱ある下總は勿論半島内の何れにも産せざるものなれば先住民と此等の石材を供給せし原産地との間に往來貿易等の關係ありしを知るに足らん。

石斧を發見せし地は百四十五個所にして磨製石斧に九十四個所打製石斧に五十一個所を算す而して利根川流域最も多く君津郡之に次ぐ土器に厚手式繩紋土器と薄手式繩紋土器と又乾漆型土器等あり其分布を異にするが如し而して各其分布によりて之を製造し之を遺せし民族の分布移轉の方向及其盛衰消

長の如何を知るを得べければ之を調査し其分布を知るは頗る重要な事なり、然るに明治十二年モールス氏の大森貝塚發掘以來介墟の發掘漸く風をなし競ふて之に従ふものありしにより帝都に近き半島の地は最も多く其衝に當り遺跡の多くは發掘せられ貴重寶庫は鎖鑰を失ひ今は殆ど全滅の形狀を呈し遺物は散て多くは其蹤跡明かならざるに至れり若し遺跡發掘の當時發見せし遺物は其出所、種類、形質等を調査し其要項を公示せられしならば今日之に依りて其分布を知るを得べかりしにただ漫然として發掘し出土の遺物は先を争ひ携へ去り世に教ふる所少なりしにより今何れの貝塚より厚手式繩紋土器を出し何れの介墟か薄手式繩紋土器を出せしか明かならず、然れば或は遺物所藏家に就き或は遺物陳列場に到り或は殘墟に殘片を探り之を調査研究するの外なからんとす然れども此等の業は短日月の爲すべきことにあざれば之を他に譲り顯はれたることのみを示せば

利根川流域の余山貝塚はアイヌ種族の遺跡なりと稱せらる而して此所より出づる遺物は常陸の福田椎塚等の貝塚より出づるものと同型なりと云はる。

阿玉臺貝塚より出づるものは粗大にして雄大なる把手を有するを其特徴とすといふ而して之に阿玉臺式の名あり蓋し厚手式繩紋土器なるべし江戸川流域の姥山貝塚より出づる土器はこれに屬すといふ。東京灣沿岸地方の加曾利貝塚よりは厚手式繩紋土器を出す云ふ。

武藏相模の海岸線よりは薄手式繩紋土器が發見され極めて稀に厚手式繩紋土器を出すといふ之に反して伊豆半島に於ては厚手式繩紋土器が主體となりて發見され薄手式は僅に介在するに過ぎずといふ而して伊豆本島より海を渡りて附近の島々即ち大島利島等は凡て厚手式に屬する遺跡なりと

聞けり。

甲斐信濃の遺跡は厚手式縄紋土器系統に屬し伊豆半島及大島等の遺跡は之と直接若くは間接に聯絡を有すべく云はる而し、房總半島の厚手式は亦是等と聯絡を有つものならんか。

我君津郡に於ける先史時代の遺跡遺物を房總半島のそれと比較するに半島内の貝塚は百十六個所に及べるに之に對して僅に五個所に出でず之に反して遺物散布地及遺物發見地等に至りては四百三十個所に及ぶ百三十個所を占むれば比較的多數なりと謂ふべし而して尙ほ踏査探究に努むるあらは發見する所寡きにあらざるべきを信ずと雖も假すに時日のあらざれば之を將來に期し既に發せられしものに就き聊か説く所あるべし。

本郡内に發見せられし貝塚は前表に掲げて永井作祇園葎ヶ作鹿島山王等の數所に過ぎず而して是等の貝塚は墾耕發掘等により其舊形を存するものなく包含せし遺物は攪亂せられ出土物は發見者拾得者好事家骨董商等によつて携へ去られ殘存するものは極めて少く寶庫は殆ど空虚に歸せり。

永井作貝塚よりは磨製石斧を出せり土器貝殼等は細片となり土壤と混じ散亂せり土器は多くは褐色の薄き縄紋式なり。

祇園貝塚よりは薄き縄紋式土器、石鏃、打石斧、長圓形の自然石の一方を磨り琢き及となしたる半磨製石斧、磨製石斧、敲石等を出せりこの貝塚は木更津海岸より凡二十餘町を距つる中尾伊豆島、祇園の境に當る丘陵中にあり而してこの丘陵の突角は北西に方り凡二十餘町を距つる坂戸市場丘陵の突端と相對し其中間は小櫃川の流域に屬する平衡なる沖積地なり蓋し先史時代には祇園永井作相里太田等

の丘陵も坂戸市場奈良輪等の丘陵も其山脚は海水を以て洗はれ祇園丘陵の突端と坂戸山の突端とは相對して岬角をなし江灣の入口を形成しそれより海水は深く東方に向つて彎入したりしならん然れば木更津眞舟清川巖根金田檜葉神納中郷等の沖積地は海水の湛ふる所たれば當時の住民は祇園永井作等の丘陵上に棲息し其の眼下に漣漪を寄する内灣に出て、は魚介を漁り其丘陵より東北方に連亘せる蒼蔚たる森林に入りては野獸を獵し悠々生を樂しむ間に自らは是等の介墟は形成せられしものならん。

葎ヶ作の貝塚は大久保の丘陵の北西に走りてまさに盡きんとする所にありこの貝塚よりは土器、石棒、石皿、貝輪、骨器、鹿角、獸骨、魚骨等を出せり土器は薄き縄紋式なり其中には内面に朱の附着したる破片は頗る意匠に富み雅致ある者ありたり、骨製の釣針や彫刻を施せる鹿角もまた見出されたりさてこの貝塚の下を流る、烏田川は北西の方向に走り凡二十餘町にして櫻井の海に入る其流域には牛ヶ作俵ヶ谷大久保谷等と稱する深く入り込みたる谷間の地ありて沿河の地とともに沖積層を成せり先史時代には是等の谷間の地や葎ヶ作丘阜の麓字鹽沼邊は湛然海水を以て充たされ屈曲出入多くして景致に富める港灣をつくりしものならん而して當時の住民は翠巒を倒映せる鏡の如き海面に或は骨製の釣針を垂れ或は石槍を振つて大魚を屠り介墟の側に同族團欒し嬉々として其美味を賞せしものと想像せらる。鹿島貝塚は上飯野丘陵の東南に走れる支脈中にありて石鏃凹石石皿等を出せり山王貝塚は飯野小學校の敷地及其近傍にあり今は墾耕削平せられ貝殼の土壤に混して散亂せるを見るのみここよりは石鏃及薄手の縄紋式土器の破片を出せり而して貝塚のある山王の地は青木海岸を距る凡二十町ここには舊飯野陣屋跡九條塚三條塚方形塚等の數基の古墳ありて地勢周圍の地よりも高く宛も海中に於ける島嶼の

如し蓋し先史時代には人見山の西鼻と神明山の突端とは岬角をなし其間は灣口となり海水彎入して三舟山人見山神明山等の麓を洗ひ茲に一小灣を成せしなるべし然るに西風怒濤を起し海砂を捲きつつ三舟の山脚に突き當るや波浪は反射作用を起し其反對の側なる海底に北より西南に延きて即ち今の海岸線に殆ど並行して砂洲を生じまた小糸川より流出する土砂は沿岸流に依りて之に加はり漸く發達して砂嘴と成ることにて於て小糸川及相野谷、三舟等より流るる水は土砂を運ひ力を海水と合せ内灣を埋むることもにまた砂嘴の發達に努め之を擴張隆起せしめ今の内裏塚附近より山王へかけての高燥地をつくりて小島嶼たらしめ而して今の飯野平野の大部分は尙ほ内灣として殘せしなるべし然れば當時の住民は此島嶼及鹿島等の地に居を占め其周邊の海灣に魚介を漁り悠々として閑日月を消せしものと想像せらる。

本郡には遺跡としての遺物包含層は未だ發見せられず遺物散布地の今日までに發見せられしは小櫃村戸崎の城山、峰、塚の腰根形村飯富の臺小糸村根本の峯山、秋元村市場の貝崎三島村正木の古屋敷貞元村上湯江の三舟臺湊町湊の富士見臺等なり是等の地より發見されし遺物は遺物表に依りて之を示し其主要なる者に就き見聞の概要を説かんに戸崎の城山は小櫃川に臨める丘陵にして舊城址に屬し今尙ほ塹壕等の跡を存す包含層は城砦を築くに際り攪亂せられしが其跡を見すと雖も遺物には土偶石鏃石錐石匙石鎗磨製石斧打製石斧石棒凹石石皿曲玉等を發見せりこの外に石鏃石鎗等の材料たる黒曜石の小塊を出し土器には完全のものなく褪色厚手の繩紋式の破片を出せり。

根本の峯山は小糸川の北方にある臺地にして今は多く園圃となれり此地よりは石鏃等の材料たる黒曜

石の塊片及褐色厚手繩紋式土器の破片を出すこと多し石斧は打製と半磨製のものを出せり。

市場の貝崎は小糸川の南岸にある小高き地なりここよりは厚手繩紋式土器の破片を出せり正木の古屋敷は高き臺地にして今は小學校の敷地となれり此地よりは石棒と厚手繩紋式土器の破片を出せり。

三舟臺は三舟山の中腹に位する平坦なる臺地にして今は墾開して畑となれり此地より厚手式繩紋式土器石鏃磨石斧等を出せり。

石鏃は小櫃村戸崎の城山、塚の越及峯小糸村根本の峯畑貞元村上湯江の三舟臺等より發見せられ其數大凡二百個に上るべし而して篋代のあるもの多きを占め質は黒曜石、燧石等なり石棒に大小あり大なるは概ね花崗石を以て造られ小なるは秩父石クワライトシストを以て製せらる而して其最、大なる者は久留里町浦田

字部田の丘陵上にあり、長さ四尺二寸餘花崗石を以て造らる眞の石棒にあらす後世の模造品なるやも知るべからず、薄暮刻々其實相を突め再査すべし里

人は之を石尊神と稱し崇敬す相州大山の石尊の神跡も斯る石棒なりと聞く之に次ぐべきものは鎌足村矢那の石井福藏氏稻荷社内

にあり長さ三尺三寸餘ありて石質は花崗石なりこれらは神跡として奉祀せらる蓋し神体として祀らるる石棒は概して其形大なるが如し然れども其形小なるものにして奉祀せらるるものもあり富岡村田川の

神明社に存する石棒は大ならざれども疱瘡神として崇拜せらるまた其形状の關係等にて祀らるるあり

松丘村宇坪の熊野神社同村高水の大鳥神社に存するものこれに屬す、而して此等は印度に於けるリンガと同一のものとして崇拜せられしなるべし大鳥神社の傍の丘陵上も石棒の存在せし所には木製陽形の數個奉納せられしを見また宇坪の熊野神社の石棒に關しては笑ふべき奇習傳説ありいづれも生殖器崇拜に關することなり、エドモンド、バックレー氏の日本に於ける生殖器崇拜中に日本考古學の示

す所の遺物によれば生殖器形の諸種の棒が磨製石器時代に存せしことは明なりと論せられたり然りこの説の如く本郡内に発見せられた奉祀せらるる石棒中には其形状の頗る奇なるものあり蓋し先住民には生殖器崇拜の風存せしものなるか。

男根崇拜は印度の習慣か然らざれば東方アジア大陸の習慣にして我國固有の習慣にあらずと文學博士廣池千九郎氏は論せられたり(伊勢神宮第一章十八頁)しかり印度に於てはリンガ Linga (男根)はシヴ Shiva 神の象徴として崇拜せられ佛敎にては摩訶迦羅即ち大黒天と稱せられ我國へ渡り來りて惠比須と共に概ね家々は奉祀せらるる蓋し大黒天の頭巾を戴きたる容姿はリンガを象り其ふまへたる二つの俵はヨニ Yoni (女根)を表はしたるものならんといふ然れば印度に生殖器崇拜の習俗あり之が我國へ傳來せしは事實なり然れども我先住民俗と推想せらるるアイヌ族に生殖器崇拜の俗ありしことは其遺物たる石棒等によりて想像せらるる然れば我民族は印度と交通し其俗を感受せざるの以前に於て既にアイヌ族と接觸し其習俗に倣ひしにあらざるなきかまたバックレー氏は天之御柱は確に男根を表するものなり而して其柱は婚屋の内に立つべく床入りの前に其柱を巡りたることは生殖器崇拜と關聯して行はるる思想より見て能く理解し得らるべく而して其思想中多産を得んとする希望が最も重きをなせしならん日本の太古に於ても他國の太古の族長時代に於けると比しく夫婦にして子を有すること益々多ければ益々富を得たるべし而して金勢神に祈ることは此結果を得るに於て最有効と信せられしならんと説けり獨り天之御柱のみならず天沼矛淤能基呂島等の神話につきても説あるべければ斷じて生殖器崇拜は我國固有の俗にあらずとは言ひ難からん。

石劍は小櫃小糸竹岡等の丘陵地より発見せられしか缺損ありて完全なるものにはあらざれどもいづれも石質堅緻にして能く琢磨し精巧なるものなり。

石斧には磨製と打製と半磨製とあり磨製の中八重原村三直境立川氏藏 小糸村糸川イワン作小糸小中村泉

荷鞍中小學校藏 湊町岩坂天羽農學校藏 発見のものは最も精巧美麗のものなり半磨製のものは祇園貝塚より発見せられ中村保藏氏藏せらる。

石皿の完全なるものは清川村祇園の稻荷塚と三島村宿原三島神社内に於て発見せられたり葎ヶ作貝塚発見のものは破片なり今宿原発見のものは三島神社に保藏せらるれど其他のものは所在分明ならず。

發火器と推定せらるる凹石は小櫃村戸崎の城山と飯野村上飯野鹿島貝塚より発見せられたり。

石冠は波岡村小濱齋藤家に藏せらるる蓋し勤土家にして國學者歌人にして愛石家たる齋藤昌豊翁の愛藏せしものなりと云ふ其発見の地を詳にせず。

石環は貞元村郡の郡家の遺跡より発見せられたり今里人岡田彌吉氏之を藏すといふ。

石器時代の曲玉及小玉寺は小櫃村戸崎城山より発見せられたり。

土器は丘陵地方よりは厚手式繩紋土器を出し沿海地方よりは薄手式繩紋土器を出す如し土偶は小櫃村戸崎城山より一個を出せしのみ土版は未だ発見せられず。

骨製釣針貝輪は葎ヶ作貝塚より発見せられたり。

此地の遺物は其出所、所藏者、発見年月日等を表に依りて之を示さん。

先史時代遺物表

全上にあるは全上欄の略、全右にあるは全右欄即ち右傍の略なり

種類	數	完	否	出所地名	所藏及記載書名	發見年月	有無	摘	要
石斧打製	一	完	全	清川村祇園目塚	清川村祇園中村保藏氏藏	明治四十二年頃	有		
石器			全				全		
石皿	一	完	全	全村大字稻荷塚		明治四十一年六月			全村大字木村新太郎氏其所有稻荷塚にて發見
石棒	一	破	片	神納村	神納村渡邊直治氏藏				
石器		破	片	同	同				
石器		破	片	同	同村萩野助七氏藏				
石器		破	片	同	同村松野萬五郎氏藏				
石器		破	片	同	同村渡邊大郎右衛門氏藏				
石器		破	片	同	同村渡邊大郎右衛門氏藏				
石斧磨製	一	全	全	檜葉村坂戸市場	全村大字伊藤房吉氏藏		有		
石器				根形村飯富字山野		明治三十年頃	全		野中完一氏來遊の時發見せしといふ
石器		破	片	全					
石棒	一			馬來田村茅野茅野七塚		明治四十一年八月	有		
石棒	一			小櫃村戸崎宮崎神社	全上	明治十九年	全		磯部澤の道路修築の際發掘せしといふ
石劍	一			下部缺損	全村大字森久三氏藏				

種類	數	完	否	出所地名	所藏及記載書名	發見年月	有無	摘	要
石劍	一五			全村大字字城山の畑	全村大字松崎豊司氏藏	明治四十二年四月以降	全		
石斧磨製	一	完	全	全			全		
石斧磨製	三	全	全	全	全村大字森國松氏藏		全		
石斧打製	一	全	全	全			全		
石鎗	一			全			全		
石鎗	一			今村大字字城山及塚の越	全		全		
石鎗	一			今村大字字城山	全村大字重山庄之助氏藏		全		
石の發火器	一			全			全		
石斧磨製	一	完	全	全	今村大字森久三氏藏		全		
石鎗	一〇			全			全		
石鎗	三五			全	全		全		
石棒	一	破	片	全	宮崎輝次氏藏		全		
石斧打製	四	完	全	全			全		
石斧磨製	三	全	全	全			全		
石製の魚	一			全			全		
石鎗	一	破	片	全			全		
石鏃	八〇			全村大字字城山及峯	全		全		

石棒	一	上下部缺損	全	馬南利六手鹿島台鹿島神社	全上		全	
石棒	一		全	真元村中富石神社	全上			
石環	一			全村郡家古保利乃美夜介跡	全上	明治四十三年十二月	有	
石棒	一			飯野村本郷三舟遠山氏稻荷社	全上		全	
石皿	一			全村上飯野鹿島元貞塚				明治三十一年發見せしこの事なれし今之を見ざるを得ず
石鏃				全				全
石鏃				全村下飯野山王飯野小學校々庭内		明治四十三年十二月		明治四十三年十二月拾得せしといふ
石棒				佐貫町八幡八幡神社	全上			
石斧磨製	一			湊町木村				
石棒	一			全町湊八坂神社	全町全	大正二年一月	有	元八坂神社にありしを移せしものなりといふ
石斧磨製	一	完	全	湊町岩坂野中氏庭前の畑	全町全		全	
石斧磨製	一	完	全	環村六野大日堂の傍	全上			
石棒	一	下部缺損		全村田原山熊野神社	全上			
石棒	一	下部缺損		天神山村横山桶神社内	全上			

石棒	一	下部缺損		竹岡村竹岡十宮薬王寺境内	全上	大正元年十月		
石劍	一	下部缺損	全	中村中島武勇小川竹治郎氏宅地内	全	大正九年	有	
石斧磨製	一	完	全	中村泉荷鞍	中小學校藏		有	
石棒				湊町櫻井山神社				
石斧	一	完	全	中村練田	中村練田野日清氏藏		有	
石斧磨製	一	完	全	中村練木	中村練木水野福松氏藏		有	

先史時代の遺跡遺物に關しては既に其概要を記述せりと雖も此等の遺跡遺物は如何なる民族によりて遺留せられしか又其民族の盛衰移動進化の程度生活の狀態風俗習慣は如何等の問題に至りては毫も言及する能はざりしなり、蓋し書契以前に在りては唯一の資料は遺跡遺物なり而して遺跡遺物にして其調査に缺くる所あり其性質を究むること完からざることは何に據りて史實を明になすを得べき今本郡内に觀るに遺跡遺物の發見せられしも寡きにあらざる如しと雖も長汀曲浦海岸線の長さ十數里に亘るも發見せられし遺跡は三四に出てす郡内丘陵起伏し臺地沼澤平原其間に點綴し石斧を揮ひチャンを構ふるに適せし地到る處に乏しからざりしなれば力を踏査探究に盡さは遺跡遺物の發見望みなきにあらざりしも之を試みしものは極めて稀なり而して既に發見せられし遺跡遺物の如き四五の人士の短日月の間に探索し得たる所に係れば推して其足跡の普遍ならざりしを知るべし、然れば遺跡遺物の調査の如きは未だ盡せりと謂ふべからざるなり而して既に發見せられし遺物に就て之を觀るに石器の如きは比

較的多しと雖も研究資料に於て最も重要な土器に至りては寔に寥寥晨星の如しと謂ふべく而して石器は時代の關係種族の差別等に因り形式製作方等區々様々なれば之かアイヌの遺物なるか原始日本人に屬するものなるか比較研究するにあらざれば其如何を斷ずる能はざるなり土器に至りては厚手あり薄手あり曲線直線繩紋を省略し幾何學的紋様となれるものあり雄大なる把手を變し彌生式類似のものとなれるものあり粗大なるあり堅緻なるあり雲母を混するあり混せざるあり形式に於ても手法に於ても種々様々なれば此等の遺物はアイヌか原始日本人か將た靺鞨族の製作か或は兩民族の接觸により融和同化し彼是の長を採りて製作せしものなるかたまたま説を立つる者あるも其は臆測に過ぎざれば甲信奥越常武豆相または滿蒙と廣く各地の遺物と比較對照し之を研究するにあらざれば其性質を明かならしむる能はざるなり而して此等の業に至りては放棄して顧る者なく未だ毫も試みられざるなり、然れば徒らに臆測によりて言を費し説を設くるあらは其結果は世を欺き人を惑はすに至らんのみ是に由り本誌には單に遺跡遺物の概要を述ぶるに止め他に論及せざるなり之を要するに本郡に於ても房總半島に於ても史前の史實を闡明せんと欲せば精探に研鑽に更に一大努力を要すべきなり。

第二章 原史時代又古墳時代

原史時代は先史時代の次ぎにして有史時代の最初期なり一に之を古墳時代ともいふ古墳といへば千年前の者も二千年前のものもしかいふを得べければ其範圍漠として判明せざれば其内部より曲玉管玉切子玉等の出づるを佩玉時代とし時代の區別をなすをよしとすといへる説もあれど茲にいふ古墳とは高く著しき墳丘の上代墳墓をいへるものにて佛教傳來後の墓制によれるものとは自ら區別あれば其當否は暫く措き普通のことなへに従ふを便ならんとし古墳時代の稱を用ふることとせり、而して其年代は始めは先史時代に接し終りは奈良朝時代に及ぶべし。

原史時代は有史時代の中にあれば其名稱よりするも多少の記録の存せるならんとは想像せらるゝ所なれど本郡の如き帝都を距ること遠くして文化の波及のより遅き地にありては固より文献の徵すべきものあるなく僅かに斷片的の口碑傳説の存するあれどこれすら信を措くに足れるものは極めて少ければ如何にして生民の播殖分布變遷の跡より其生活の状態等を窺ふを得之を叙述するを得んや上世は邈矣測度すべからすとの一言を以て之を蔽はんか。

然りと雖もこゝに先人の遺跡遺物の存するあらんか史籍文書に於て知る能はざる事實も之によりて推究するを得べし即ち古墳横穴等の分布によりては人民播殖分布の地方を知るべく器財等の遺物によりては生活の状態風俗習慣等をも察知するを得べし。

然れば本郡にして是等の遺跡遺物の現存せんか之によりて以て其史實は闡明せらるゝを得ん實に遺蹟

遺物は史實を包蔵するの寶庫なりと謂ふべし、本郡に於ける此の寶庫の存在は如何
朔風枯葉を拂ひ野も山も褐色を呈せるの頃或は田圃の間を逍遙し或は林野を跋渉せばこは天然にあら
ざらんと疑を生せしむべき圓丘に屢々遭遇し或は林藪に傾斜面に怪しき洞穴を見出すことあるべく
又榛莽を拓き南畝に耕すのとき或は腐鏽せる刀劍或は異様な土器片を發見することあるべし、前者
は遺骸を收容したる墳丘及横穴にして後者は古代の遺物なるは固より言ふを待たざるなり、寔に先
史時代の遺蹟遺物に富める本郡は原史時代のそれに於ても頗る豊富なり、然れども是等に對する調査
研究は、從來毫も顧みる所とならざりしにより其所在すら世に知られしものは僅少なりき、然れば今
後假すに年月を以てし實査探究大に力を用ふるあらば其發見する極めて多く學界に貢獻する寡からざ
るべきを信するなり。

本誌に於ては僅かに數年間或は實査し或は探聞せる主要なる遺蹟遺物を舉げ且つ之に關して調査せる
所を録し臆氣にも此時代を推測するの料たらしめんとするのみ其寶庫を開き史實を闡明するの業に至
りては之れを後人の研鑽に待つ

第一節 遺 跡

遺蹟を別つて都邑・古墳・横穴、製陶所、製鐵所等となし順次其の概要を記す。

一、都邑

本郡内には都邑の存在せし口碑傳説の存するなくまた其遺址と覺しきもの、未だ發見せられしことな

し但し小櫃村末吉に小川と稱する地ありて弘文天皇の御所の遺址なりとの傳説あれども未だ其地より
殘址遺物等の發見せられしを聞かず。

子孫相承け人の定住せる地には其近傍には墳墓あるべし然れば古墳の多く集れるの地あらば其近傍に
は人の群居せし地即ち都會の如きもの、存在せしものなることを想像せらるべし鳥部山の京都に北邨
の洛陽に於ける如き其例を見る。

今日までに探査せし所によるも本郡には古墳の多く集れる地少しとなさず、然れば此等の地方には會
て繁盛なる都會存在せしか或は國造縣主稻置等の居を占めし所たりしやも知るべからず然れども未だ
何等遺址の發見せらるゝものなし聞くトロイの城址は獨人シュリーマン氏によりて發見せられ千古の
疑惑を氷解せられしと若し將來或はシュリーマン氏の如きものあらば遺址の發見も空望に終らざらん
か。

左に古墳の集まれる主なる地方を擧ぐ若し國造等の居住地都府の所在等に關し研究の榮ともならば幸
ひ甚しと謂ふべし。

小櫃地方

小櫃地方には俵田の白山神社境内に瓢形の大古墳あり、其近傍にも多くの古墳あり上新田の上原、末
吉の萩の臺、寺澤の瓜倉原等にも無數の古墳の碁布せるを見る戸崎にいたれば瓢形圓形の古墳大小無
慮二百乃至三百を以て數ふべし。

根形地方

創造最も古しと傳へらるゝ飽富神社の附近飯富臺及三黒等に多くの古墳の集れるあり、
清川及木更津地方

清川村祇園の鶴巻塚大塚山より木更津の稻荷森眞舟村の請西の四房が原より太田の戀の森へかけて古墳累々として夥しかりしとは古老によりて傳へらるゝ所なり、而して其多くは鋤犁の犯す所となり現存せし者は少しと雖も其數の多かりしは疑ふべからざるなり。

飯野地方

有名なる内裏塚九條塚三條塚方形塚等ありて其の近傍には瓢形圓形の古墳數多散在し其所在は飯野青堀の二村に跨り廣き地域を占む。

小糸地方

小糸村根本より中村大井へかけて山巔に圓形の古墳數多ありまた糸川鎌瀧福岡等にはなたらかなる丘陵の上及臺地に圓形の古墳あり其數少からず。

二、古墳

單に古墳といへば其範圍漠として明かならざれば大概の區別をなさんに佛教は其傳來以後漸く弘通發達し奈良朝に至りては其感化の及ぶ所頗る廣大にして葬祭の風の如きも其趣を變し埴輪の如きは漸次廢絶せられ或は火葬を行ひ或は墓碑を建て頓て卒塔婆を用ふる時代とはなれり、然れば此時代より以前に屬する者を古墳とし更に其時期を其位置形狀及内容等の差異により之れを區別して三期とす即ち

第一期 開國より神武天皇まで

第二期 神武天皇より推古天皇まで

第三期 推古天皇より奈良朝時代に至る

第一期の古墳は概ね山巔に在るを常とし其形狀は圓形若しくは笠形にして濠渠を設けず棺は凡て木を用ひ槨は不規則形の大石を用ひ長方形に圍み副葬品は日本固有の風を存するものゝみなり、但し身分の下れるもの若しくは土地の形勢により其位置較や山腹に下れるあり又山巔の古墳にして濠渠を繞らせるもありこは古風に倣へるなり。

第二期の古墳は其位置多く山麓に下り其形狀は圓形の外前方後圓の瓢形あり、之に階段を附し周圍には濠渠を繞らして其規模を壯大にし又陪塚を置き棺は石製槨は整形の石を用ひ外部には立物また埴輪を樹て副葬品には往々漢韓風の物を交ふ。

第三期の古墳は其位置漸く低地に下り否らざるも多く群をなし濠渠なく陪塚を置かず規模大に縮小し陶棺の製作起りて石棺減し立物の内埴輪の類漸く廢せられ之に代ふるに碑銘の類を用ひ火葬行はるるに至りしにより之に要する器物あり副葬品には模造物を以て實用品に代ふるの風を生せり。

本郡の古墳の其の各々は此の三期中の何れに屬すべきものなるか固より内部の組織構造副葬品に至りては容易く之を知ること能はざれども外部に顯れたる位置形狀及濠渠陪塚の有無埴輪等の存否は之を知るに難からざれば之を實査し推究するに於ては思ひ半ばに過ぐる者あらん。

今實査せし所と口碑傳説及記録等により郡内に於ける古墳の主要なるものを擧げ其他は表によりて其所在等を示し唯た僅かに之か紹介をなすにとむ。

稻荷森古墳

木更津町木更津字稻荷森にあり、四周耕地にして今濠渠の存否知るべからず其形状は圓形なり此近傍には到る處所謂丸塚なるもの多く此處に三個彼處に二個點々散在せしが何時となく里人發掘し今是一個を存するのみ明治十四年辛巳此近傍に貸座敷を新設せんとし一塚を開きしに鈴二個刀二振破鏡一面土器一個及び長卷の如きもの一を發見せしが木更津警察署と木更津町の人鈴木長兵衛石田一郎の二氏にて之を分藏せりと聞きしが銅鈴二個は東京人西川勝三郎氏の手歸し帝國博物館に陳列せらる。

眞舟村に於ける古墳

眞舟村太田に戀の森と稱する丘陵あり、一に太田山とも云ふ先年其山巔一部を發掘して古土器數個を得たり、其一是徳利形のもの他は鈴鐸の如きものにて之を振れば鏘然として妙音を發すと木更津町の某氏之を藏すと(君不去)

眞舟村請西に古椀といへる所ありそれより程近き所に一古墳あり、形状は楕圓形にして上に松樹數十株あり未だ之を發掘したる形跡なし(君不去)

眞舟村請西の字四房及び其附近には此處彼處に古墳散在せしよしなるが今は其形影を見ず蓋し鋤犁の犯す所となりしなるべし。

明治三十三年木更津中學校建設の際敷地を整理せんとし一石槨に人骨あるものを發掘せりと當時其土工を請負ひし者語りといふ

大塚山古墳

清川村祇園大塚山にあり、其近傍は概ね平坦の地なり古墳は瓢形なりしが明治二十四年一月里人堀切角藏氏によりて發掘せられ銅製鍍金の兜古鏡等を得たり、古鏡一面は宮内省諸陵寮に於て其他のものは東京帝室博物館に於て購求し保藏せりといふ、中にも銅製鍍金の兜には中間の横金に種々の動物を彫刻し最も珍貴のものなり、故文學士小杉楳村氏は和泉國泉北郡船松村の仁徳天皇の百舌鳥野耳原陵に納めらるゝものと幾ど同時代のものならんとせり左に同氏の考證を掲げん。

上古の甲冑

小杉楳村

ことし明治二十四年一月ばかり千葉縣上總國望陀郡清川村の人堀切角藏の所有山林あざな大塚山また小御門など唱る地より石棺一個を發掘したりその收藏するものは大腿骨また鏡・刀・劔・甲・冑鍍金の類外に所用さだかならぬ銀製鎧付の金具などいたく腐蝕ながら現存するよし聞えしを六月中これを精しく觀る事を得たり、最も稀世の殘餘品にして其大かたをいはんにまづ冑といふ物銅質なるが板がねを幅五分許に截切り凡高さ四寸二分許の五十七間の鉢に造り立て前後の徑七寸許そのふくらみの所横めに幅一寸許の胴がねを入れ悉皆丸鋸を以て綴附てこまかなる文様を毛ぼりに畫けるが上より鍍金したり、又眉庇といふ物の破片も鍍金毛ぼりあること鉢に同じ別に八幡坐といふべき物是亦同質凡形半斷のかな物なほ鍍金毛彫あり鏗とも思しき破片もありて其精工いはんかたなし去し明治五年九月和泉國大山陵仁徳天皇百舌鳥耳原中陵をいふ初級の山頂南の方崩壞れて丸石を以て築造せし槨中に石棺あり其收藏の御物をひそかに拜觀するに甲冑刀劔玻璃壺などに珍らしき品々

の中に其冑の製作全く今年發見のごとく銅質板かねを四十五間たゞみかけ總體鍍金にして八幡坐の如きものもあるを略圖次に掲ぐなま學生はいと恠みしを當代の古物何ぞ疑を容れむとて其をり何くれ考證せりし事ありしかども恐れ多きものなりしからに略圖を存して現品はもとのまゝに收藏せりき是を以てこれを觀れば猶その仁德御陵のと同時代のものなる事何ぞ疑はん甕政の頃に筑後國月見せしといふ冑もなほ今圖の如く銅質鍍金製にして八幡坐あるもの略圖はもとれども其眞物未だ目撃せざれば證にあて難し

たまゞ今年また此古物を觀る古物學の日進にあはせていどうれしき事なりけり、又甲は今みな斷離にて其全體を見る事能はざれども銅版の小札といふべき一寸五六分幅は六分許に細く截斷しかたゞは丸くかたゞは寸切にして其寸切のかたに穴あり、革にて繋ぎ横にも穴ありて疊みかけ繋げる革そのまゝ遺存るものうちまじりて合計九百八十枚餘の夥しき鍍金せる小札がたちの金具あり、これ必綴り附て胴に製造りし物なるが此如く破壊しぬる者なるべし、此外に鐵質の小札がた疊みかけたる甲の破片も數枚現存れるにくらべ見てさて此想像せらるゝなり、大山陵の甲は此かたちには大に差ひて略圖の如し是圖に同じ製造は先年肥後國玉名郡江田村にて發見せし物今帝國博物館に陳列せるを見て大山陵の古甲を察知すべしなほ此古甲の類は嘉永年間阿波國勝浦郡田浦村の山崩れせし時發見胴の破片など同同時の物とおぼゆまた今回發掘の冑甲冑に附屬せる鐵質小札がたの類は埼玉縣武藏國北埼玉郡小見村より發見のもの帝國博物館に陳列しなほ十九年五月栃木縣下野國足利郡足利町蓮臺寺なる足利義國の墓地といふ所より發見せし物義國時代のものにあはざるは無論なり皆この式に同じ案するに奈良正倉院御物天平勝寶八歲六月二十一日の東大寺獻物帳といふものに

御甲壹伯領とある中に短甲十具桂甲九十領と見えたる其短甲十具は各甲、冑行膝覆臂等を具足し桂甲には冑行膝覆臂を掲載せざるをおもへば此疊みかけの小札がたは桂甲といふものにはあらでなほ短甲といふべき物にや今も正倉院に小札がた鐵製のもの殘餘多きをおもひ合すべしさてまた刀劔毀損の中に一枚は直刃凡三尺四五分の大身中心ナカの方は折たれども幅一寸七八分許のもの身の厚さ二分強錆膨れし所にて三四分許もあり、また木鞘鋼著して中身と共に鐵質混化したるものも多く又柄とも見ゆゞ千段巻に造りしまゝに是亦鐵に化したるもの數個ありみな直刀なり銅に著せたりけん銀板ニッケンのまくれも少しく交れりまた鍍は録に藏めしまゝなりしにや猪毛皮の逆頰のまゝに録に銅著しその毛鐵に化したるも最奇ならずや篋も同じく鍍に化せられて鐵に變せるなゞ皆いそめづらし此類他所にもある物なれど逆頰の毛の化鐵せるは實に奇珍なり上古多く獸皮を毛の儘使用ひし證徴いよゞ明かなり鏡は徑九寸八分許の古銅質疑ひなく六朝鏡と目するものにして裏背に人物立坐二軀また龍蛇等の文様あり、文字は判然せざれども日月天王などある類にして最も古く此甲冑同時に使用ひしからに同じく埋藏せし事疑ひなしなほ此鏡に類似の文様西清古鑑金石索などに見えたるが大かた此鏡も上等に近き品位を有せり、さてこれら時代を熟々考るにまづ其銅質に鍍金せる甲冑武器馬具の類上野野武藏信濃などの各國に涉りみな豊城入彦命また彦狹島命の舊蹟を傳ふる地より發見に係るもの最も多し其鍍金色も奈良朝ごろに使用ひたるものとは質大に異なり又鐵製、鍍金せし者も古けれどこは銅製のかた古くおぼえたり、彼此の傍證經驗を以て案するに千五百年以前に係るものなる事は大山陵に收藏せる冑を見くらべて疑ひな

かるべしさらば其製工はいかにといはんは本朝の製作にはあるべけれど様式は三韓に依りし者なるべく臆想すさてまた冑は鐵製のもの今は見えざれど甲は鐵製にして銅質小さね同式の者多くまじれるを以て案ずれば恐らくはこの銅製の者は甲冑共に儀仗などいふべき禮式に係る者にしてその實用戎具はなほ製鐵の甲の類をあてにしにはあらざるかいまだ考へ得ざれば博くこの珍奇古物を披露して同じ心の會員諸君に質さんと今その略圖をこゝにあはせしものす。

また清川村の注進には舊記口碑等に由り弘文天皇の御所縁の地なりとすれども發見の各種みな今少し時代上世の者にして天智弘文天武ごろの者にあらず。

由緒蓋し別にあらんと確信しつれば地方注進の意はすべて参考に供へず又強て案するに今回の古物の如き上世の者には必玉類をもあはせ藏むる風俗なりしが故に大かたは曲玉金銀環などいふもの一纏めに發見すべき事實に約束せるが如き者なるをこたびの一つらには玉類環類一種もなきは少しく不審はれがたし恐くは玉類を隱蔽せるにはあらざるか能く聞まほしくおぼゆるなり、但しこれらも日進に明らかになりゆく此すぢの注意なれば一言おごろかしおくものぞ。

この他千葉縣廳の通牒宮内省の考證等を録して参考に供ふ

望 陀 郡 清 川 村

堀 切 角 藏

本年一月七日上總國望陀郡清川村大字祇園字沖ナル民有山林ニ於テ埋藏物發見ノ旨届出候處右箇所ハ古墳ト雖トモ御陵墓ノ見込ナシ發掘品ハ考證上入用ニ付古鏡壹面ハ諸陵寮ニ於テ自餘ハ帝國

博物館ニ於テ購求候旨宮内大臣ヨリ相達セラレ候條其旨相心得ベシ

明治二十四年九月二十五日

千葉縣知事 藤 島 正 健

發掘古器物取調書

本年一月千葉縣上總國望陀郡清川村字祇園半民堀切角藏所有山林字沖舊名大塚山又小ミカドトモ稱スル土地ニ於テ發掘セル古器物取調ノ要領左ノ如シ

古銅鏡徑壹尺裏背ニ人物ヲ彫シ立坐二軀ツ、前後左右四區ニ配シ其間ニ四頭ノ龍蛇ヲ刻セリ世ニ六朝鏡ト稱スル類ナレトモ上等品ニアラズ冑ハ銅葉幅五步許ナルヲ以テ細ク疊ミカケ五十七間ノ筋鉢トナセルモノニシテ其高サ四寸二三歩許前後ノ徑七寸許膨ミノ所横ニ幅壹寸許ノ胴金ヲ廻シ悉皆丸鉢ヲ以テ綴着ク而シテ文様ヲ畫キテ毛彫トナシ其上ニ鍍金ヲ施シタルガ今ハ青錆ノ纏フ所トナレリ、又眉庇ト見做スベキ破片ニハ雲形ヲ彫刻シタリ又鉢ト見做スベキ破片ナドモ皆毛彫鍍金アルコト鉢ト同シ又ハ幡坐ト稱スル物ニ似タル品アリ是ハ丸形半斷ニシテ同質ナリ別ニ銅葉九百八十枚許アリ是ハ小ザネトモ云フベキ品ニシテ長サ壹寸五步計幅六步許間々革ニテ綴テ合セタルカト見ユルモノアリ又長サ三寸七八步許ノ同品數十葉アリ之ヲ臆想スルニ短甲或ハ桂甲ナドイヘルモノ、散亂セルナラン是等モ鍍金製ナルモ過半鏽錆セリ要スルニ千年以上ノ物品タルハ疑ヒナシ

鐵製ノ破甲數枚アリ腐蝕シタレトモ其形容ハ前記ノ小ザネトモ云ベキ品ニ類セリ、蓋シ異質同製

ノ甲ナラン尤モ腐敗甚シクシテ名狀シ難キモノ多シ刀劍毀損腐蝕ニ屬スルモノ數個ノ内一箇ヤ、全ク長凡三尺四五歩ニシテ中心ハ折レタリ、其他木鞘ノマ、腐化シ或ハ千段卷ノ柄ノマ、中心ト俱ニ化鐵セシモノアリ又鉏ニ着セタルカト見ユル銀葉少許アリ、鏃ト共ニ化鐵シ就中サビ付タル所ニ毛ノマ、化鐵セル物、逆頰錄ニ箭ヲ盛シマ、腐蝕セシナラン銀鏢ヲ細カナル金具ニ着ケタルニ二聯ノ零餘アリ何ノ使用ニ供セル物カ詳ナラズ注進書中兜ノ飾ナリトイヘト如何ニヤ
 以上略述スル器物ヲ按スルニ鏡ハ其銅質及ヒ鑄造トモニ大和國廣瀨郡大塚佐味田各村ニ於テ發掘セル物ニ下ルコト遙カナリサレトモ甲冑同時發見ヲ證スベキ要品トス銅質ニ鍍金セル甲冑ト類セル武器馬具ノ上野下野武藏信濃諸國ニ於テ豊城入彦命ノ舊蹟ト稱フル土地ヨリ發見セルモノ多ク帝室博物館列品中ニ藏ス鍍製小ザネ類ニ鍍金シタルモノ亦所々ヨリ發掘シテ同列品中ニアリ但コノ銅鍍ノ兩甲各破損シテ全體ヲ存セサルハ惜ムベキナリ
 刀劍鏃等ハ別ニ考フル所ナシ銀鏢ヲ着ケタル金具ハ肥後國玉名郡江田村ニ於テ發掘セルモノコレニ似タリ但其鏢ハ純金製ナリ未タ何ノ飾具トモ判斷シ得ス
 右陳述ノ如ク不判然ノ種類多クモ追テ明證ヲ得ルヲ俟ツ 宮内

附記本書ハ諸陵寮(宮内省ノ内)ヨリ堀切角藏氏ニ郵送シタルモノニテ消印ニヨレハ明治廿四年九月十四日東京發十六日木更津局ニ着シタルカ如シ

鶴牧塚

清川村祇園にあり、明治四十一年六月十五日里人木村新太郎氏によりて發掘せられ直刀劍等二十柄

頭一胃の破片黄金の鐔一鍔鏃數個漢鏡一面(徑六寸八分厚さ八分目方百八十夕)馬具鐙つり馬鐸杏葉一鈴四個ほうづき玉等を出せり、其發掘せし鐔、漢鏡、杏葉は東京帝國博物館に鈴二個其他は東京帝國大學に柄頭と鈴二個とは小櫃村宮崎庄之助氏に藏せらるる當時東京帝國大學より木村新太郎氏に寄せられし謝狀左の如し。

左記ノ標品本學ニ寄附相成正ニ領收其厚意深謝ノ至ニ候即本學ニ於テ悠久ニ保存シ學問ノ資料ニ可仕候也

明治四十一年六月二十二日

東京帝國大學總長男爵 濱 尾 新

木村新太郎殿

一、鍔具 壹個

一、祝部土器破片 二個

小の塚

同村永井作字小塚にあり、墳上に一株の松と榊の古樹とあり側面に石塊の露出せるを見る未だ鍬鋤の犯す所とならずして保存せらる。

乳塚

同大字字新田にありしか今は墾開せられて畠となれり小刀を發掘せしとの説あり。

四玉塚

同村長須賀にあり。

さかもり塚

同大字字柳町にあり、瓢形の古墳にして地積一段歩餘多く石塊を見る明治四十五年の頃村有財産として之を拂下げ土砂を取りしに基部に石槨ありと認めしにより其土工を中止せりと云ふまた其附近に土砂を取りし所一二個所ありしか土器鏡刀劔甲冑の類を出せしと聞く。

姫塚

田圃の中にあり、墳上に塔の笠蓋と基石の斷片あり。

塚の越の古墳

清川村長須賀字塚の越を開墾せしとき土中より古鏡一面瑠璃玉丸玉及土器一個と轡の附屬物ならんと覺しき物を發見し里人水野幸治氏によりて保藏せらる蓋し地は墳狀をなししなるべく開墾せしは明治四十三年の頃なりと聞く。

以上の古墳は木更津真舟清川の三町村に跨れる廣くして平かなる河海混成沖積地に存するものにして尙ほ此他にも多くの古墳の曾て存在せしことは里老によりて傳へらるゝ所なり、此の多くの古墳と既に發見せられし遺物等により推究せば原史時代に於ける此地の情勢を察するに足らんか栗岩英治氏は馬來田の國造居住地は分明せざれども傳説によれば現時の清川村以外の地にはあらざるべしと言へり或は然らんか。

高柳の銚子塚

巖根村高柳にあり、一に茶臼塚ともいふ曾て土を穿ちて多くの土器を得しことありと徳川時代此阜

につき至徳堂と稱する學館を建てしと聞く今墳上に至徳堂之碑其他碑石數基あり。

かんかん塚

神納村神納字山王下にあり、方五間高さ七尺許りあり登りて強く墳上を踏めばかんかんと音を發す故に其名ありと今より六十年許り前里人試みに之を發かんとし地を穿てば石槨の一隅少しく現はる已にして迅雷はためき天地震動す發く者色を失ひ急遽之を修め更らに土を封じ墳上に松樹を樹る其罪を謝せり爾後踏むも音響を發することなしと傳ふ。

福王丸陵

檜葉村奈良輪字上奈良輪にあり、高さ七尺餘周圍凡そ四十間石槨の一隅露出するが如し傳へいふ弘文天皇の皇子福王丸の墳墓なりと。

弘文天皇の皇子に葛野皇子と與多王とあり、水鏡に大伴皇子の御子父の宣せ置しによりて三井寺をば造り給し也とありて名を載せざれどこは與多王の御事をいへるなれば此の二皇子の外に皇子あるを知らざりしにこゝに福王丸あり未だ考ふる所なしなぬ温ぬべし。

鏡峰古墳

根形村飯當富神社の東方に一丘阜あり、鏡峰と稱す高さ大約百尺周圍は九町五十間許りあるべし其形は船をさかしまに伏せたる如し其巔に二基の古墳相並び存すとも方五六間許りなり傳へ云ふ墳中に神鏡を納む鏡峰の名これより出づとまたいふ是れ蓋し馬來田國造の墳墓ならんと。

三黒の遺物塚

根形村三黒の吾妻神社の背後にあり、一に丸山と稱す里俗橋媛の尊骸を奉葬せし處とも其の遺物を葬りし處とも稱す。

高谷の飯籠塚

平岡村高谷字飯出にあり、面積凡そ百二十坪饅頭の形をなす口碑に源頼朝下總に至らんとする途次此の丘上に憩ひ飯を喫するに蕨を以て箸となせしに誤つて口唇を傷けしかば其箸を逆しまに土中に挿し其の發生するを禁せしかば今に至るも丘山に蕨を生ずることなしと傳ふ。

頼朝さきに清川村長須賀壘か池にて葭を箸とし口唇を傷け此處に至りて復た蕨を箸とし口唇を傷く是に於て英雄の口唇完膚なしと謂ふべし知らず口碑の信否いかん。

茅野の七塚

馬來田村茅野にありしが今は名のみ残りて其形を失へるが如し其近傍に御所臺と稱する地あり曾て其地より石棒を發掘せしことありしといふ。

茅野の塚の越の古墳

馬來田村の茅野に塚の越といへる地ありて曾て數基の墳を具へたるものありしが土地拓かれ今は其形を止めずなりぬときく。

中將塚

馬來田村茅野七曲字會倉にあり。

瓶塚

馬來田村眞里谷の蛭作と茅野七曲との境なる山中にあり。

天叟院後の古墳

馬來田村眞里谷字蛭作天叟院の後にあたる山林中には多くの古墳あり。

久保宿の古墳

馬來田村眞里谷字久保宿にあり。

眞里谷の飯籠塚

馬來田村眞里谷字町原にあり丸塚の大なるものなり其附近にも圓形の小古墳あり。

俵田の瓢形古墳

小櫃村俵田白山神社の背後の丘陵上にありこれを小櫃山一に丸山とも稱す前方後圓の瓢箪塚にして高さ凡そ四間周圍百三十間許り其巔に橢圓形の窪める處あり其周圍は七十尺許りもあるべくこゝには樹木を生せずこれ恐らくは石槨の存する所ならんといふ墳上樹木鬱茂し巨竹あり刺楸あり就中刺楸最も多く其大なるものは抱圍一丈餘に及ぶべし、前面に小丘あり其頂稍々平坦なりこは御陵所考に出たる宣命場ならんといふ往時は古墳の周圍に行馬を設け人の入るを禁せしが維新後に至り何時となく廢絶し今は僅かに注連繩を墳上に張れるのみなれども其域内に至れば森嚴の氣人を襲ひ自ら肅然襟を正さしむ里人は弘文天皇の山陵として之を崇敬すこれ口碑によれるなり、其近傍には數多の古墳のり蓋し陪塚ならん明治三十一年九月帝國大學人類學教室出勤八木瑛三郎氏及び文學士中澤澄男氏其陪塚と思はるゝものを發掘し調査せられ其考を示されたり左に之を掲ぐ。

小櫃荒陵考

在大學 八木 奘三郎

上總國君津郡小櫃村大字俵田に一大荒陵あり、古來相傳へて某天皇の御陵と稱す本年八月予偶ま賜暇を得て友人中澤澄男氏（文學士にて現今陸軍の教官たり）と與に彼の地方に趣き主ら古物遺蹟の有無を探らんと欲す當時村民總代諸氏頻に該荒陵巡見の事を請うて過まず、因て其如何を確めんが爲めに陪塚と覺しきもの數個を發き幸に二三の遺物を得たり乃ち右新發見の古器物と彼の荒陵とに對して愚考の一斑を記し之を諸氏に送ること左の如し。

古物遺蹟の調査は物に由り場合に從つて其手段同じからず然れ共我日本の諸地方に存する古墳の種類に就ては大略左の數目に注意せざるべからず。

- 第一 古墳存在の位置
- 第二 同形狀の大小
- 第三 濠渠の有無
- 第四 陪塚の如何
- 第五 埴輪の有無
- 第六 石棺槨の如何
- 第七 副葬品の種類及配列の工合
- 第八 口碑記録

右の八目古墳の年代を知り又は死者の尊卑を考ふる上に於て尤も必要の事柄なり故に當荒陵并に發

見の古器物に就て所思を記するに先ち其概略を説く可し。

第一 古墳存在の位置

古代墳墓の築造は時期の前後に從つて其位置を異にせる形迹有りされば存在の場所は高所か低地か將た山腹か又石棺槨の顯はれ居る場合は如何なる方向なるかは第一に考へざる可からざる點なり。

第二 古墳の形狀及大小

古墳形狀は前記の位置と同様其時々に従つて多少異なる所有り即ち最初は概して山巔に圓塚を造りしものが次に瓢形に變じ來れるが如き例是れなり故に右等も他の點と共に豫め注意せざるべからず。

第三 濠渠の有無

山巔埋葬の時代は墳墓の周圍に未だ濠渠を設けず、後其場所を變じて山腹に下るに従ひ廣大なる濠を回らし其後に至て又々之を廢せる風有りされば右の如何も常に取調ふ可き必要を認む（但し例外は有りぞ知るべし）

第四 陪塚の如何

近畿の皇陵を初め諸國の重大なる古墳は皆陪塚を存せり而して其塚の如何によつて多少の増減有り之れ調査の一要件として毎に忘る可からざる條件なり。

第五 埴輪の有無

埴輪樹立の制は一時期に限れり故に此物の有無は年代確定の標準として尤も有要の材料なり然共一千餘年を経過せるもの多きが故に概ね土中に埋没して其影を認め難きを毎とすされば調査の際は深

く注意して破片を見出すか否らざれば樹立の場所を試掘すること肝要なり又右の存する場合は單に圓筒のみなるか將た土偶土鳥の類を交ゆるかをも精檢せざるべからず。

第六 石棺槨の如何

上代の墳墓中には石棺槨の存する有り否らずして孰れか一方に限れる有り又二者共に之なきもの有り其他陶棺の類を埋むるあり是等も時代々々に従つて大に趣を異にせるが故に存在の場合には形狀大小に注意し否らざる場合は遺物の配置を細檢すべし。

第七 副葬品の種類及配列の工合

古代副葬の品は其類一ならずと雖も一期より三期に至る間に於て精粗多少の上に大差を生せり勿論種類に通有の性質は有れ共其變化は前後の別を知る唯一の資料と云ふも不可なし。

第八 口碑記録

口碑記録は前記七條件の事實と相反する場合は別に徵證する必要なしと雖も否らずして多少關係有る可く思はるゝ際は是非共併せ考ふ可き要目たり殊に人物の如何を決定せんとするに方りては尤も有力なる一資料たる可し。

本邦の古墳調査に要する件々は概ね前記の如しと雖も今回巡見せる當所の荒陵は果して如何なる時代に屬するや又其内に葬られたる人物は如何なる身分のものなりや予小櫃村大字俵田に存する瓢形古墳は何時頃のものなりや右の正確なる事實を知らんと欲せば必ずや内部の如何を探らざるべからず然れ共今日其事を行ふべからざるが故に近傍の陪塚を發く可き手段を採り而して右の外猶一

二の陪塚と思はるゝもの二個及谷を隔てゝ相對するもの二個なりとす他は此塚と直接の關係なければ茲には略せり去れ共今回調査せる後方の塚と相距る七八間の南面に當り今春掘り取れる塚一個有り右の内より遺物一個出でたるに由り與に併せ記すことゝ爲しぬ。

- (甲) 漢鏡 壹面 徑り四寸八分位 但シ合セ木破片、壹
- (乙) 太刀 貳振 壹ハ三尺二寸餘 直刀ナリ 壹ハ二尺八寸餘
- (丙) 短刀 壹振 壹尺餘
- (丁) 鐵鐔 壹枚 寶珠形透シ彫
- (戊) 鐵鏃 數本

祝部壺壹個 但シ火葬人骨入

右の遺物中漢鏡は精巧偉大の品にあらずして比較的小なる方なり且つ蟠龍の變化せる如き模様を附し又銘を略せる等の點は稍や時代の後れたるものならんと考ふ直刀は古式のものなれ共右は平安遷都の後まで行はれたるものなれば確たる點を述ぶること能はず併し鐵鐔の寶珠形なるは其以前の品なる事を證するに足れり次の祝部壺は火葬の骨入れありしにより佛教渡來の後なること明けし要するに以上遺物を出せる古塚は周圍に壕なく内部に玉類を藏せず一所に群集して累々相依れる點より見れば推古以後平安朝以前にして今より一千餘年を経たる事疑ふ可からずと考ふ此見解は中澤學士の如きも同様にて畧ば過りなしと信ず。

以上説く所簡なりと雖も同村人全體の誠意熱心なる有様に感じ聊か所見を記して之を贈る。

明治三十一年九月廿四日

倭田の笠塚

小櫃村倭田字青城臺にあり、其の形狀笠形なればしか稱ふるならんされど一の里傳には弘文天皇挿秧を觀覽あらせられし時風雷雨電暴かにいたり早乙女悉震死し其の笠飛んで此處に集る里民其の上に土を覆うて塚となす故に名づくといふ此の如き不可思議の説も或は信せられし時代もありしか。

大 小 塚

同じ倭田にあり高さ凡三尺周圍九間許りありて圓形なり、傳へいふ白鳳壬申の亂に刀劍類を此處に埋む故に此の名ありと。

山本の蘇我氏の古墳

小櫃村山本字三尺坊にあり、其の狀圓形にして高さ大約十尺周圍三十間許りあるべし里人蘇我氏の墓と稱す。

御筒大明神緣記といふに大友皇子は望陀郡倭田村に祀り白山權現と稱し奉り左大臣蘇我赤兄の墓は同郡山本村にありとあり。

中村國香氏の房總志料に「按に天武帝破大友皇子軍命高市皇子配流左大臣蘇我臣赤兄蘇我果安之子と日本紀に見ゆ然れども蘇我氏何れの國に配すといふ事不見暫上總となして見る時は土人の所謂蘇我馬子なるもの恐は赤兄果安の二蘇我氏を誤るなるべし」とありされど書紀には上由二是亂一以軍不進乃蘇賀臣果安自犬上返刺頸而死とありまた中是日左大臣蘇我臣赤兄大納言巨勢臣比等及子

孫並中臣連金之子蘇我果安之子悉配流以餘悉赦之とあれば果安は軍中にて自死し其子が配流せられしなれば二蘇我氏とせば赤兄か果安の子なるべし而して其の何れの地に流されしかは正史に見る所なし書紀集解云土佐人谷垣守嘗語余曰赤兄子孫今在安藝二世以安藝爲氏相傳赤兄流于安藝子孫因家焉とあり赤兄は安藝に流されしか將た此の地に流されしか未だ考ふる所なし。

西原の飯籠塚

同村西原にあり、山本の蘇我塚の東南の山上に位す弘文天皇五月七日に挿秧を觀覽あらせられしとき風雷雨電暴かに至り早乙女悉く死せり然れども天皇は幸に恙あらせられざりしを以て其の日の供御を此の峰に埋めたりと云ふ倭田の笠塚とひとしく地名に附會せる如き傳説あり。

野持の古墳

小櫃村戸崎字野持にあり高さ大約九尺面積七十坪許の瓢形古墳なり、明治四十二年十二月東京帝國大學の命により理學博士坪井正五郎氏同大學人類學教室助手柴田常惠氏之れを調査し發掘せしに直刀二と馬骨二片とを發見せり。

戸崎塚の腰の古墳

明治四十二年十二月東京帝國大學人類學教室助手柴田常惠氏によりて發掘調査せられしに砂岩によりて構成せられたる石槨ありて其中よりは祝部土器一・鐵鏃五・鹿齒若干を出せり、また其傍に一塚ありこれにも石槨を存せり。

戸崎脇原古墳

小櫃村戸崎字脇原には數多の古墳あり、何れも圓形なり明治四十二年十二月東京帝國大學の命により同大學人類學教室助手柴田常惠氏によりて其の二基を發掘調査せられしに其一よりは鐔の附著せる直刀一を出し其一には墳上に朝鮮土器の破片若干ありしのみにて他に發見せられしものなかりき

戸崎城山古墳

同村戸崎字城山には瓢形と圓形との古墳數多散在せり中に就き瓢形のもの一と圓形のもの二とを明治四十二年十二月柴田常惠氏によりて發掘調査せられしが瓢形のものよりは柄頭一を圓形のものよりは直刀二を出せり。

戸崎中山古墳

同村戸崎字中山にも數多の古墳あり、其中の三個は明治四十二年十二月柴田常惠氏によりて發掘せられ劔一振と鐵鏃六十個とを發見せり。

小櫃村に於ける古墳

小櫃村俵田の小櫃山大古墳の近傍には數多の古墳あり是等の古墳にして口碑傳説あるものは概ね弘文天皇に關係せるものなり。

上新田の上原には多くの古墳ありて宛も群島の如く散在す傳説には白鳳壬申の亂に其の戰死者を葬りし所なりといふ。

末吉の萩の臺にも古墳多しこれも亦上原の傳説と同じく壬申の亂に於ける戰死者を葬れる所なりと傳ふ。

戸崎には野持・塚の腰・脇原・城山・中山・峰・追場・原・市場臺・鶴舞・上原等其他にも數多の古墳あり是等を合算せば二百五十基に及ばん其中野持塚は弘文天皇御生母伊賀采女宅子娘の遺骸を葬りし所なりとし其他は概ね戰國時代北條と里見との戰爭に兩軍の戰死者を葬りし所なりと傳ふ土砂崩壞流失し其原形を損せる今日より之を觀るも其築造實に容易ならず而して兵馬倥傯の際にしてなほ斯る工事を遂行せるを思へば其緯々として餘裕ありしに驚かざるを得ず然るに是等の古墳より發見せられしものは劔直刀の類にして原史時代の遺物に屬す口碑傳説の信を措くに足るべきものなるや否やは之によりても略々察するを得べし。

由來本郡に於ては古墳あれば直ちに戰國時代の戰死者の遺骸若しくは其兵器を埋めし所となすこれ墓制等に就きて研究すること少く時代によりて墳墓に異同變遷あるを知らず徒らに口碑傳説にのみ重きを置き揣摩臆測を逞しうせるに因れる故ならん。

下郡の石神古墳

富岡村下郡字石神の山上にあり高さ大約二十三尺縦十間横五間許にして瓢形をなす墳上に青白の斑ある紋理虎皮に似たる方二尺五寸許の石槨の蓋の如き石あり里人これを甲石と稱せし由なるが今此の石なし傳へ云ふ此の古墳は白鳳年中弘文天皇の後妃耳面刀自の遺體を葬る故に石神山陵と稱すと懷風藻に^上皇太子者淡海帝之長子也云々當夜夢天中洞啓朱衣老翁捧^レ日而至擊授^レ皇子^レ忽有^レ人從^レ腋庭出來、便奪將^レ去、覺而驚異、具語^レ藤原内大臣^レ歎曰恐聖朝萬歲之後、有^レ巨猾間覺^レ然臣平生曰豈有^レ如此事^レ乎臣聞天道無^レ親惟善是輔願大干勤修德災異不^レ足憂臣有^レ息女^レ願納^レ後庭^レ以

充_ニ簀_ノ之_ニ妾_ニ遂_ニ結_ニ姻_ニ戚_ニ以_ニ親_ニ愛_ニ云_々中署_ニさて其息女は前に天智天皇の女御の孕たるを大臣の賜りて不比等公は生れ給ひけるを其腹に生れ給へる女子なるよし大鏡にみえたり紹運録に大友皇子の御女壹志姫王母大職冠_ノ女耳面刀首と載されたるこれなり(長等の山風)

帝大友一女壹志姫王耳面刀首所生也_{從四位下}皇胤紹運(大日本史)

耳面刀首は藤原鎌足の女にして弘文天皇に配し壹志姫王を生み給ひしなり。

市場臺の古墳

富岡村下郡字市場臺にあり、土砂崩壊流出して僅に墳狀をなすを見る大樹の根の蟠屈せる間に石の如きものあり蓋し石槨の一部ならん。

横田の兒塚

中川村横田兒の宮の傍の耕地中にありもとは十坪許の地積ありし由なるが漸く耕鋤する所となり今は一坪に過ぎずして纔に墳狀を存す甲傳に古昔一兒童あり乳母を從へ父を尋ねて此の地に來り或る民家に寓す偶々蓮花を採らんとし誤つて池中に陥りて死し里人此處に葬り呼んで兒塚といふ其後惡疫流行す之を占はしむるに兒は貴紳なるに之を葬るに其禮を以てせざるが故に祟りをなすなりと里人大いに怖れ乃ち祠を建て、之を祀り兒大權現と稱しまた乳母を祀りて乳母神と稱すそれより疫癘頓みに止みしといふ。

小濱の天王塚

波岡村小濱字手古塚にあり瓢形の古墳なり塚の北方には山王塚御所等の地名あり。

大久保の石塚

同村大久保字大久保谷にあり、高さ大約三十尺面積七十二坪許りあるべし石と土とを混用して築かる墳上に石の祠あり地は同村大久保能藏院の所有なりしにより明治の初年時の住職慶山之を發掘し百貫目許りの大石十個と土器三個とを得たりといふ。

古墳は建築の材料により之れを三種に區別し得べし即ち第一土のみにて作れるもの第二石を積みて作れるもの第三土と石とを混用して作れるものこれなり。

本郡の古墳は多く第一種に屬し第二第三種のは未だ發見せられざりしが此の古墳に於て第三種のものを見る稀なりと謂ふべし。

白駒古墳

中村白駒字木落山の山腹平坦なる所にあり面積大約二十坪里人此の地を御塚の臺といふ其南麓に陵東に三つ塚北麓に琵琶ヶ谷と稱する地あり里傳に云ふ建武年中片岡主膳吉長といへる者護良親王の王子楞嚴王を奉じて來り王の薨するや此の地に葬るとまたいふ康永二年壬午(康永二年は癸未に、紀元二千零三年なり)王子の冠・笏・琵琶等を函に納めて埋む故に琵琶ヶ谷の名ありと(上總町村誌の說)又一説に康永二年壬午琵琶ヶ谷より一函を掘出す内に冠・笏・琵琶等を藏す王の遺物なり故に名く里人山田氏笏圖及古記を藏すといふとあり(上總町誌稿)

護良親王の鎌倉樂師堂谷に在らせられし間は官女南の方一人側侍りしが親王の弑せられ給ひし後程もなく其腹に王子出生ありさて其害を蒙らんことを懼れ素性を秘し鎌倉本國寺の日靜上人

(足利尊氏直 義等の叔父) に頼り王子養育のことを託して其身は一人都へ上れり上人素より其王子たることを知らずたゝ慈眼を以て此の孤兒を視養ひ育みて名をば楞嚴丸と名せりやがて得道せしめ妙法房日叡と稱せしめ貞和元年乙酉三月勅命により本國寺は京都六條堀河に移さる(時に日叡十歳なり)然るに鎌倉の地は父親王の御墓所たりかつ本國寺址は宗祖の始めて此の地に小庵を結びし古蹟なれば日叡鎌倉の地を離るゝことを欲せず遂に延文二年丁酉其二十三歳の時鎌倉本國寺を再興せり故に日叡を五世中興と稱ふ師日靜其再誠を悦び日叡が幼名を楞嚴丸といひ妙法房と稱せしを以て寺山號とし楞嚴山妙法寺と號すといふ(太平記梅論鎌倉大日日本史 鎌倉名勝誌相模風土記稿本に據る)

相模風土記稿本には日叡は應永四年十一月九日六十四歳にて寂すとせり然れば應永四年より溯り算するに其生誕は建武元年に當るされど護良親王の弑され給ひしは建武二年七月二十三日にして其後間もなく南の方の分娩ありし由記されれば日叡の生誕は建武二年にしてその寂せしを應永四年とせば年を享くること六十三なり。

陵墓一隅抄護良親王陵の註下に示されたる一説に曰く本國寺日靜上人弟子日叡者爲王之遺胎子慕父墓不欲離於鎌倉叡妙法寺住之云々とあり。

相模風土記稿本に妙法寺釋迦堂本尊釋迦脇に中興日叡の像を安ず長一尺八寸餘大明坊作と云ふ按ずるに三浦郡金谷村大明寺の傳に同寺六世中興を大明坊日榮と云ふ此人の作なるべし日榮は京本國寺四世日靜の弟子にて應永八年十一月十六日寂すとあり。

同書に護良親王社は妙法寺山上にあり是中興日叡の父宮なるを以て其頃祀りしと云ふとあり

護良親王甲斐國遺跡考に相模國東鎌倉村妙法寺住職三津日慧頃日(明治二十三年の頃)書を宮内大臣に呈出し其中興の祖日叡は親王の御子にて御母君は官女南御方なるを以此際御系譜へ追記せられんことを上陳せりと云ふとあり。

鎌倉舊蹟地誌には妙法寺楞嚴山蓮華院と號す松葉谷の北方にあり寺傳に據れば宗祖始めて小庵を結びしと云妙法寺山上に護良親王の社あり當寺中興日叡の父君なるを以て其頃祀りしと云日叡第五世は大塔宮護良親王の遺子にて楞嚴親王妙法房と稱すと云ふと記せり。

以上の説に據れば楞嚴王は鎌倉妙法寺中興の祖にして父親王の墳墓を慕ひ鎌倉を去るを欲せず遂に其地に於て六十三歳にて遷化せられしものゝ如し。

この白駒古墳を楞嚴王の御墓なりとなす説に至りては未だ其正しき證左を得ずまた琵琶ヶ谷より王の遺物を發掘せりとも或は埋めしともいふ康永二年癸未は建武二年乙亥よりは九年目にして即ち王九歳の時に當れり其の説甚だ疑ふべし。

大井の古墳

中村大井には山巔に數基の古墓あり圓形をなす

高塚及び峰山の古墳

小絲村根本高塚及び峰山の山巔には數基の古墳あり其形狀は圓形なり

小絲村に於ける古墳

小絲村根本には高塚峰山を始めとし和田品子等の山々其巔に圓形の古墳數基を存す同村大井戸絲川

及び福岡等には丘陵の頂及び臺地に圓形の古墳あり中には數基群集せるものありて其數多し福岡の古墳よりは直刀を出せり今小糸小學校に藏す。

阿久留塚

秋元村鹿野山字裏門にあり高さ約六尺面積百三十坪許り楕圓形をなす傳へ云ふ日本武尊東征の御時此の山にて東夷の眞長阿久留を誅し給ひ其首を埋めし所なりと。

植畑の古墳

同村植畑志保澤藤吉氏宅地の背後にあり瓢形の古墳にして面積大約 三方には濠渠を設けたるものゝ如くなれども今水田となれるにより確と判じ難し墳上には巨松ありて樹下に祠あり八幡大神を祀る塚に名稱なくまた傳説を有せず蓋しこれを古墳なりと知りし者久しくなかりしが如し。

奥米の南塚北塚

三島村奥米字上の原に二古塚あり一を南塚と稱して高さ八尺許周圍十三間に餘る一を北塚といひ高さ約三尺周圍四間許共に圓形なり里傳に云ふ永祿の頃里見氏は辨當山に北條氏は上の原に鱒川を夾みて對陣す里見勢行厨を開き晝食をなすが如くす北條勢之を見て少しく警備を怠る里見勢急に襲うて之を走す乃ち其戰死者の屍を收めて此所に埋むと。

房根の塚

同村宿原字房根にあり高さ約十尺周圍二十間許なる瓢形の古墳にして石槨の一部ならんと思はるものゝ露出せるを見る里人傳へいふ享保三年照光寺住權大僧正源宥此の古墳を祭り且つ此處に葬られ

しと其後寛保二年常住寺住大僧正圓察を葬れりと墳上に墓石あり。

内裏塚

飯野村二間塚字東内裏塚にあり高さ大約六間面積五段四畝許前方後圓の古墳にして其南方には濠渠の跡を存し西方は水田東北との二方面は陸田となれりと雖も築造の當時には濠渠を繞らせしものなることを察せらる後圓の頂は削平せられ平坦となり其の周圍には雜樹鬱茂し他は悉く松樹を以て蔽はる。

此の古墳に關しては古來種々の口碑あり傳説あり記録あり而してまた東京帝國大學人類學教室助手柴田常惠氏の調査せられし記事あり又文學博士喜田貞吉氏の論説あり今是等の主要なるものを左に掲ぐ

大堀村の南隣に二間塚村といふ處有彼土に大なる森あり人見川を隔る事三町許も有べし妙見山より未に當り直下に見ゆ古より相傳て内裏屋敷といふ先年彼土の人語りしは何れの頃にや彼土の民山田を穿古塚を發く棺中に衣冠の人坐す容貌生るが如く冠服新鮮異氣人を襲姑ありて裝束消ゆ土人怪集り見るもの其氣にふれて盡く面疾をうくと相傳水上親王の廟也と按に親王は水上真人川繼が事也天武帝の曾孫にして鹽燒王の子也鹽燒王は廢帝の朝藤原押勝が亂に連坐す其子川繼桓武帝の朝に反し伊豆の三島へ配流の事詳に續日本紀に見ゆ伊豆と上總の周集郡は一葦の地なれば彼地にて終り給へる成べし(房總志料)

内裏塚といふは一小山なり土人曰此山瓶を以てつきたてたり今にても土をのけて鍬もて窺へば至

て堅く音するなり此地は砂地成故年を経て陵夷せん事を憂てかく致せしと土人杯聞傳へたりと塚下に小祠有祠下に堅八九尺横五六尺の石見ゆ舟石と云ふ船の形せりと其北に當りて小塚有近き頃是を發き見るに石櫃の中に衣冠正しき人有忽骸骨と成其骨長大也里人六三と云木挽丈け高き人成しが是と脛骨をくらべたるに六三が脛より長かりしと六三は夫より脛に病出來て終に歿せりと石櫃の蓋は同所善立寺へ持行碑に作り今に存すと此邊三條塚九條塚飯野の保の内に有飯野の保の内に其外名もしれぬ塚數多有

(房總志料續篇)

沿革考に周集郡二間塚村に大荒墳二所有里俗是珠名が墓也と言傳ふ(同上)

今按に内裏塚と云は南の小山と北の墓と二ヶ所有是より南の方四町許隔て美名塚と云有是珠名の墓なるべし萬葉集に水長鳥安房爾繼有梓弓末乃珠名者胸別之廣吾妹腰細之須輕娘子之其姿之端正爾如花咲而立者玉梓乃道行人者己行道者不去而不召爾門至奴指並隣之君者豫己妻離而不乞爾鎰在倍奉人乃皆如迷者容艷緣而會妹者多波禮曰有家留按に末の珠名は末子の事にはあらず安房に繼たる周准の珠名なるべし周准は周准郡の古名なり(同上)

末ノ珠名娘ノ墳二間塚村ニアリ萬葉集ニ出ル所ノ美人ナリ(南總郡郷考)

人見村近地有稱内裏塚一小丘上置小祠祠下有石舟縱九尺許幅可五尺由來不可知焉土人云此山疊重磚而所築也於今發其土以鋤穿之則碧々有堅硬之響或云此地爲砂礫故積年之後或恐其缺崩築造之堅實極如是乎又近旁有稱三條塚九條塚者其他無名古塚多吁古稱存口碑者可無故乎然而歲世久遠不能知其實蹟可憾哉今按稱内裏塚者南小丘與北古塚有二所從是南距四町許有稱美名塚是乃珠名墓也乎

又沿革考載周集郡二間塚村有大荒墳二所里俗謂之珠名墓又萬葉集有詠上總末珠名娘一首及短歌曰(水長鳥安房爾繼有梓弓末久珠名者胸別之廣吾妹腰細之須輕妹子之其姿之端正爾如花咲而立者玉梓乃道行人者己行道者不去而不召爾門爾至奴指並隣之君者豫己妻離而不乞爾鎰左陪奉人乃皆如迷者容艷緣而會妹者多波禮曰有家留)按下總國葛飾之間々手子名及本國周准珠名著其上世之美人也哉大堀村南有茂林曰二間塚村地隔人見川可二百步自妙見山上方坤位可下瞰古來相傳稱内裏趾往時有土人耕山田發古塚出石棺棺中有衣冠人端坐容貌如活服飾新鮮異氣襲人須臾而形容衣冠共消灰土人大恠集觀而觸其氣者皆患面疾云石棺之蓋作碑存于本村善立寺焉相傳是乃水上親王之墓也按水上親王者謂水上川繼也。天武帝曾孫鹽燒王之子也王當廢帝朝連坐藤原押勝亂其子川繼亦桓武帝朝謀叛配流豆州三島事詳日本紀蓋伊豆與本郡相距一帶海耳故川繼或來終焉於此地者乎又按村有二荒墳而二間塚之稱起也一則珠名墓一則可川繼墳也(上總國誌)

上總國誌の説は房總志料及び其の續編より採りたるものゝ如し。

周准郡二間塚ノ西方字内裏塚ニ在リ其形瓢ニ似タリ塚麓田圃ヲ繞ラス蓋舊溝址ナリ塚高凡五十尺周圍二百五十間松檜雜樹叢生ス頂上數歩平坦ニシテ八幡神社有リ傳ヘ云フ保科氏ノ此地ヲ領セシヤ謂ラク既ニ内裏塚ト稱ス蓋皇族ノ御墓ナラン而シテ人民ヲシテ猥リ之ニ登ラシムルハ不敬是ヨリ大ナルハナシト爲ニ此社ヲ設クト社内ニ土偶人ノ首ヲ藏ス極メテ古雅ナリ往年此近傍ヨリ掘出セシ者ナリト云フ社殿ノ下ニ一大巨石有リ石槨ノ蓋ナルガ如シ近傍別ニ九塚アリ呼テ一條二條塚等ト稱ス其狀概皆本塚ニ似タリ

按ズルニ本塚亦詳ナラズニ子塚鏡峯ノ例ニ就テ之ヲ推セバ蓋古國造ノ一ナラン中村國香云一ハ珠名女ノ墓一ハ氷上川繼ノ墳ナラント然レトモ是レ里人ノ口碑ニ據リテ之ヲイヘルノミ若シ舊事記ヲシテ誤ナカラシメバ本塚ハ蓋所謂須惠國造及ビ其族ノ墳ナルベシ(上總國誌稿)

内裏塚西方字内裏塚ニ在リ大約周圍二百五十間高五丈瓢形ヲ爲ス頂上平坦巨石有リ石槨ノ蓋ノ如シ而シテ近傍一條ヨリ九條塚ト稱スルモノ即九墳アリ形狀稍同シ然レトモ其由ル所傳ハラス蓋村ハ上古須惠國造ノ在リシ地ニシテ内裏塚ハ國造ノ祖先其他九個ハ代々ノ墓ナラン曾テ領主保科氏石上ニ八幡神社ヲ造營シ里人ノ不敬ヲ禁ス樹木茂生セリ或ハ云フ本郡ノ人珠名女美人ノ聞アリ万葉集ニ末珠名娘子ヲ詠ズル歌并ニ反歌ヲ載ス。

金門爾之人乃來立者夜中母身者田菜不知出曾相來

按スルニ土人口碑ニ内裏塚ヲ以テ珠名女ノ墳ナリト然ルニ其構造宏大ニシテ決シテ尋常人ノ墳ニアラズ而メ今歌意ニ由リ珠名女ノ人トナリヲ察スレバ頗ル淫風ヲ帶ブ曾テ淑女窈窕ノ態アラズ乃知ル珠名女ノ墳ニ非ラズシテ正シク是レ國造ノ墓ナラン(上總町村誌) 内裏塚に關し吉田東伍氏の大日本地名辭書に載する所は上總國誌と上總町村誌とより出て渡邊菊次郎氏の君不去に掲げしはまた上總國誌の抄録なれば茲には省く。

上總君津郡飯野村内裏塚 柴田常惠

去る十月十三日坪井理科大學教授は大學の命を受け千葉縣下に出張せられ上總君津郡飯野村に於て古墳の調査を爲し其翌日を以て歸京せられたり予は教授に隨うて其地に到りしが命に依り尙

ほ止まりて同村大字二間塚なる内裏塚と名くる大古墳に就き充分の調査を試むること、爲り同大字諸氏の熱誠なる助力の下に前後六日間の實査に従事し十九日を以て歸京するに至れり今左に其概要を報告すること、爲すべし。

飯野村は木更津の西南約三里を隔て彼の砲臺の在る富津の東に接し北は青堀村の低地を越えて近く東京灣を控へ東より南に廻りて貞元吉野の二村と連り北の方小絲川の左岸なる周西村に於て妙見山の横はれる外には南の方吉野に至る迄四邊すべて平坦なる砂地にして青堀村に比して飯野村は一般の高臺を成せり大字二間塚は村の北部を占め大小の古墳樹林の間に散在し其數頗る多くして内裏塚古墳の瓢形なる外未だ特別の名稱を有せざる圓形のものあり之に接して大字下飯野に三條塚九條塚等の瓢形なるあり大字二間塚を中心として其四周に古墳の分布を見る然れども其存在するは高臺の處にして青堀村の低地の如き比較的積成の新らしき地には存在を認むることなし而して古墳の大なるは高さ數間數反歩の面積を有し小なるは數尺の高さにして一畝に満たざる廣さなるもあり

内裏塚は大字二間塚小字東内裏塚に存し南々西を前面と爲す前方後圓の古墳にして廣さ五段四畝高さ約六間附近に於て最も規模の雄大なるものとす周圍に數反の堀を圍らせるが其舊態を止むるは南方のみにして西方は水田と爲り東北の二面は陸田と化せしと雖も明かに築造當時の規區を察するを得塚の全體には松樹の植付らるゝも後圓の頂きは少しく削平せられ東面せる一祠宇を存し祭神は現今八幡宮とのことにて東の方より石階を設けて登ること、爲り居り其面積三畝十八歩社

殿の縁下に一巨石の露出するものあり吉田氏の日本地名辭書に引く所の町村志には二間塚は一に内裏塚と曰ふ大約周圍二百五十間高五丈瓢形を爲す頂上巨石あり石槨の露れたるならん近傍に九個の小墳あり近代の領主保科氏此に小祠を立てたり蓋須惠國造の墳墓ならん末珠名娘子のものに非じと云へり而して内裏塚を二間塚と稱する如く説けども上總國志には村内に二荒塚の存するより二間塚の稱起りしものとせりその由來の何れなるかは別問題として兎に角現今に於ては内裏塚の別名に二間塚と稱せらるゝことなし從來この内裏塚は地方に於て甚しく畏敬せられ塚上に放尿するが如きは勿論樹枝を折り草を刈ることも憚られ馬を牽き上れば久しからずして其馬斃れ乘馬して上らんとするに至りては神罰忽ちに報ゆとせらる舊幕時代に保科氏の領地たりし頃より今に至るまで此の如き畏敬は連綿として敢て汚瀆の所爲を犯すものなき有様なりとす。

内裏塚の周圍に於ては東北約二十間に在る圓塚は先年發掘せられしが二個の石槨を有し一は中央に於て南を正面とし大石を刻みて組成せられ一は其の西方數尺を隔ちて並行の位置を爲し規模前者に比して小さく箱形のものにて羨道を有せざるものゝ如く發見の遺物に至りては毫も知るに由なしこの塚の南脚に於て透し彫り鍍金の銅鞘を有する太刀二振を發掘せしことあるも年代は古墳築造の時代と隔たるものなりと認めらるまた西北なる圓塚には朝鮮土器片散亂するあり。

北方に位する古塚は小形の前方後圓のものにて骨片直刀鐵鏃銅梳鐵質小札作の鍍金環及び高坏壺俵形等の齋瓶を發見し之に伴うて鳥形の劔類も出てたりこのことなれど玉類に至りては聽く所なかりし更に西南二十間許を隔てる處にては塚形を爲さざる平地を掘りて一二尺の深さより數十年

前首より上のみの埴輪人形を發見し爾來塚上の八幡社内に藏せらるゝものにて高さ八寸四分廣さ七寸八分鼻梁より後頭まで八寸二分濃き帶朱褐色にして朱を顔面に塗抹することゝ左右に垂れたる頭髮は何れも其下端を缺損すれども原形を知るに難からず更に今回飯野村に調査を爲す動機は九月の頃同村なる小熊小學校長と木村祠堂とが該土偶を携へて其鑑定を人類學教室に請はれしより起りしなりまた北方四五丁を隔てる上野にては所謂彌生式土器の發見せらるあり其地域青堀村大字大堀に屬すれども二間塚に連接せる高臺にして縣道を以て區別する低地とは明かに分つべきものとす。

内裏塚の實査は最初社殿の前面即ち東方に露出せる巨石の一端に對し土壤の取除けを試みしも社殿に妨げられて充分に其の作業を爲す能はず更に其後方に露はるるものに就て爲したれども同様の理由の爲に満足なる結果を得る能はざりしが計らずも社殿の前面なる平地に石槨の存在するを發見しその調査を終りたる後社殿を前面に曳きて先きに中止せるものの土壤を取除け此にまた一石槨の存するを發見して其の調査を濟まし舊態に復して社殿を原位置にすゆると共に塚の周圍に於て埴輪の存否をも實査したりき。

調査の順序に依り東方の石槨を甲と爲し西方なるを乙とせんに甲は塚の形狀に従ひて南々西より北北東に延び長さは十九尺巾は中央の底部にて二尺七寸上部にて二尺二寸北端の底部は二尺五寸其上部にて二尺三寸南端の底部は二尺九寸上部は一尺八寸高さは中央にて二尺五寸北端にて二尺三寸南端にて三尺五寸即ち略ぼ北部に至りて狭小と爲り南部に於て廣濶せるもの如し乙は畧ぼ

甲に並行して設けられ長さ二十五尺巾中央の底部にて三尺三寸少しく上部に於て狭まり高さ二尺九寸南北の兩端にては多少の狭まりを爲す如しと雖著しく差異を認むることなし甲乙兩石槨の間には十尺の隔たりを有し何れも塚の上部に在りては其底面は殆ど同一平面の上に存せり。

其の構造また二者共に一樣にして美道の設けなく砂岩質の割石を以て組立蓋には同質の大なるものを横に渡し底部には數寸の砂ありて拳大の圖石を二重または三重に布けるを見る砂岩質を以て造られたる石槨は歲月の久しきに亘り浸蝕の作用を受けて其質脆弱となり崩落を來して舊態を保つる能はず爲に正確なる内部の廣狹を測定するに頗る不便を感じたりき而して之が爲めに槨内は土壤の充つる所と爲り一二の埴輪片在するものあるより或は嘗て一旦鋤犂の入りしこともあらざるかを疑ひたれど實査の結果に依りて其痕跡なく夫は唯上部の間隙より墜落せしに過ぎざるを確めたり。

槨内配列の状態は略圖を以て示すが如く甲にありては北方に頭を向けたる二人の遺骨は整然として存在し共に仰向きと爲り腕を折り足を延ばしその左右側には並行して直刀及び劔を横へ槨の北面には小刀鉞鎌など一處に纏められ人骨の南方に鐵鏃の存するもありたり。

乙にありては中央部より稍々北して一面の漢鏡表面を上にして据へられその附近に鍍金製のビジュウ鐵鏃あり北方に於て鉞鐵鏃鏑矢等あり南方に於て直刀劔鐵鏃等存するものありしが大抵槨に並行して横へられたり。

更に發見の遺物に就て略述すれば甲に於ては「い」に於て鉞三個（一は長さ三寸八分及の巾二寸別

圖「ト」に二分の一として示す一は長さ三寸五分及の巾一寸八分一は長さ三寸三分及の巾二寸）小刀一（現存の長さ七寸六分柄を南にす）角形の鐵棒一（現存の長さ六寸七分四分角）鎌一（現存の長さ四寸巾一寸一分）「ろ」の人骨は「い」との間に二尺餘を隔ちて頭蓋骨を存し「は」に於て直刀二一は長さ二尺五寸一は現存の長さ二尺五寸五分にして骨製の鐔を有し柄の先端を缺損するもの共に刃を内部に向く）その南に接して鐵鏃數本先端を北と爲す「に」に於て直刀二（一は長さ三尺三分柄を北にし一は長さ三尺二寸二分柄を南にし共に刃を内部に向く）鐵劔一（長さ二尺五寸柄を北にす）その南に當りても鐵鏃數本あり「は」の人骨は「ろ」の頭蓋骨より六尺五寸餘の隔たりを有しその頭蓋骨あり「へ」に直刀一（長さ三尺五寸二分柄を北にし刃を内面に向く）「と」に鐵劔一（現存の長さ一尺一寸八分柄部先端を缺く）而してその鐵鏃は鏝形または木葉形のものとする。

乙に於ては「い」に鐵鏃數十本の腐蝕して一魄と爲れる者ありその西に接し「ロ」に骨製の鳴鏑九個（三個の圓孔を穿ち形狀大さ別圖「イ」に示すが如し）別圖「ロ」の如き矢に附するもの數個「ハ」に於てまた鐵鏃あり「ニ」には鉞一あり「ホ」に漢鏡一面（徑四寸四分縁邊の断面三角形を爲さざるもの表面を上方に向く布帛を以て裹みしと見え布目の附著するあり紋様は鏑の爲に不明なれど長宜子孫鏡かと察せらる）「へ」に鉞一（長さ四寸五分及の巾一寸三分）「ト」鐵片「チ」に別圖「へ」の如き骨製のもの一（四角の彫込みを有し縁邊に一小孔を有するものにて用法不明）「リ」に銅製の金具四（一は長さ五寸二分鋏形を爲して内面に反り表面に鍍金を施す破損のため全形を知る能はざれども裝飾を兼ねたるものとして何物かに附著せしものと思はる一は巾九分長さ七分のビジュウ他の

二は三片を連接せるものにて長さ六寸一分中九分表面に鍍金を施し周縁には簡單なる裝飾的彫刻をなし合せて九本の短き銅釘を打てるを見れば馬具の革紐に用ひしものと思はる先きのビジョウは之に附著せしものか「ヌ」は刀劍の柄と思はるるもの二（一は長さ三寸骨製のものヲ附す一は長さ五十五分の鐵劍の一部）「ル」は直刀二（一は長さ三尺四寸一は現存の長さ二尺六寸五分共に柄ヲ北にす）「オ」は直刀一（長さ一尺五寸）「ワ」は直刀一（長さ三尺二寸五分柄ヲ北にし及ヲ内面に向く）「カ」は直刀一（現存の長さ二尺二寸五分柄ヲ北にし及ヲ柳側に向く）「ヨ」は鐵槍一（長さ九寸五分袋鞘となれり）「タ」は鐵棒狀のもの一（現存の長さ五寸七分）鐵劍一（長さ一尺九寸五分）他の同様のもの一を存せり。

甲乙兩石槨に就て比較を試みるに人骨は甲に於てのみ發見せられたれど石槨の構造の大なる鏡鳴鏞などの發見品の種類と數量に富める等より推して乙の方が此古墳の主石槨なるを思はしむ而して兩者共に齋瓶珠玉の類は毫も發見することなくその石槨の位置石質構造及び發見品の同様なるは年代を異にして造られしにあらず殆んど同時に葬られしを知るべし。

次に二個の遺骨に就て調査するに何れも第三後臼齒の既に發生せるに依りて成年の人なるを知るを得且つ其發生未だ充分ならず齒牙の珞瑯質甚しく磨滅するに至らずその下顎骨の狀態より推し四十歳前後の年輩なりと思はる男女の別に至りては頗る明瞭ならざれども副葬品の狀態よりせば寧ろ男子と認むべきが如し而して同時代に造られたる主石槨と思はるる乙の方に却て人骨の存在せざるは埋藏の差異より全く腐朽せしものと思はれず當初より屍體を藏めざりしものなるべくその

の中央に我古代御魂代として用ひられたる鏡の存せし處より推すに或は儀墓の類にて二個の遺骨は其殉死者のものならざるかとも考へらる。

埴輪の存否を搜索するに前方の部に於て前面より約三十尺を隔てる塚の中腹に立てらるるを發見せり上部は土砂の爲に崩壊せられ完全なるものを見出し難かりし下部は規則正しく一列に並べられ塚の東側に圍れるを見れば全體の周圍に並べられしと思はる相互の間隔は約一寸を有す其色は前述せる一偶と相似たる濃き帶朱褐色底部の徑八寸五分あり破片を接續して考ふるに全體の朝顔形せるものと一旦上部に於て細まり更に漏斗形に開けるものとあり前者は四箍を有して二對の圓孔を穿ち高さ二尺三寸許あり後者も三箍を有して一對の圓孔を穿ち高さ略ぼ前者に等しかりしが如くなれども充分に知り難しまた後圓部の頂上にて二個の石槨を圍んで埴輪の存せしは乙石槨の南部より西方に廻りて一重に立て並べるに之を知るを得東北の二面は削平の爲に其存在を確むる能はざれど附近に多數の埴輪破片の散亂する所より見ればもと存在せしものなるを知る而して乙石槨の南端の上部に埴輪の立てらるるに依りその圍らす所の輪廓は大ならざりしと思はれその削平の土壤は多くも三四尺の厚さに過ぎざりしものなるべく而してこは恐らく此處に社殿を設くるに際して行はれ石槨の蓋石たる巨石に掘り當てたるが故削平を之に止めて社殿を建築し其際埴輪破片が石槨内に墜落したるものもありしと考へらる土偶は發見するに至らざりしが何物かの一部と思はるる破片を發見したりき此内裏塚の實査に依り諸種の事項に就きて斯學上に裨益すること多けれども特に有益と認むるは二石槨の存在と鳴鏞の發見とにあり二石槨の存在は山城

葛城郡太秦村松本武藏北埼玉郡荒木村小見上野群馬郡元惣社村などに存すれども多くは構造に精粗の別ありて位置も相隔たり内裏塚の如く二者相接近し構造相類し確に同時代に築造せられしと思はるゝは少なし鳴鏑は古く古事記の根堅洲國の條にも見え書記天智の條にもまた記され支那にありては匈奴の冒頓が之を作りしこと史記に掲げらるゝなど兎に角我國に於ても支那にても鳴鏑の上代に存在せしことは記録の上に現はると雖もその實物に至りては嘗て古代より發見せられしことなく奈良正倉院に藏する帝室の御物に類似物の如きものあるに止まりこは聖武天皇の遺愛の御物なれば奈良時代より溯る能はざりしに此度の發見に依りて一新事實を見るに至りしなり書記には八目の鳴鏑などありて八孔のものありし如くにして正倉院の御物は即ち八孔此度のもは三孔而して前者は球形を爲し後者は橢圓形を呈せるを見るべし。

此處に至り内裏塚の規模宏壯なるに比し内部の石槨が割合に大ならず一個の珠玉類の發見せらるゝことなく齋瓶類の毫も存在することなき等諸種の方面より推して其築造の年代が比較的に上代のものにあらず古墳としては少くとも中期以後のものたるを認め得べし。

而して其發見する處の鐵鍬の別圖「ハ」に示せるものを正倉院御物の別圖「ニ」に掲ぐるものと比ぶるに略ぼ同一の形狀を爲しその年代が兩者の間に甚しく隔絶せるを想はしめず少くとも正倉院御物の鐵鍬が此度發見のものと同系統を逐うて造られしは明かなり然れども正倉院御物の鳴鏑と此度發見のものとは比ぶるに著しく其形狀を異にし兩者の間に或年代を隔つる如く考へらるれど同一種類のものにて形狀を異にせるもの共に行はれしこと少からねば直に之あるが爲に年代に非

常の差異を置かんと欲するは極めて危険のことたり兎に角關東に於ける古墳は從來奈良朝を下るべき證據の確たるものなくその終末期は同時代以前にありしものと思はるるが内裏塚に於ても古墳としてはたとひ後期に屬すと雖も少くとも奈良朝以前のものなりと認めらるゝなり而して其北方にある圓塚の内裏塚と同じく二個の石槨を有せると其構造の狀態より見れば兩者の間に甚しき年代の相違あらざるを知り西南にある古塚の發見品に於ても亦同様なる所より推すに其附近の古墳は大凡同一時代に築造せられしものにて思ふに推古天皇より奈良朝以前のものと察せらるゝなり。

その葬る所の何人なるかに就ては或は彼の萬葉集に見えたる末珠名娘子とし若くは天武の玄孫水
上川繼に擬するあり別に證據の取るべきなく漫然説を立つるに過ぎず此等の批判に至つては歴史
上の問題に亘り別途の攻究に待たざるべからずされども恐らく未だ當れる者ならざるべし思ふに
飯野村附近の地は須惠國の境域に屬し相模より東して走水の水道を渡らんか飯野村の西隣なる富
津に上陸せざるべからず日本武尊が東征は實にこの順路を取られしものにしてまた上代に於ける
要路たりしなり而して今の富津の地には古墳の存在するものなく飯野村に至らんか小糸川を擁し
て地勢廣開古墳相連り上代に於て疾く人民群居して須惠國の主腦なりしを察せしむ然れば此地に
存する古墳の多くは何れ當時の有力者を葬りしものにて内裏塚の如き雄大なるものに至りては國
造の如き大勢力家の威嚴の下に營まれしものなるを知るを得べく果して何人を葬りしものなるや
は歴史上の攻究に依るべけれど須らく地方に於ける上代豪族の墳墓として相當の敬意を拂ひ之が

祭祀の途を講ずべきは當然の事なりと信するなり。

終に臨み此有益なる實查を爲すに當り郡會議員山田常藏二間塚區長長島和平飯野尋常高等小學校長小熊吉藏祠堂木村啓藏の四氏及二間塚を擧げたる諸氏の非常なる盡力と多大の勞苦を寄與せられしを謝す。

上總飯野の内裏塚と須惠國造

喜 田 貞 吉

一、須惠國造

飯野平野はもとの上總國周准郡の地で古へに所謂須惠國造の根據地であつた國造とは言ふまでもなく其の地土着の豪族で祖孫世襲して其の地方を領し當初は小獨立國王の狀を呈して皇化の布及と共に朝廷に仕へて本領の安堵を得依然私地私民を領して封建時代の大名の如きものであつたのである中には勿論皇族や功臣が新に朝廷から任命されたものも少くなかつた而して此の須惠國造の如きは恐らく前者に屬するもので日本武尊東征以前から此の地方に住し次の御代に國造として任命されたと傳へられたものであらう國造本紀に成務天皇の朝茨城國造の祖建許呂命の兒大布日意彌命を國造に定め賜ふとある茨城國造は天津彥根命の孫筑紫刀禰の後で實に天孫系を標榜した家であつた其の一族は古事記に凡川内國造(河内)額田部湯坐連(三河)木國造(紀伊)倭田中直(大和)山代國造(山城)馬來田國造(上總望陀郡)道尻岐閉國造(磐城)周芳國造(周防)倭俺知國造(大和)高市縣主(大和)蒲生稻寸(近江)三枝部造等の祖とあつて廣く各地に分布し更に國造本紀には

其の外にも此の須惠國造及び相模の師長國造などが其の族として傳へられて居るのである天津彥根命は出雲國造の祖天穗日命などと共に皇室の御先祖たる天忍穗耳尊の御兄弟におはす神だとある蓋し天孫瓊々杵尊の高千穗降臨とは別の經路を取つて此の大八洲國に渡來されたといふ傳説を有して居たものでもと大和朝廷とは別に各地に繁延して居た天孫族であつたのであらう而して此の須惠國造は實に其の後裔だと傳へて居たのである。

二、飯野平野の古墳群―内裏塚の發掘

飯野の地方には比較的古い時代に屬すと認められる古墳墓が可なり多い蓋し古への須惠國造家關係のものが多いのであらう中に就いて最も大なるものは所謂内裏塚で主軸は南々西に向ひ長徑約八十間短徑約四十間後丘の高さ約六間もと周濠を繞らした整備したる形の前方後圓墳である而して之につぐものを九條塚と云ひ是も周濠ある前方後圓墳で長さ約五十三間徑約二十五間高さ約四間に達して居る此の外にも三條塚、古塚、ワラビ塚及び某某無名の前方後圓墳があつて孰れも大體に南々西に向つて居る又割見塚と稱する方墳白姫塚、守山塚、其の他無名の圓墳が其の附近に數基點在して居る其の白姫塚は明治廿六年四月發掘して長方形の石室があつたといふ蓋し縱穴式壙であつたらしい内裏塚の後圓部は頂上稍削平せられてこゝにもと無格社の八幡宮の祠があつた塚に就いては何等の傳説も遺つて居らぬがたゞ古來土地では特別に畏敬したもので飯野藩主でも其の側を通るに馬より降りたといはれる位若し塚の上で放尿でもしようものなら忽ち罰が中つたと言はれて居る數十年前其の附近の畠で偶然埴輪土偶の頭部を發見した卜者か何かに見て貰つた

ら親王様だといふことで塚上の八幡社に之を納めた又其の地に近い小塚の南脚からも嘗て二口の鍍金透し彫の鞘を有する太刀を発見した是も何か塚に由緒あるものとして此の神社に奉納した是は衛府の太刀とか飾太刀とかいふべきものらしく無論古墳時代のものではない蓋し後人此の塚を畏敬するのあまり何等かの信仰から奉納したものかも知れぬそんなこんな事があつて内裏塚の由緒はます／＼重きをなして居たところがたま／＼神社合祀の問題が起つた塚上の八幡社を他に併さうといふのだそこで此の際然るべき學者に此の塚の實地を調査して貰つて幸にこれが何某親王の御墓だとか何某の命の御陵とかでもといふ様な事がわかつたなら此の八幡社を他に移すどころではない他の神社をこゝへ合併してます／＼此の塚の威靈を闡揚し神社の莊嚴を加へる様にしたといふのが此の塚發掘の動機をなしたものだ此の希望を以て前記の小熊吉藏君と八幡社の祠官木村某君とが態々所謂親王様なる埴輪土偶の頭を東大人類學教室に持參して故坪井博士の調査を請うた斯くて博士指導の下に柴田常惠君の發掘となり其の結果は須惠國造の如き大勢力家の威嚴の下に營まれたるものであらうが果して何人を葬つたものかわからぬといふことになつた其の調査報告は柴田君の名で人類學雜誌二二の二四九號。明治三十九年十二月に掲げられて居る斯くて其の八幡社は遂に領主保科家鎮守のお稻荷様なる飯野神社に合祀せられ發掘品は一部宮内省へ一部東大へ他は前記親王様なる土偶の頭や飾太刀などと共に其の社に納まることゝなつた塚上には大正四年二月二十八日附で「舊領主保科正貞十一代之後裔正昭書」とあつて「内裏塚」と刻した碑が建て居る。

右の次第で調査の結果は依頼者の豫期に副はなかつた様ではあるがもつ／＼豫期が無理なので墓誌銘でも無き限り古墳を掘つて見てそれが何某の墳墓であるなど、容易に決定されるべきものではないそれを決定し得ぬ所に學者の慎重なる態度が伺はれるのである考古學の知識の皆無な明治初年頃の事ならばいざ知らず近ごろになつてもなほ屢々無雜作に古墳墓の主が考定されてつひには動かすべからざるものになる場合のあるを見て自分は奇蹟と思つて居るのである。

三、内裏塚調査の結果

併しながら内裏塚の調査は學問上からは餘程有益なものであつた塚の形や周圍の濠や幾重もの埴輪を繞らしたところは全く近畿に見る普通の前方後圓墳と同一である其の後圓部の頂上に割石を以て積み上げた縦穴式墳。柴田君の報告に石槨とあるもののある事も亦是等と同様であるが其の墳が二個相並んで居るところは頗る普通と趣を異にして居る柴田君の調査によると兩墳ともに塚の方向。西南に延びて東の者長さ一丈九尺幅は底で二尺五寸乃至二尺九寸上部で一尺八寸乃至二尺三寸深さが二尺五寸乃至三尺五寸西のもの長さ二丈五尺幅は約三尺三寸深さが約三尺九寸兩墳の間隔約一丈であつたといふ其の墳の位置が後丘の中央線を避けて左右には均等の塲所にあつたのは珍しい大體古墳は一人限りの爲に作るといふ場合は比較的少く大寶令には三位以上若くは氏宗か別祖かたなければ墓を營むを得すとある隨つて特別の人の外は一墓數屍を收めた筈である否特別の人の墳墓でも後に往々それへ合葬、陪葬、附葬が行はれて居るのである隨つて一墳内にも數體の遺骨があり一墓内にも往々數墳を設けてあるのである此の一墳數墳ある場合は別として一墳内に數屍が

発見された時には從來多くはそれを以て殉死者を同時に葬つたのだとか流行病或は戦争の爲に死んだ者の合葬墓だとか解せられた様であつたが是は決してそんな譯ではない現に此の内裏塚の東壙からも二軀の遺骨が出て柴田君の報告によれば共に成年男子らしかつたといふ一は必ず後から合葬したのであつたに相違ない。

次に一墓數壙ある場合には普通には當初墳墓營造の際に主壙を其の中央に作り後に之に陪葬すべく適宜の地に他の壙を作るべき筈である一は大にして墳丘の中央部にあり他は之と並んで左側にあつたといふ是は其の中央の大きな方が主壙で初に墳丘を造つた際に設けられ左の小さいのは後からそれに並べて作つた陪葬の壙だ然るに此の内裏塚のは大小の別はあるがともかく二個の壙が中央線を離れて左右ほぼ均等の位置に並んで存在して居た事は珍らしい現象と謂はねばならぬ今其の二個の壙の距離が一丈に及んで居るのを考へて見ると其の中間に幅三尺内外の壙を設けるの餘地は十分にある或は思ふも此の中央に主壙があつて柴田君が先年發掘した左右の兩壙は後に陪葬の爲に設けられたものであるかも知れぬ筑後三池郡上楠田の石神山といふ古墳には頂上に三個の石棺があつてやはり中央と其の左右とにあつたといふこの壙も多分其の様な風であつたと察せられる而して其の中央のが何時か發掘せられたので其威靈を畏こんでこの壙に神社が設けられ此の塚が特に土地の人々の畏敬する所となつたのではあるまいか。

又柴田君の報告によれば左右の壙内には發掘の際既に土壤が充ちて居て一二の埴輪片すら其の中に交へて居たといふ其の土壤は或は積み石の間隙から流れ込んだとも言はれようが埴輪片まで交へて居たといふては或は社殿造營の際若くは中央の壙が發掘された際多少此等にも手を着けたのであつたか威靈を恐れて其のまゝにしたものかも知れないのである發掘品に就いては柴田君の報告に詳細を悉くされて居るからこゝにそれを繰り返すの要を認めぬが塚や壙の大きな割合に遺品の甚しく貧弱なのは是れ亦其れが主壙でなくして後に陪葬せられたものであることの傍證ともなるであらう。

尙又小熊君の配附された見取圖によれば東の小さい方の壙には二軀の遺骨が共に頭を北にして前後して南と北とに安置せられ其の北方の遺骨の頭部に近く鉞と鎌左右に各直刀二又南方の遺骨の右に直刀一左に鐵劍一、兩遺骨の中間右方に鐵鏃が一束あつたのみだといふ可なり貧弱だと言はねばならぬ又西の大なる方の壙からは比較的豊富な遺物が出て居るか遺骨らしいものはなかつたといふ其の遺物の中には骨製鳴鏑の様な珍らしいものや鉄具らしい鍍金の銅製金具や極めて粗末な製品ではあるが和製らしい漢式鏡も一面あつた當時柴田君の發表された意見では「甲（東）乙（西）の兩石槨（壙）に就いて人骨は甲に於てのみ発見せられたけれども石槨の構造の大なる鏡、鳴鏑などの發見品の種類と數量に富める等より推して乙の方が此の古墳の主石槨であらう而して兩者共に齋瓶も玉もなく構造も發見品も同様なのを以て見れば兩者殆ど同時に葬られたもので乙の方は初から屍體を藏めず鏡を御魂代とした儀墓の類で甲の方の二個の遺骨は其の殉死者のものならざるかとも考へられて其の築造の年代は塚の規模の宏壯なるに比して内部の石槨（壙）が割合に大ならず玉も齋瓶もない事から推して古墳としては少くも中期以後のもので其の鐵鏃や鳴鏑を正

倉院御物と比較した結果推古朝前後から奈良朝以前のものと察せられる」といふことであつた何しろ今から十五年も前の調査であつて當時未だ考古學者の間に縦穴式墳の事があまりよく知られて居ない程の時代であつたから右の様なことに考定せられたのも無理ならぬ事ではあるが研究の餘程進んだ今日では或は柴田君も斯かる見解は下されなからうと思はれる。

四、内裏塚の年代に關する管見

自分の見る所によれば此の塚は推古天皇以後奈良朝以前といふ様なそんな新しい時代のものはなくてやはり近畿地方に於て前方後圓式の帝王陵が盛んに行はれたのと同時代のものであると信する横口式墳を有する墳墓は元來支那の陵墓の型式を輸入してそれから漸次我が國で發達したもので是は塚の割合に墳が大きく石材も巨大なものを使用してあるが前方後圓式のもつは我が國で古く發達した型式で塚の割合に墳が小さいのを常とする此の内裏塚の墳の如きはむしろ比較的大なるものだと云つてもよい而して此の型式の墳墓は京畿の帝王陵では應神仁德諸帝から安康雄略諸帝の頃までを最隆盛期として其の前後にも及んで存在を見るのであるが欽明敏達諸帝の頃が其の最終期であるらしい勿論京畿の帝王陵を以て必ずしも直ちに遠く離れた東國地方のものを推す事の出来ない場合もないが少くも此の内裏塚の如く殆どすべての點に於て京畿の帝王陵と一致して居るものゝ如きはやはり同じ時代に於て地方の小領主たる此の地の豪族須惠の國造が帝王陵の制に倣つて築造したものであつて決して推古朝などゝそんな降つた時代のものではない無論奈良朝前などゝ引き下くべからざるものたることは毫末の疑を容れないのである。

五、國造勢力の消長と其の墳墓

既に述べた如く地方の國造は國のミヤツコと呼ばれて天皇に對しては一の臣僚たるに過ぎないがもとはそれ〴〵小獨立國の君主であつた中國九州等西部地方にあつては彼等は夙に支那に交通して支那の天子から王爵を授けられ頭に王冠を戴き王者の陵墓を營んだものであつた彼等は大和朝廷の御稜威の下に屬し本領の安堵を得て國造に任命せられて後もなほ往時の例をついで「君」の稱號を有するものであつた天子に對しては一の臣僚であつても其の地方にあつてはやはり王者の威嚴を有するものであつた後に朝廷の威力のます〴〵發展すると共に彼等は次第に其の勢力を失ひ官使に對してまで甚しく恭順の態度を取らぬばならぬ事となつた安閑天皇の御代に内膳卿膳臣大麻呂勅を奉して使を遣はして珠を伊甚(夷瀼郡)に求めしめた然るに伊甚國造等京に詣る事おそく時を踰えて命せられた珠を進めない大麻呂大いに怒つて國造等を縛し其の所由を推問したるこゝに國造稚子直等大いに恐懼し後宮の内寢に逃れ匿れたところが生憎にも春日皇后それを御存知なく内寢に入つてそれを見て驚愕顛倒されるといふ大騒ぎとなつた稚子直其の闖入の罪を謝し己が所領を割いて伊甚屯倉を立て之を皇后に獻じた是はたま〴〵事によつて日本紀に採録された一例であるが亦以て當時すでに東國の國造が甚しく勢力を失つて居たことを知るに足らう斯くて中央政府から國司が派遣さるゝに及んでは勿論其の監督を受けて願使に甘んじて居たことであらう大化改新後となつては從來の國造は國司の下に郡領を世襲してやつと祖先以來の關係を繼承して居るに過ぎずると一獨立國の君王たることを示した「キミ」の姓の如きも奈良朝頃になつては全く田舎